ナルニア国物語

魔術師のおい

1



C・S・ルイス　土屋京子・訳　玉樹庵・画

（光文社古典新訳文庫刊）

ベーカー街には
まだ名探偵
シャーロック・
ホームズが住み

宝ル子バ
子ども
ルーイシャム通りで
宝探しをしていた頃――

これは
そんな時代を
舞台にした

わたしたちの世界と
ナルニア国との行き来が
どのようにして
始まったかを伝える
物語である



第1話 ドアをまちがえた！(前編)

ヒョコ…！

男の子？

…でも
となりの家には
年取った兄妹しか
住んでいなかったはず

それに
しても…

こんにちは

こ
ん
に
ち
は

…えっ

名前

なんて
いうの？

ポリー
そっちは？

ディゴリー

スッ

ポッ

へんな
名前！

『ポリー』ほど
へんじゃ
ないよ

へんだわ

へんじゃ
ないよ

どっちにしても
わたしは顔ぐらい
ちゃんと
洗いますからね

あんたも顔
洗ったほうが
いいんじゃない？

とくに
さっきまで——

…そうさ

想像
どおりだよ

誰だって
泣きたくなる
だろうさ

これまでずっと
広々とした
郊外に住んでて

庭の先のほうには
川だって
流れてたのに…

……こんなひどい
穴ぐらみたいな街に
連れてこられてさ

ポニーがいて

ロンドンは
穴ぐらじゃ
ないわ

それに父さんが
インドへ
行っちゃってて

伯母さんや
頭がどうかなってる
伯父さんといっしょに
暮らさなくちゃ
ならなくなって…
かんべんして
ほしいよ

…どうして
かっていうと
母さんの
看病をして
もらわなくちゃ
ならない
からで…

そんで
母さんが
病気で

もうすぐ…

……もうすぐ
死んじゃい
そうだったら
……

…知らなかった

ごめんね

…ね ねえ

ケタリーさんって
ほんとに頭が
どうかしてるの？

頭がどうか
なってるか

そうでなけりゃ
何か別の秘密が
あるんだと思う

伯父さんの書斎は
いちばん上の
屋根裏部屋なんだけど

伯母さんは
ぜったいに書斎へ
行っちゃだめって
言うんだ

それだけでも
怪しいのに

食事のときに
伯父さんが
ぼくに何か
言おうとすると――

カチャ

カチャ

カチャ…

あー…

アンドリュー

ちかこの子に
かまわないで
ちょうだい

ディゴリーは
そんな話は
聞きたくないと
思いますよ

さ ディゴリー

庭に出て
遊んで
いらっしゃい

――なんて
言うんだ

伯父さんは
どんな話を
しようとするの？

わかんない
じっさいに
話すとこまで
いったこと
ないから

…けど
それだけじゃ
ないんだ

きのうの
夜――

十日前

叫び声が
聞こえたんだ！

ほんとだよ！

もしかして
伯父さん
頭がどうかなってる
奥さんを屋根裏部屋に
閉じこめてるとか？

うん
ぼくも
それは考えた

それとも
偽金づくり？

でなけりゃ
海賊だったのかも
しれない

『宝島』の最初のとこに
出てくる男みたいに
昔の水夫仲間から
ずっと身を
隠してるのかも

!!

うわぁ！
わくわく
する！

となりの家に
そんな
おもしろい話が
あったとはね

そっちから見りゃ
おもしろいかも
しれないけど

そんな家で
暮らさなくちゃ
ならないと
なったら…

どうかな？

夜寝る前
ベッドにはいって
目がさえてるときに

ギッ

ギギ…

ギ…

アンド
リュー伯父さんの
足音が廊下を
近づいてくるのが
聞こえたら

どう思う？

それに
伯父さんって

すごく
おっかない
目つき
してるんだ



せっかくの夏休みなのにずうっと雨ね

そうだね

…

そうだっ

《密輸商人の洞窟》

案内してあげる！

？

屋根裏？

こっちよ



わあっ

すごいや！

ねえ
このトンネル
どこまで
続いてるの？

きみん家の
端のところで
トンネルは
おしまいに
なってるわけ？

ううん

壁は屋根までは
張り出してないの
だからトンネルは
ずっと続いてるわ

どこまで
続いているかは
知らないけど

じゃあ テラスハウスの
いちばん
むこうの端まで
行けるってことだね

でしょうね

…あっ
そうか！

それって
ほかの家にも
はいれるって
ことじゃない？

そんで 泥棒に
まちがわれるって
こと？

ぼくは
ごめんだね

わかったような口
きかないの

わたしが
考えてたのは
あんたの家の
もひとつ先の家の
ことよ

その家が
どうかしたの？

空き家
なのよ

お父さんが
言ってたけど

わたしたちが
ここに
越してきたときから
ずっと
空き家なんだって

Digory

Polly

それは…

ゴクッ

ちょっと
のぞいて
みないとね

どうやったら
一軒おいて
むこうの家まで
到達したって
わかるかな？

梁と梁の間隔と
同じ歩幅で
歩いたら

ひとつの部屋に
梁が何本あるか
わかるるんじゃ
ないかしら？

屋根裏には
納戸と
お手伝いさんの部屋の
2つの部屋があって

その間に
梁4本分くらいの
廊下があるから
合わせて…

4

gory Polly

あ空そわこ
これで家の幅が
わかるから
その二倍の距離の先に
空き家が
あるってわけね！

けどさ

ほんとは
空き家じゃ
ないんじゃ
ないかな？

どういう
こと？

誰かが内緒で
住んでるん
じゃない？

夜しか出入り
しないようにして

光が
もれないように
ランタンを
使うとか

きっと
ものすごい
凶悪犯の一味が
住んでて

ぼくたち
つかまって
ひどい目にあうんだ

だってさ
何年もずっと
空き家に
なってるなんて
おかしいよ

何か秘密が
あるはずだ

お父さんは
下水がつまってる
からだろうって
言ってたけど？

ふん！

大人ってのは
いつもつまんない
説明ばっかり
考えるんだ


ガン!!
よし
行こう！
つづく

第2話 ドアをまちがえた！（後編）

音をたてちゃ
だめよ


いま
あんたん家の
屋根裏部屋の裏よ
ミギギ…
これで全体の
半分まで来たはず




フニ…

…やる？

そっちが
その気なら

受けて
立つわよ

ガッ

わっ！





ピキ

ピキッ

ピキッ

ピキッ…





だいじょうぶよ
誰もいないわ

これは…

……
まずいよ…

……空き家
なんかじゃ
ない

誰か来るまえに
逃げたほうが
いいよ

ねえ
あれ
何だと思う？

そんなの
どうでも
いいから

早く
しないと…





わっ!!

ハイハイ!!

これでよし!

これなら
あのバカな妹も
はいってこられまい!


きみたちが
来てくれて
うれしいよ

ちょうど
子どもが二人
ほしかった
ところなんだ

…すみませんが
ケタリーさん

もうすぐ
お昼ごはんの
時間なので

わたし
帰らなくちゃ
ならないんです

ここから出して
いただけませんか？

すぐには
無理だね

ポキ

ポキ

こんなチャンスを
逃すわけには
いかない

わたしは
子どもが二人
ほしかったんだ

いいかね

わたしは
偉大な実験を
している
最中なのだ

モルモットを使って
やってみたのだが
たぶんうまく
いったと思う

…しかし
モルモットからじゃ
何も話が聞けんし

もどってくる
方法も
教えようが
ないのでね

いいですか
アンドリュー
伯父さん

ほんとうに
もう昼ごはんの
時間なんです

すぐにみんな
ぼくたちを
探しはじめますよ

ここから
出してくれないと
困ります

ヒィッ

、、、
困ります？

とんでも
ないことに
なっちゃったね

ひそ

伯父さんの
ごきげんを
取ったほうが
いいかな？

ひそ

……いま
お昼ごはんに
行かせて
くださるなら
ごはんのあとで
もどってきても
いいですけど

…ほう

だが

ちゃんと
もどってくると
どうしてわかるかな？

まあいい

わかったよ

行かなくちゃ
ならんと言うのなら
そうするしかないな

きみたちのような
若い人が
わたしのような
老いぼれと
話をしたって
おもしろくも
何とも
ないだろう
からね

わたしが
ときどき
どんなに
わびしい
気分になるか

きみたちには
わからない
だろう…

…しかし
そんなことは
どうでもいい

昼ごはんに
行きなさい

行く前に
プレゼントを
させてほしい

ただし

こんな
むさくるしい書斎に
女の子がやってきて
くれるなんて

めったに
あることでは
ないからね

ニコニコ

とくに
失礼ながら
あなたのような
かわいらしい
お嬢ちゃんはね

ミ
……
このおじさん
頭がどうか
してるというほど
変でもないかも…

お嬢ちゃん
指輪は
お好きでは
ないかな？

その黄色いのや
緑色の指輪の
ことですか？
とっても
すてきだと
思います！

緑色のは
だめなんだよ

なさ緑
さしあげられ
ないんだが

黄色の指輪なら
どれでもよろこんで
プレゼントしますよ

愛をこめて

こっちへ
来て
指にはめて
ごらん

うわあ
信じ
られない！

あのブーン
っていう音
ここに来たら
だんだん大きく
聞こえてきたわ

まるで指輪が
音を出してる
みたい！

おもしろい
ことを言うね
お嬢
ちゃん

ポリー！
馬鹿なことを
するな！

さわっちゃ
だめだ!!







つづく

第3話　ディゴリーとアンドリュー伯父(前編)



ポリー！

さわっちゃだめだ！

……

ガッ

声を出すな！

声をたてれば
おまえの母親が
聞きつけるぞ

恐ろしい
思いをさせれば

母親のからだに
さわるということが
わからんのか

悲鳴を
あげたのも
まあ無理からぬ
ことではある

それで
いい

人が消えるのを
はじめて見れば
ショックだからな

この
わたしでさえ
このあいだ
モルモットが
消えたときは
ぎょっと
したものだ

あの夜の
叫び声が
それだったん
ですか？

…ほう

それでは
あれを
聞いたんだな？

わたしを
監視して
おったのかね？

そんなこと
してません

…それにしても
ポリーは
どうなったん
ですか？

おめでとうと
言って
くれたまえ

あの女の子は
この世界から
いなくなった

——消えたのだ

実験が
成功したのだ

ポリーに
何を
したんです？

送り
出したのだよ

…まあ
いわば

……それ
どういう
ことですか？

――別の場所へ

ｴｪｰ

…そうだな

ぜんぶ話して
聞かせてやろう

おまえは
ルフェイ
ばあさんの名を
聞いたことが
あるかね？

大伯母さんか
何かじゃ
ありませんか？

ちょっと
ちがうな

ルフェイ
ばあさんは
わたしの
名付け親だ

ほれ

そこの壁に
かかっとるのが
ルフェイ
ばあさんだ

この写真…

ゴゴゴ…

この人
知ってる？

……

お母さん

？

ぜんぜん
好きになれそうに
ない顔だと
思ったんだ…

その人
何か
まずいことでも
したんですか？

まあな

こいつ…

『まずい』の
意味にもよるがね

世間は心が
狭いものさ

それで
閉じこめ
られるような
羽目になったのさ

たしかに晩年の
ルフェイばあさんは
かなりいかがわしい
人物ではあった

愚かなことを
したもんだ

精神科病院に
ってこと
ですか？

いやいやいや

そうではない

そっちの方面ではない

刑務所にはいっていただけさ

なんだって！

いったい何をしたんですか？

…哀れな女よ

まことに愚かなことをしたものだ

いろいろあってな

いちいち細かくは言わんが

わたしにはいつもたいへんよくしてくれた

それがポリーとどう関係あるんですか？

さっさと――

まあ待ちなさい

ルフェイばあさんは
死ぬ前に
釈放されたんだが

病床にあった
晩年には
ほとんど人を
近づけなかった

わたしは彼女に
目通りがかなった

ごく少数の
一人なのだ

ルフェイ
ばあさんは
無知な人間を
きらうように
なった

凡庸で

わかるね

わたしも
同じだ

しかし
ルフェイばあさんと
わたしは
同好のよしみでな

死ぬ二三日前の
ことだった

ルフェイ
ばあさんは
わたしを呼んで

秘密の
ひきだしをあけて
中にある小さな箱を
持ってくるように

…と言った

ばあさんの
家にある
古い机の
ところへ行って



わたしは
指先のうずきで
直感した

その箱を
手にした
瞬間

その箱には
たいへんな秘密が
隠されている
ということをな

ルフェイ
ばあさんは
その箱を
わたしに
渡して

自分が
死んだらすぐに

箱をけっして
開けることなく

これこれしかじかの
儀式をしたうえで
焼き捨てるように…
と約束させた

わたしは
その約束を
守らなかったがね

最低？

…最低ですね

ああ
なるほど
つまり
良い子は約束を
守らなくちゃ
いかんということを
言いたいのかな

たしかに
そのとおりだ
まことにもって
文句の
つけようもない

おまえが
そういうふうに
教えられて育ったのは
たいへんけっこうだ

しかし もちろん
おまえにも
わかると思うが

その手の
決まりごとは
女子供や召使
あるいは
世間一般の連中には
たいへん
けっこうだとしても

深い知識を有する
学究の徒や
偉大なる
思想家や賢人には
とうてい
あてはまらない
ものなのだ

わかるかねディゴリー

わたしのように秘めたる叡智を持ちあわせておる人間は

世間一般の楽しみごとに無縁であると同じく

世間一般の決まりごとには縛られないのだ

いいかね

わたしのような人間は

孤高なる運命をさずけられておるのだ

…要するに

自分の望むものを手に入れるためには

何をやってもいいと思ってるんだな

もちろん
わたしは
長いあいだ
箱を開けは
しなかった

非常に危険なものが
はいって
おるかもしれんと
わかっていたからだ

わたしの
名付け親は
きわめて
人間ばなれした
女性だったのでね

ほんとうの
ことを言うと

ルフェイばあさんは
この国で妖精の血を引く
最後の人間の一人
だったのだ

要するにだね
ディゴリー

おまえは
妖精の血を引く
名付け親を持つ
（おそらく）
最後の人間と
話をしておる

…という
ことだ

どうだ！

おまえが
年寄りに
なったころには
自慢の思い出話に
なるぞ

…その人は
悪い妖精だったに
ちがいない

それで
ポリーの
ことは？

ガバッ

おまえも
しつこいな！

なんで
そんなつまらん
ことばかり
聞きたがる！

…ゴホン

わたしが
最初に
取り
かかったのは

もちろん
箱そのものを
調べることだった

それは非常に
古い箱であった



その時点で
すでに
わたしには

その箱が
ギリシア時代の
ものでもなく
古代エジプトの
ものでもなく

バビロニアや
ヒッタイトや
中国のものでも
ないことぐらいは
わかっていた

そのような国々より
はるかに時代を
さかのぼった
ものだったのだ

——ああ

ついに真実を
見つけた日こそは
記念すべき日で
あった

その箱は
アトランティスの
ものだった

来ア失われし幻の
アトランティス島から
来たものだったのだよ！

ということは
つまり
ヨーロッパで出土する
石器時代の遺物より
何百年も古いということだ

しかも
石器時代の遺物のような
粗末で素朴な物ではない

太古の昔からすでに
アトランティスは
偉大なる都市であり

宮殿や寺院や
学者たちが
存在したのだ

その
あいだにも

わたしはほかの
さまざまな方法で
魔術一般について

多種多様な知識を
身につけていった

その結果

箱の中身が
どのような
ものであるか
だいたい見当が
つくようになった

わたしは
いろいろなテストを
おこなって
可能性を絞っていった

その過程で
何人か邪悪な
変人どもと
交誼を結ぶことになり

じつに不愉快な
経験も
しなければ
ならなかった

そのせいで髪が
こんなに白くなって
しまったのだ

魔術師というものは
おいそれと
なれるものでは
ないからな

おかげで
からだまで
こわしたが
それは回復した

そしてついに

はっきりと
わかったのだ

ミキッ

アトランティスの箱には

われわれの世界が始まったばかりのころに

別の世界から持ちこまれた

あるものがはいっていたのだ

つづく

第4話　ディゴリーとアンドリュー伯父（後編）

アトランティスの箱には

われわれの世界が始まったばかりのころに別の世界から持ちこまれた

あるものがはいっていたのだ

……

……何？

ただの土さ

見た目は
何の変哲もない

細かい

乾いた土だ

しかし
その土を
さわらぬよう
つらつら眺め

その一粒一粒が
別の世界に
存在したものだと
考えたとき——

なんだ

そんなもののために
一生を費やしたのか
と言うかもしれん

いや
別の惑星では
ないぞ

惑星は
われわれの世界の
一部であって

それなりの
距離を進めば
行き着くことができる

そうではなくて
正真正銘
〈別の世界〉

ここと
別の物質界
とは

別の宇宙のことを
言っておるのだ

この宇宙を
永遠にどこまで
進んでいったところで
ぜったいに
到達できない世界

魔法の力を使う以外に
行くことのできない
世界……

いいかね！

わたしには
わかっていた

しかるべき形に
作ることさえ
できれば

その土には
もともと
存在した世界へ
人を引きもどす
力がある
ということを

ホキッ

…しかし
問題は

しかるべき形に作る
という部分だった

これまで
わたしの実験は
すべて失敗だった

モルモットを使って
やってみたのだが

何匹かはただ
死んでしまったし

何匹かは
小さな爆弾のように
飛び散った――

残酷なこと
するんですね

なんで おまえは
そう話の腰を
折るのだ！

モルモットなんぞ
そのために
あるんじゃないか

わたしが自分で
金を出して買った
モルモットだぞ！

どこまで
話したかな？

さて と…

……ああ
そうだ

そして ついに

わたしは
指輪を作ることに
成功したのだ

それが
黄色の指輪だ

しかし ここで
新しい問題が
もちあがった

黄色い指輪が
それに触れた生き物を
〈別の場所〉へ
送りこむという
点については
かなり確信が持てたのだが

そいつを連れもどして
むこうが
どんな世界だったかを
聞けなけりゃ
役に立たん

…ということだ

London

……では
送りこまれた
動物たちは
どうなるんです？

もどって
こられないんじゃ
とんだ迷惑じゃ
ないですか！

おまえは
どうして
まちがった
見方ばかりするのだ

これが
いかに偉大な
実験であるか
わからんのか？

誰かを
〈別の場所〉へ
送りこむ目的は

そこが
どういう世界で
あるかを
知りたいからなのだ

じゃあ
どうして自分で
行かなかったん
ですか？

……

だと……？

わたしが？

…この
わたしが

おまえは頭が
おかしいに
ちがいない！

わたしのような
老境にある人間に

とつぜん別の世界へ
放りこまれる
ショックや危険を
おかせと言うのか

わたしのように
健康をそこねておる
人間に

そのような
非常識な話は
生まれてこのかた
聞いたことがない！

おまえは
自分の言ったことが
わかっておるのか？

考えて
みなさい

〈別の世界〉
なんだぞ？

何が
存在するか

どんなものが
おるか
わからんのだぞ？

だからポリーを送りこんだって言うんですか？

あきれてものが言えませんよ伯父さん

遠慮なんかするもんか

そんなのは卑怯者だ

自分で行くのが怖いような場所に女の子を送りこむなんて卑怯者のすることだ！

薄汚れた小僧にそんな口をきかれてたまるか

黙りなさい！

おまえにはわからんのだ

わたしは偉大な学者なのだぞ

老練なる魔術師にして

ただいま実験の最中にあるのだぞ！

もちろん実験には
実験材料が必要だ

まったく
あきれた小僧だ
この調子じゃ
モルモットを使う前に
本人たちの許可を
得るべきだったなどと
言い出しかねん！

偉大なる叡智に
到達するには
犠牲が必要なのだ

しかし わたしが自分で
行くなどということは
馬鹿馬鹿しくて話にならん

それでは まるで
大将をつかまえて
一兵卒のように
戦えというように
等しいではないか

もし わたしが
殺されでもしたら
わたしの生涯を
費やした研究は
どうなるのだ？

つまんない
おしゃべりは
やめてください

ポリーを
連れもどして
くれるんですか？

いまその話を
しようとして
おったのに

おまえが無礼にも
話の腰を
折ったのではないか

緑の指輪が

わたしはついに
連れもどす方法を
発見したのだ

この世界へ
引きもどして
くれる

だけど ポリーは
緑の指輪を
持ってませんよ？

さよう

それじゃ
もどれないじゃ
ないか！

伯父さんが
ポリーを殺したも
同然だ！

もどれるとも

誰かが
黄色の指輪をつけて
あの子を追いかけて
いけばいい

そして
緑の指輪を
二つ持っていくのだ

もうひとつは
あの子が
もどってくるために

ひとつは自分が
もどってくるために

そういう
わけであるから
ディゴリー

ここでお前が
臆病風に
吹かれんことを
祈るばかりだ

わが一族の中に

ええと――

口惜しいからな
義侠心と騎士道精神を
持ち合わせぬ輩がおっては
レディを助けに行くだけの
難儀をしておられる

黙れ！

あんたに
その義侠心だの
何だのがあったなら
自分で行ってる
はずだろう

だけど
あんたは自分じゃ
行かないんだ

わかったよ

ぼくが
行くしか
ないようだな

あんたは
人でなしだ

最初っから
計画して
たんだろう

ポリーが
何も知らずに
行ってしまえば

ぼくが
追いかけるしか
なくなるって

もちろん
そうさ

わかった

ぼくが行く

けど
これだけは
先に言っておく

ぼくは
きょうまで
魔術なんて
信じなかった

だけど
それがほんとうに
あるんだって
ことがわかった

そうだとすれば
昔からあるおとぎ話は
そこそこほんとうの
話だってことになる

そんで あんたは
そういう話に出てくる
心のねじくれた
残酷な魔術師そのものだ

ぼくが読んだ
おとぎ話に出てくる
悪い魔術師は

どいつも
こいつもみんな
最後にはかならず
懲らしめを受ける
話になってた

あんたも
そうなるに
決まってる

当然の報いさ

いい気味だ

…やれやれ

おまえのように
女ばかりの中で
育ったのでは
無理もない

子どもの
考えそうな
ことだ

わたしの身に
ふりかかる危険まで
心配していただくには
およばないよ
ディゴリーくん

迷信を
持ち出したと
いうわけか

それより お友だちに
ふりかかる危険を
心配したほうが
いいんじゃないかね？

むこうへ
行ってから
だいぶ時間が
たっている

むこうの世界に
何か危険が
あったとしたら……

手遅れでは
泣くに
泣けないぞ

心にも
ないことを

…けど
こんな無駄話は
もうたくさんだ

どうすれば
いいんですか？

おまえはまず
その短気を
コントロールすることを
おぼえる必要があるな

さもないと
大きくなったら
レティ伯母さんのように
なってしまうぞ

それでは
よく聞くように
さて

この指輪の魔法は
肌にじかに
触れた場合にしか
働かない

手袋を
はめていれば

こうして指輪を
手に取っても・・・

ほれ

だから
ポケットに
入れておけば
何も起こらない

何も
起こらない

ただし

言うまでもないが
ポケットに
手をつっこんで
うっかり指輪に
さわらんように

黄色の指輪に
触れた瞬間

おまえは
この世界から
消える

そして
〈別の世界〉にいるときに
緑の指輪に
触れればおそらく…

もちろん これは
まだじっさいに
試していないので
あくまでも予想であるが

おまえは
むこうの世界から
消えて
こちらの世界に
ふたたびあらわれる

……と
考えられる

それでは
この緑の指輪を
二つ

おまえの
右のポケットに
入れてやろう

ニヤラ

どっちのポケットに
緑色の指輪が
はいっているか
よくおぼえて
おくんだぞ

緑の『み』は
右の『み』だ

一個は
おまえ用

もう一個は
あの女の子用だ

それでは自分で
黄色の指輪を
手に取りなさい

わたしなら指に
はめておくがね

そうすれば
落としてなくす
心配がない

……ねえ

お母さんは
どうなるの？

ぼくがどこへ
行ったかって

もし お母さんが
聞いたら？

さっさと行けば
それだけ早く
もどってこられる
ということだ

だって
ほんとうに
もどって
こられるかどうか

わからないん
でしょう？

ああ
いいとも

ふ…

好きなように
すればいい

階下(した)へ行って
昼ごはんを
食べておいで

あの子が
〈別の世界〉で
野生の動物に
食い殺されようが

溺れ死のうが

飢え死に
しようが

二度ともどって
こられなくなろうが
それでいいなら

わたしにとっては
どれも同じことだ

お茶の時間の前にでも
プラマーさんの
奥さんのところへ行って
知らせてあげるといいよ

お嬢さんには
二度と
会えないでしょう

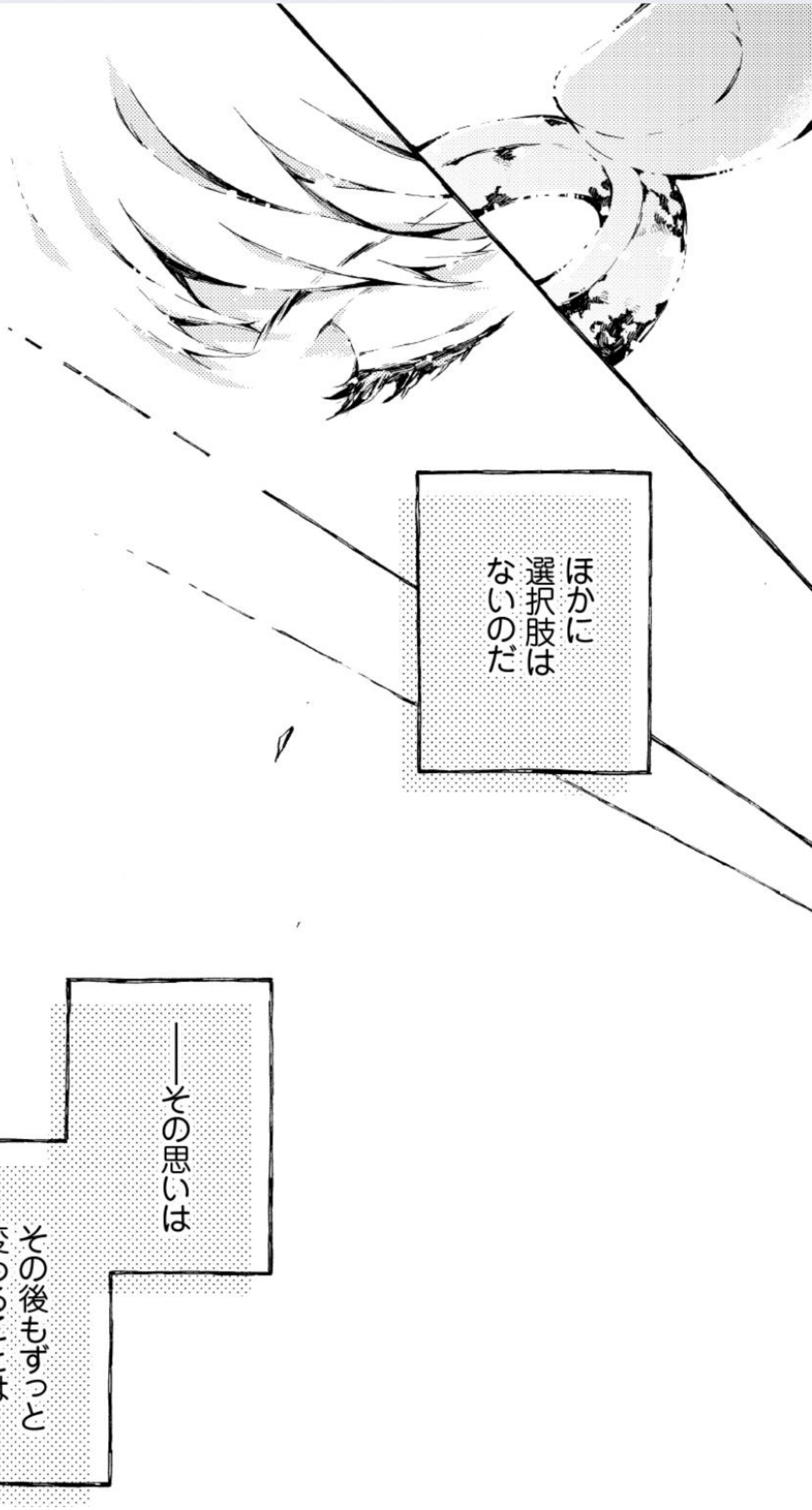
…とな

おまえが
指輪をつける
勇気がない
ばっかりに
気の毒なことだ

くそっ！

ぼくの背が
高かったら
あんたの頭を
ぶんなぐって
やるところだ！

…

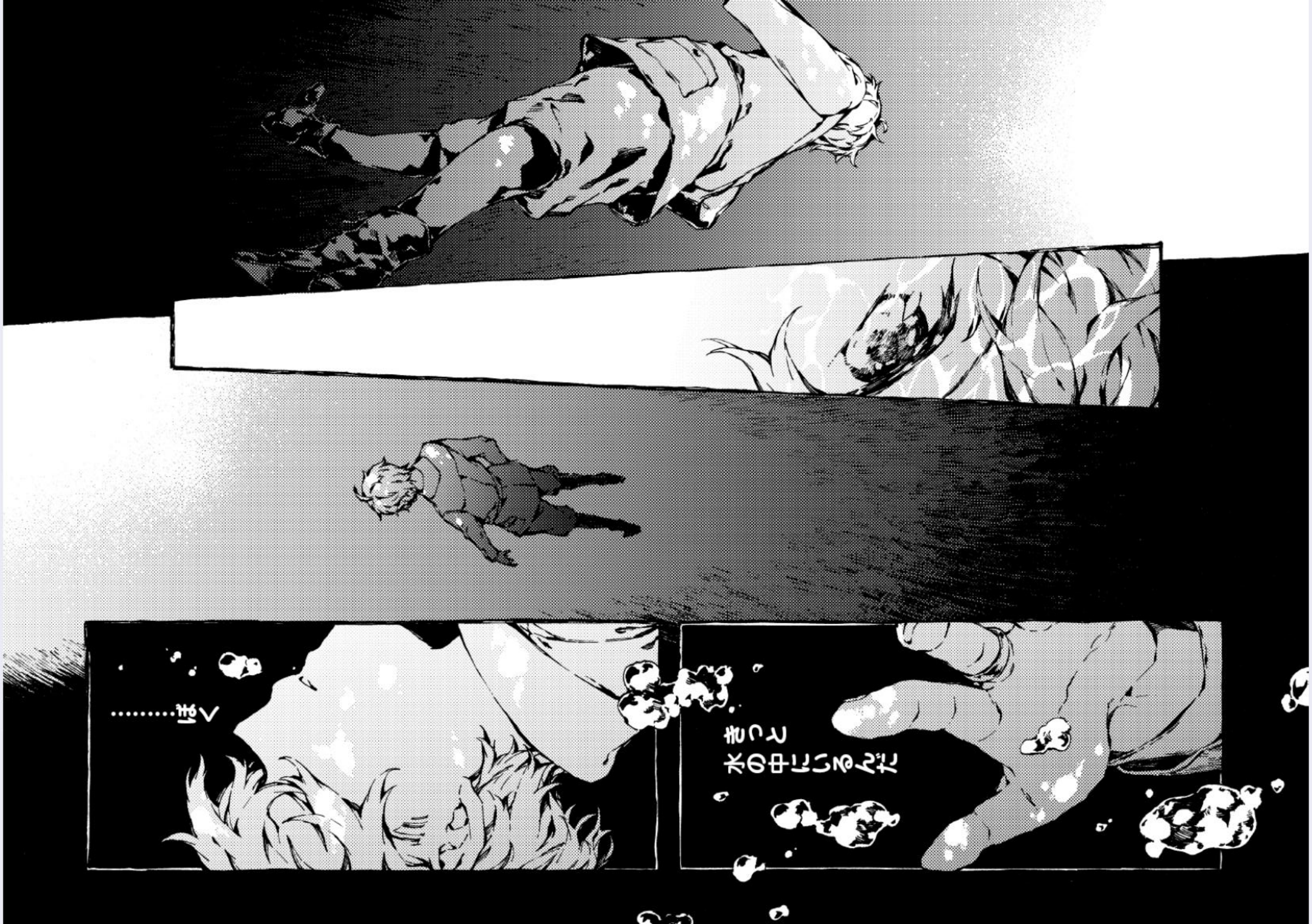


つづく

第5話　世界のあいだの森(前編)






ハ発……
なぜ私にこの日の光が
下りない

ドキ…

…というか

水の下、
いるのかな？

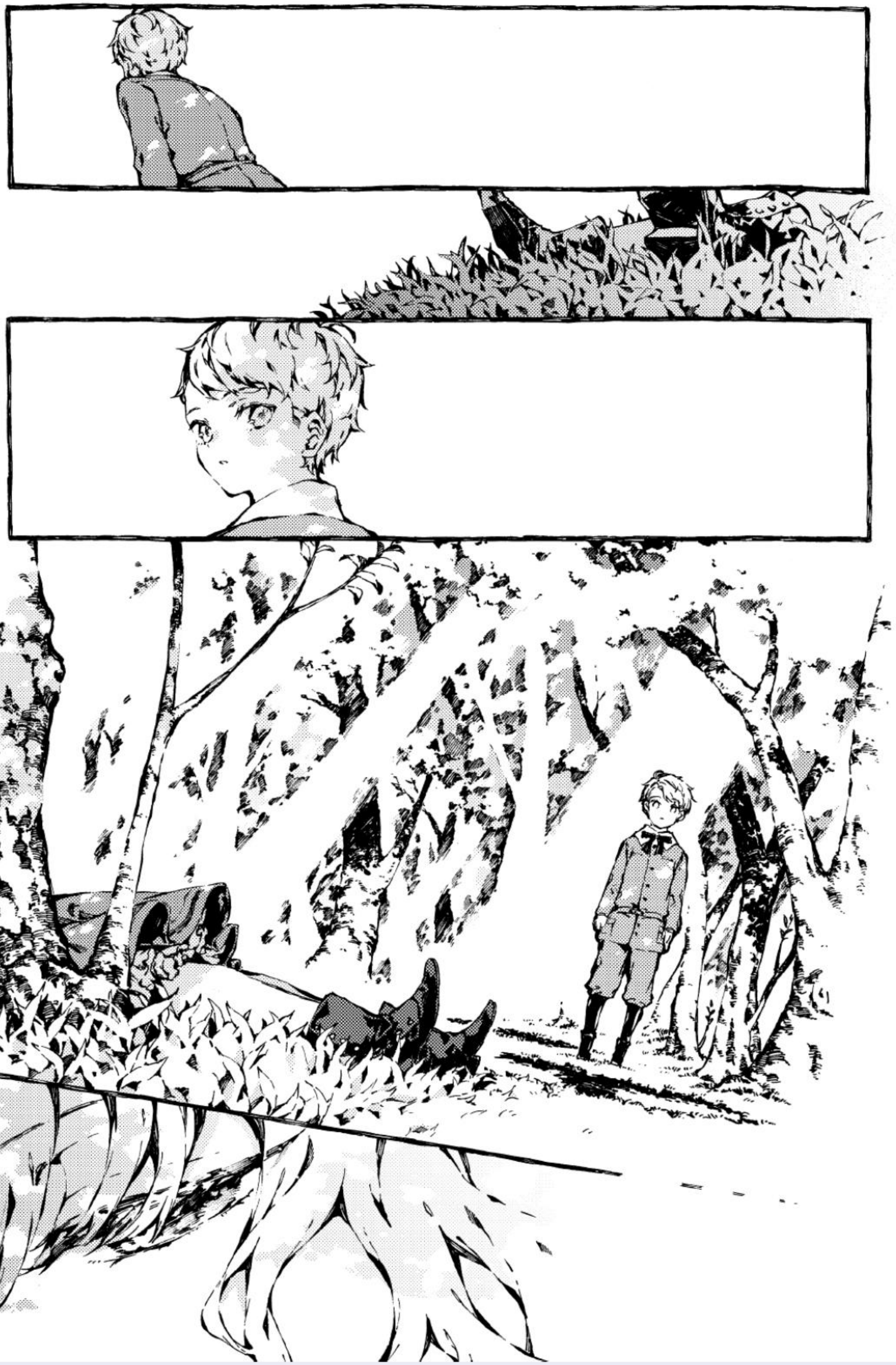


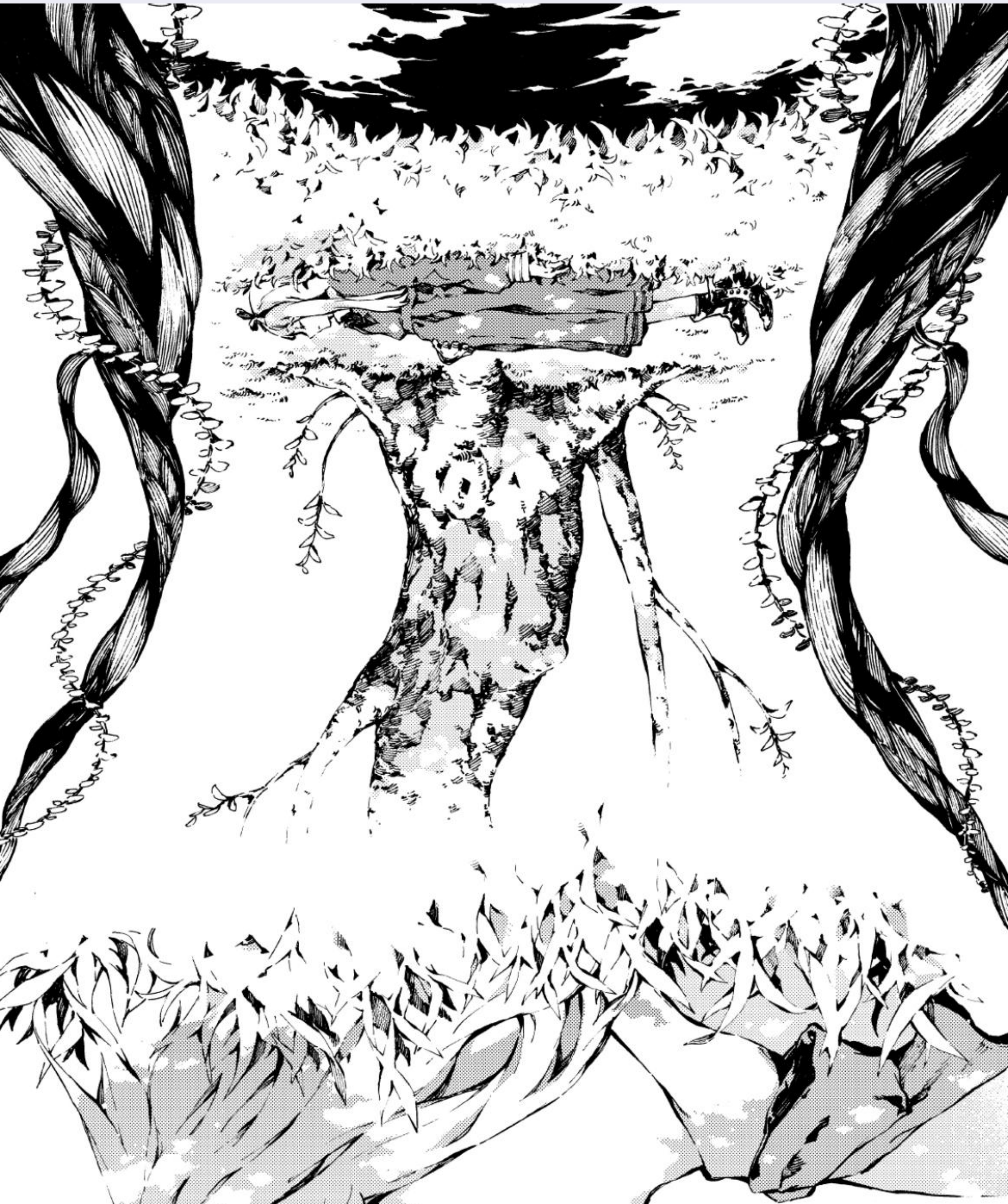














前に
会ったことが
あると思うわ

——あなたと

ぼくも

きみ
長いこと
ここにいるの？

そう

そんな気が
する

ずっと前から

…よく
わからない
けど……

少なくとも

…ものすごく
前から

ぼくも
だよ

だって
さっき

そんなはず
ないでしょ

あの水たまりから
出てくるところを
見たもの

……ああ

そうだ

忘れてた……

――ねえ

わたしたちって
ほんとうに
前に会ったことが
あるんじゃない？

あ

わたし
何となく
思うんだけど——

ていうか
頭の中に場面が
うかぶんだけど——

なんだか
ここは
ずいぶん
ちがう場所に
住んでて

わたしたち
みたいな
女の子と
男の子がいて

いろんな
ことをして……

たぶん

ただの
夢だったのね

わたしの夢では
顔が汚れてたのは
男の子のほう
なんだけど

ぼく
男の子の顔は
思い出せないなぁ

ん…？

ぼくも同じ夢を
見たような気がする

男の子と
女の子がいて

となりどうしの
家に住んでて——

あと
梁をつたって
歩いたような……

女の子が
汚れた顔
してたのを
おぼえてる

それって
逆じゃない？

あ！
あれ
何だろう？
…あら！
モルモットじゃない！
ズン
ズン
!!!
見て！
ほら！
指輪だ！

それに
ほら！

きみも指輪を
はめてる

ぼくもだ！

ん？

ケタリーさん！

アンドリュー伯父さん！

思い出したぞ…

伯父さんめ！

ポリー

あの後ぼくは――

……

これから
どうする？

うちに
もどる？

このモルモットを
連れて

ふわぁ…

そんなに
急ぐことないよ

…急いだほうが
いいと
思うわ

ここは
静かすぎるもの

なんだか—

なんだか
夢見心地に
なっちゃうのよ

あんたなんか
もう眠りそうに
なってるし

この空気に
慣れちゃったら

ここに
寝そべって

いつまでも永久に
眠りつづけることに
なっちゃうかもよ

ここ

気もち
いいよね

うん

…だけど

帰らないと

……

ここにいれば
完璧に
幸せだもの

モルモットは
ここに置いて
いったほうが
いいかもね

連れて帰ったら
また あんたの
伯父さんに
恐ろしい実験を
されるだけでしょ

まちがいない

…ところで

ぼくたちにさえ
こんなひどいことを
したくらいだからね

家に帰るって
どうやるの？

あの水たまりに
もういっぺん
はいるんだと
思うけど？

水着とか
ないんだけど

水着なんか
いらないよ
バカだな

服を着たまま
はいるんだよ

来るとき
服がぜんぜん
ぬれなかったこと
おぼえてないの？

あんた泳げる？

少しは
そっちは？

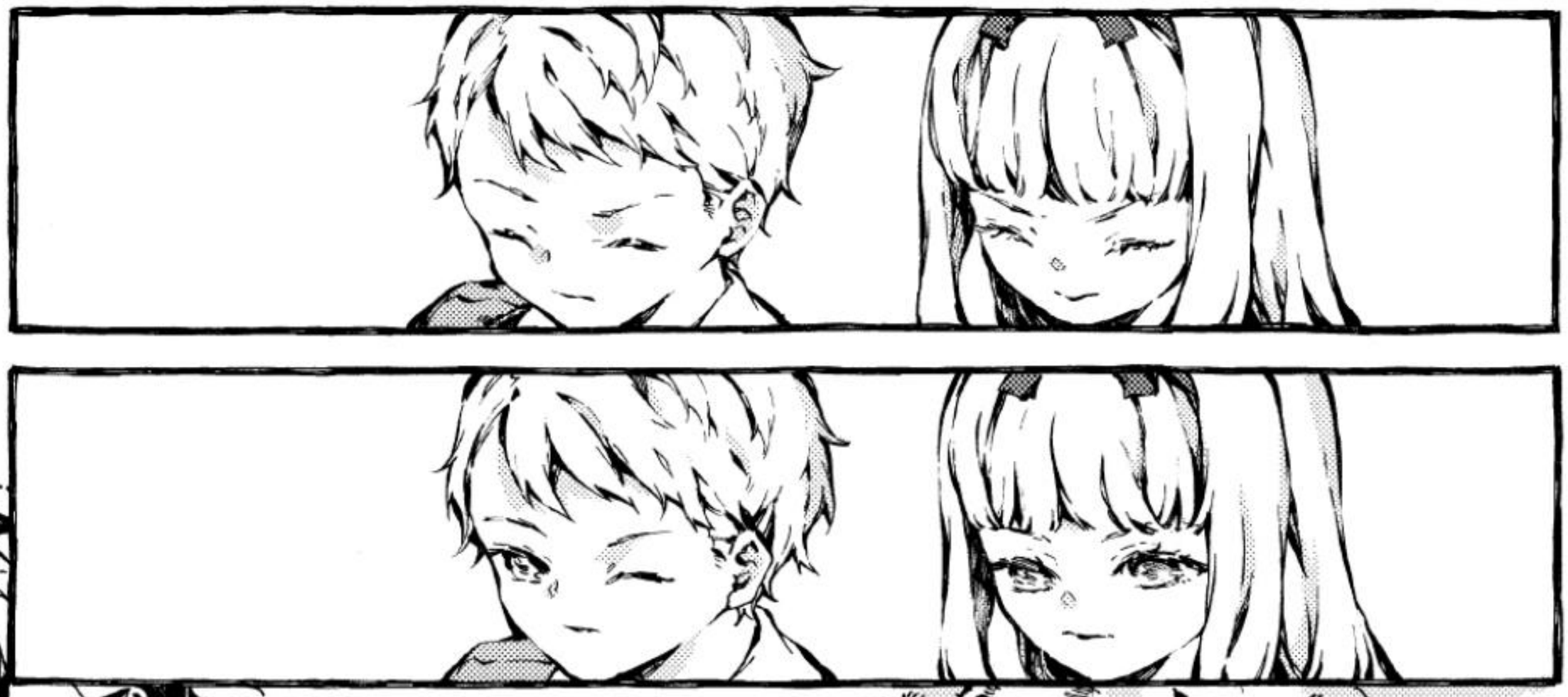
まあ……

たいしたこと
ないけど

泳ぐ必要は
ないんじゃ
ないかな

底のほうへ
沈んで
いきたいんだから
ちがう？


はっ
……
三
ゲッ…
それ！



ピキャ

ピキャ

いったい何が
いけなかったのかしら？

あ わかった！

うまくいかない
はずだよ

だって まだ
黄色の指輪を
はめたままだもの

黄色の指輪は
『行き』の指輪なんだ

緑の指輪が
『帰り』の指輪
なんだよ

だから 指輪を
とりかえないと

きみの服
ポケットある？

よかった

黄色の指輪を
左のポケットに
入れて

ぼくが緑の指輪を
二個持ってるから

ゴソ

はいこれ

きみのぶん

4

あ

そうだ！

すごくいいこと
思いついたんだ

ね

ほかの水たまりは
どうなってるんだろう？

つづく

すごく
いいこと
思い
ついたんだ

ね
ほかの水たまりは
どうなってるん
だろう？

だってさ

この水たまりに
飛びこめば
ぼくたちの世界に
帰れるのなら
ほかの水たまりに
飛びこめば
ほかの世界に
行けるかもしれないって
ことじゃない？

どういう
意味？

ぜんぶの
水たまりの下に
ひとつずつ
世界があるとすれば

第6話　世界のあいだの森（後編）

でも
ここって
もう

あんたの
伯父さんが
言ってた

〈別の世界〉だか
〈別の場所〉だかに
着いてるんじゃ
ないの？

あんたの
話だと——

アンドリュー
伯父さんなんか
どうだっていいよ

伯父さんは

〈別の世界〉が
一個だけしか
ないような
言い方をしてた

伯父さんなんか
何もわかって
ないんだよ

でもさ

自分でここに
来る勇気も
なかったんだから

それが何十個も
あるとしたら？

つまり

この森は
〈別の世界〉のひとつに
すぎないってこと？

わからない？

聞いて

うちの屋根の
下にあった
トンネルのことを
考えてみて

ううん

この森は
世界なんかじゃ
ないと思う

この森は
言ってみれば
中間の場所
なんだと思う

あのトンネルは
どの家の
部屋でもない

ある意味
あのトンネルは

テラスハウスの
どの家にとっても
家のちゃんとした
一部だとは言えない

だけど
いったんトンネルに
はいっちゃえば

この森も
それと同じなんじゃ
ないかな？

そこから
テラスハウスの
どの家にも
出てくることが
できる

……ふたりは
ここに来れば
すべての世界に
どこからでも
はいれる

ここは
どの世界にも属さない
場所だよ

…でも

たとえ
そうだと
しても——

そう考えれば
すべてが
説明できる

だから
この場所は
こんなに静かで
眠くなるような
場所なんだ

ここでは
何ひとつ
起こらない

家と
同じだよ

人が
話したり
何か
したり

ごはんを
食べたりするのは
家の中なんだ

壁の裏
とか

天井の上
とか

床下とか

ぼくらの
トンネルとか

そういう
中間の場所では
何も起こらない
だろう？

だけど
トンネルを通れば
どの家にでも
はいれるんだ

だから
この場所を経由すれば
どの世界にでも
はいることが
できるんだと思う！

さっき出てきた
水たまりに
飛びこむことなんか
ないんだ

少なくとも
いますぐには

〈世界の
あいだの森〉
ってことね

ね

やって
みようよ

とっても
すてき

ちょっと
待って

どの水たまりに
飛びこんでみる？

わたし

まず さっきの
水たまりから
ほんとうにうちに
もどれるかどうかを
確かめないうちは

新しい
水たまりを
試してみる気は
ないわ

それだって
うまくいくかどうか
わからないのに

なるほどね

それで
アンドリュー
伯父さんに
つかまって

ひとつも
楽しい思いを
しないまま
指輪を取り上げ
られちゃうわけ？

そんなの
やだね

うちに帰る
水たまりを
とちゅうまで
行ってみる
っていうのは
どう？

ちゃんと
行けるかどうか
確かめるために

それで
ちゃんと
もどれそうなら

ケタリーさんの
書斎に
すっかり
もどっちゃう前に
指輪を取りかえて

もう一回
上がってくれば
いいじゃない？

とちゅうまで
行くなんて
できるのかな？

だって
上がって
くるとき
時間がかかった
でしょ？

だから
帰るときも
少し時間が
かかると
思うんだけど

ドキドキ…

もとの世界に
ちゃんともどれると
わかるまで，

いっさい
新しい世界の冒険には
つきあいませんからね

緑は安全の色って
いうふうに考えれば

どっちがどっちか
自然に
おぼえられるよ

ケタリーさんの書斎に
もどれそうだと
わかった瞬間

私が
「チェンジ！」と
叫んだら

緑の指輪を
はずして
黄色の指輪を
つけるのよ

ぼくが
叫びたい

イヤよ

…


111
911
1
ええ…









チェンジ！



それじゃ

これから冒険だ！

どの水たまりでもいいよ

よしっ

おいでよポリー

待って！

あの水たまりに飛びこんでみよう

これでだいじょうぶ！

この水たまりに
目印をつけて
おいたほうが
いいんじゃない？

どの
水たまりも……

……そっくり

どの
木立ちも……

二人のうちの
片方だけでも
分別があって
よかったわ

ごちゃごちゃ
うるさいなぁ

来いよ
ほかの水たまりが
どうなってるか
見たいんだ

ミャー

ミャー

ミャー

うるさい
ですってぇ……
!?

この
水たまりに
しよう

ミヤキ
ミヤキ…

一
二の
三

それ！

未知の
水たまり…

くそっ！

頭にくる！

こんどは何が
まちがってたんだ？

ちゃんと
黄色の指輪を
つけたのに

伯父さんは
行きは黄色って
言ったのに…！

どういうことなのかしら？

――実はアンドリュー伯父は〈世界のあいだの森〉のことなど何も知らなかったのです

指輪の魔力についてひどくまちがった考えを抱いていたのだった

どちらの指輪ももとの材料はこの森から出たもので

黄色い指輪の材料には〈世界のあいだの森〉ともとの場所にもどろうとする性質が

The Wood Between the Worlds

yellow

緑色の指輪の材料には〈世界のあいだの森〉ともとの場所から離れようとする性質があったのだ

green

ディゴリーが
このことを
きちんと理解
できたのは

もっとあとに
なっての
ことである――

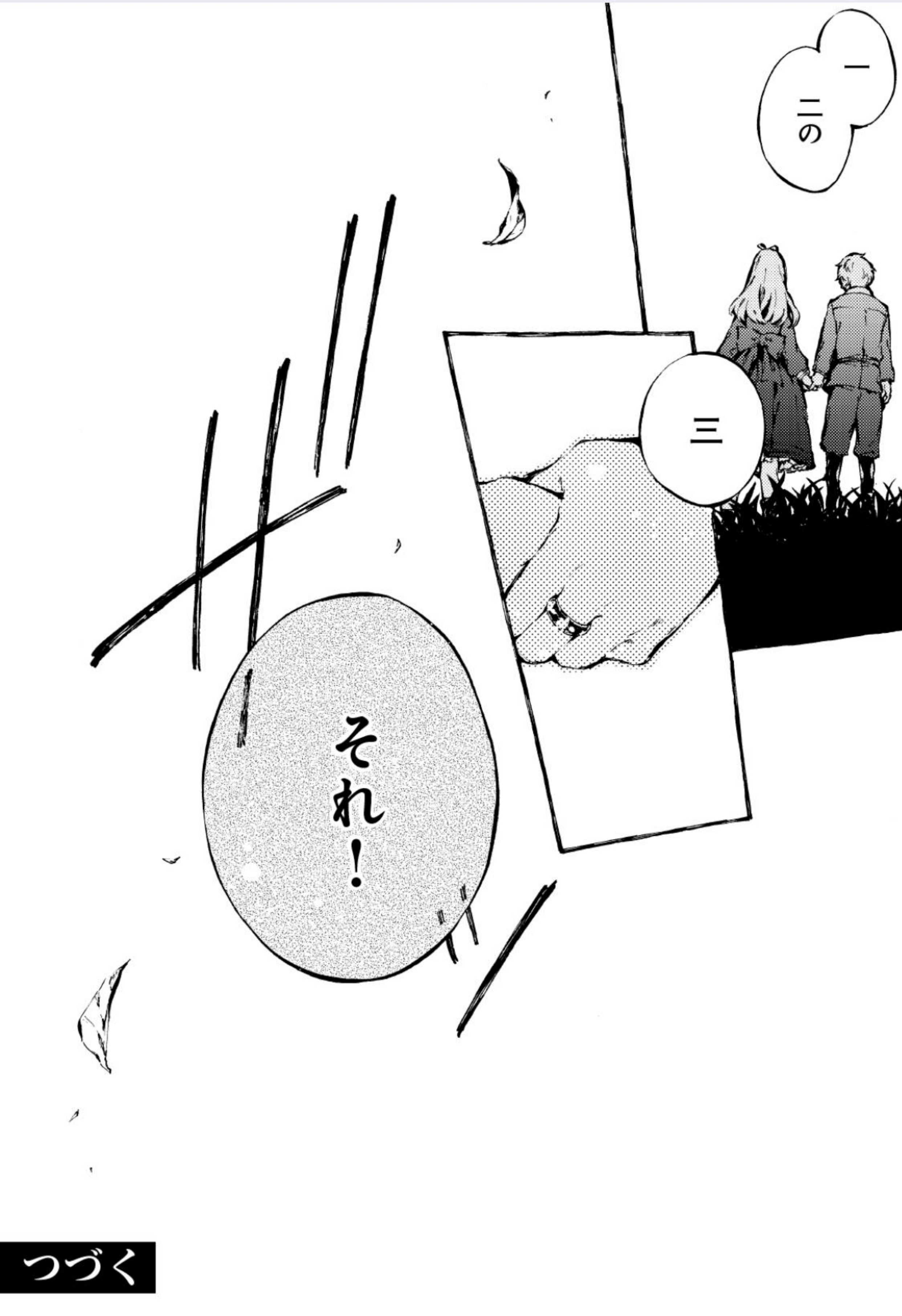
とりあえず
緑色の指輪をつけて
新しい水たまりに
飛びこんで

何が起こるか
見てみよう

そっちが
その気なら
受けてたつわよ

どっちの指輪だって
新しい水たまりには
効き目がないに
ちがいないわ

どうせ
また水を
はねちらかす
だけよ



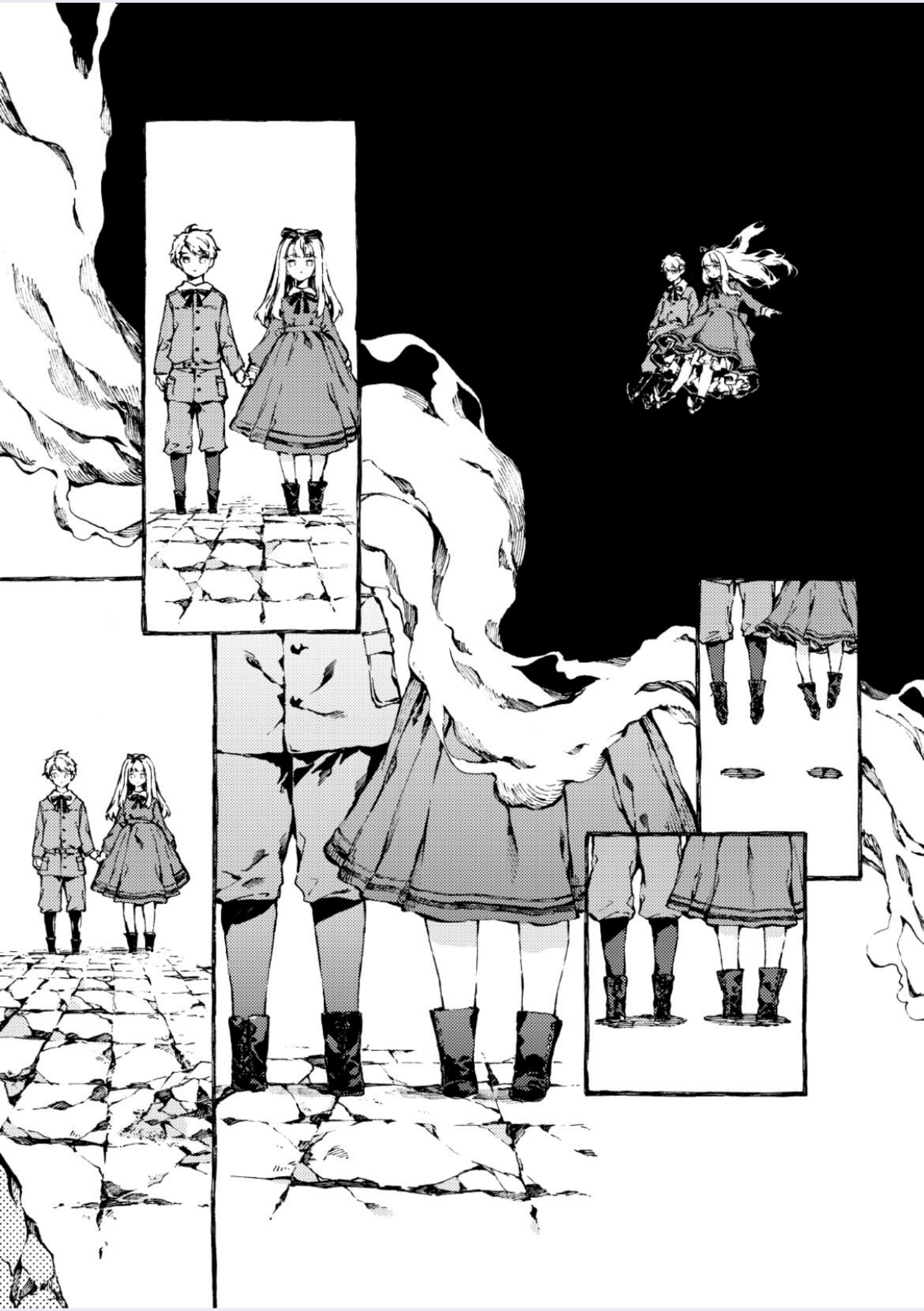
つづく

第7話　ベルとハンマー（前編）









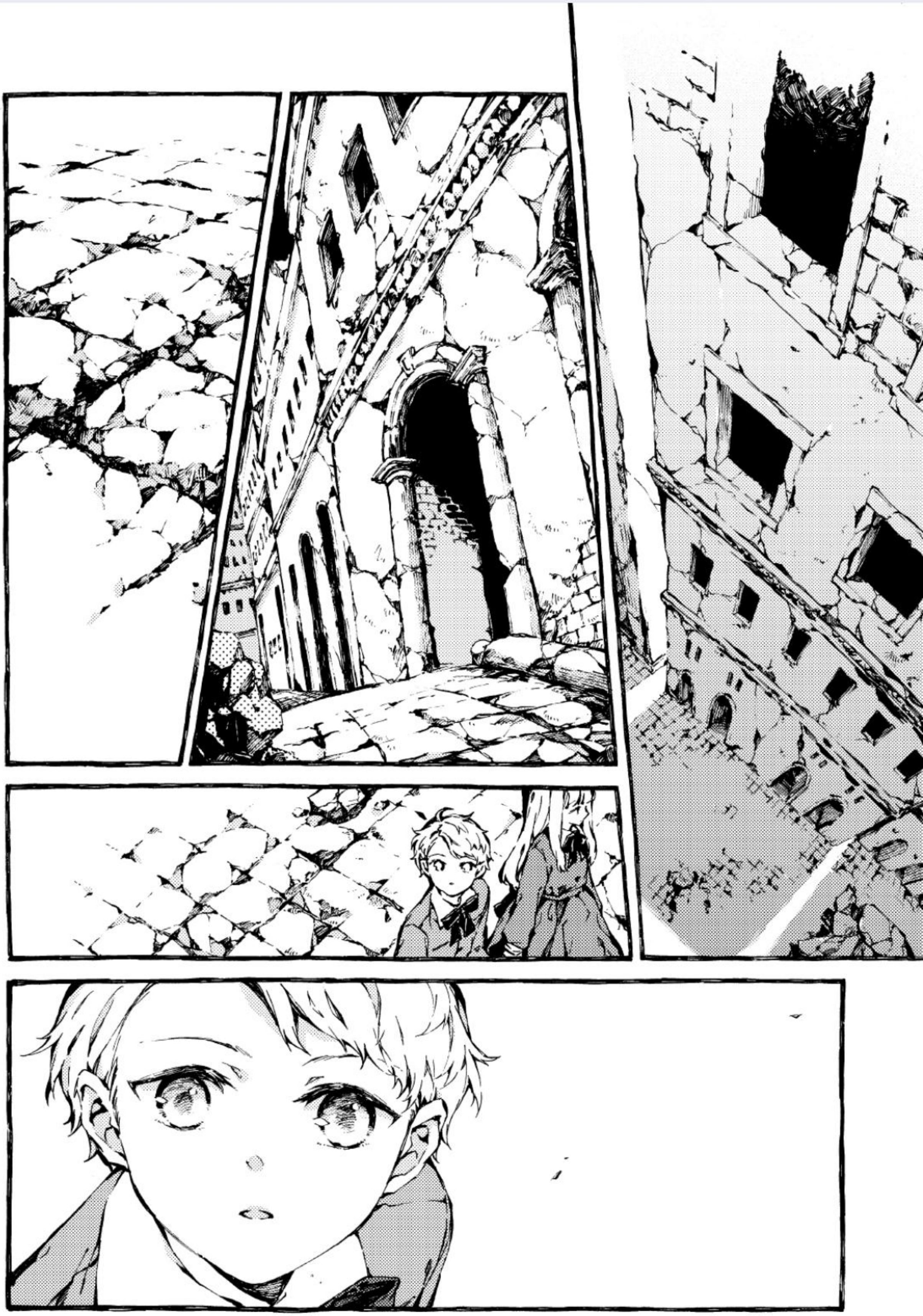


ずいぶん
変わった場所だな！

……

ブルッ！

いやな感じ



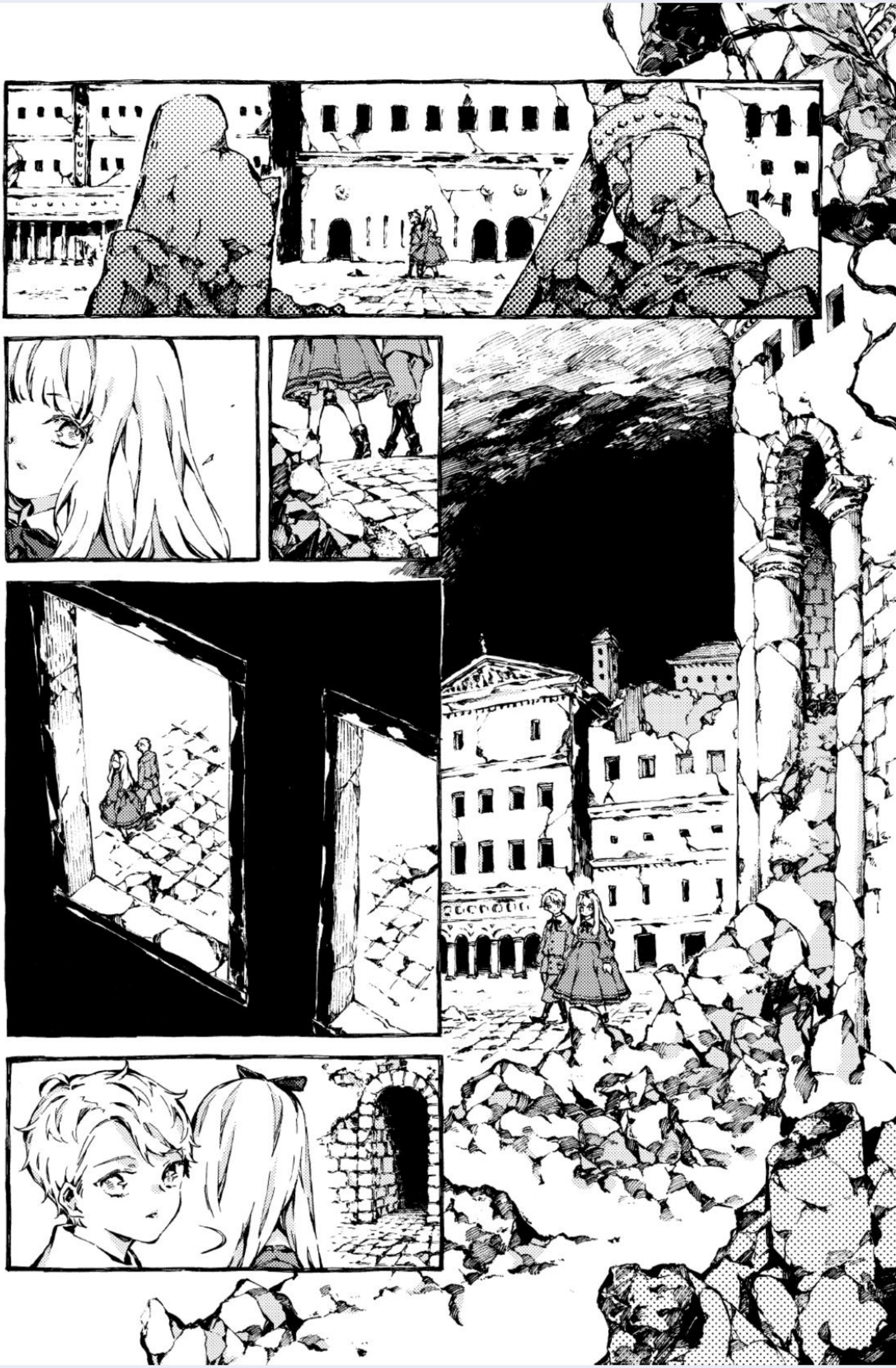
へんな
天気だな

これから
嵐にでも
なるのかな

それとも
日食かな？

いやな
感じ……

ゾク…




誰か
住んでると
思う？
ボソ…
…ここ

ギュ…

ううん

ぜんぶ
廃墟だもの

ここへ来てから
ひとつも物音を
聞いてないし

ドクン…

ドクン…

…ちょっと
足を止めて

物音を
聞いてみよう



でも
まだ何も
見てないじゃ
ないか

せっかく
来たんだから
あちこち見て
帰らないと

ここには
おもしろいもの
なんか何もない
と思うわ

…帰ろうよ

せっかく
魔法の指輪を
手に入れて
別の世界へ
来たって

怖がって
何も見たくないって
いうんじゃ
意味ないよ

誰が怖いなんて
言いました？

だって
いろいろ
探検して
みようって気が
あまりなさそう
だから

あんたが
行くとこ
ぐらい

どこだって
行って
やるわよ

逃げたいと
思ったら

いつだって
逃げられるから

緑の指輪は
はずして
右のポケットに
入れておこう

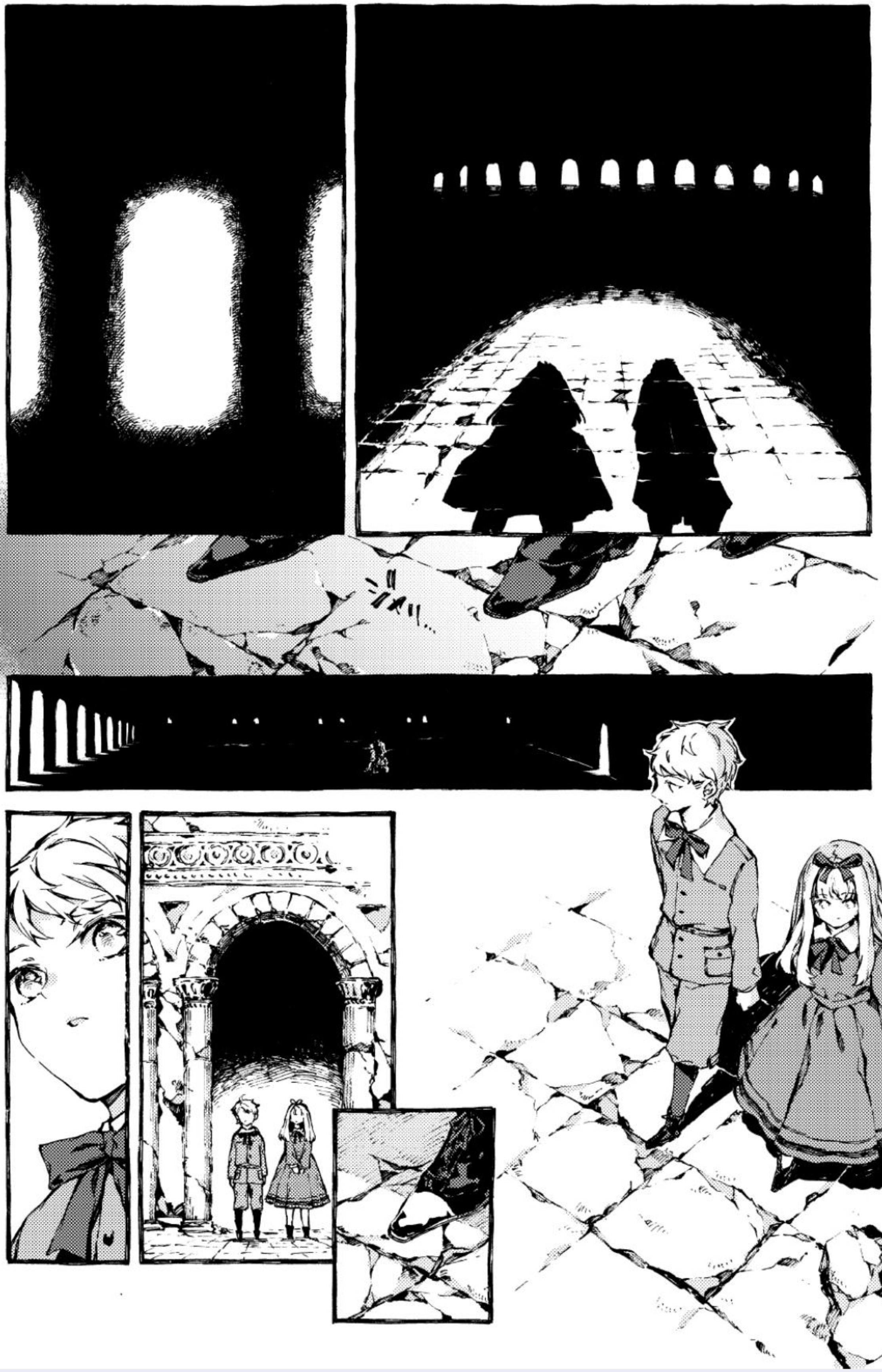
あとは
黄色の指輪が
左のポケットに
はいってるって
ことだけ
おぼえとけば
だいじょうぶだよ

ポケットの
すぐそばに
手を
置いとけばいい

ただ

まちがって
ポケットに
手をつっこまない
ようにね

黄色の指輪に
さわったら
消えちゃうから



あそこ
あぶない
感じね

いままで
もってたんだから
もう少し
もつだろうと思うよ

…だけど
物音を
たてないように
しないと

ほら
音がきっかけで
崩れることとって
あるだろう？

アルプスの
なだれみたいに



ブゥン…

!

そろそろ

〈世界のあいだの森〉に

もどったほうが……




ナズ





つづく

第8話　ベルとハンマー（後編）



この服
どうしてこんなに
長いあいだ
朽ちはてなかったの
かしら？

魔法だよ

感じない？
この部屋全体が
魔法で
呪縛されているに
ちがいない

ここに
はいったとたんに
感じたもの

この人たちの
ドレス

どれも
何百万も
すると思うわ

この人たち

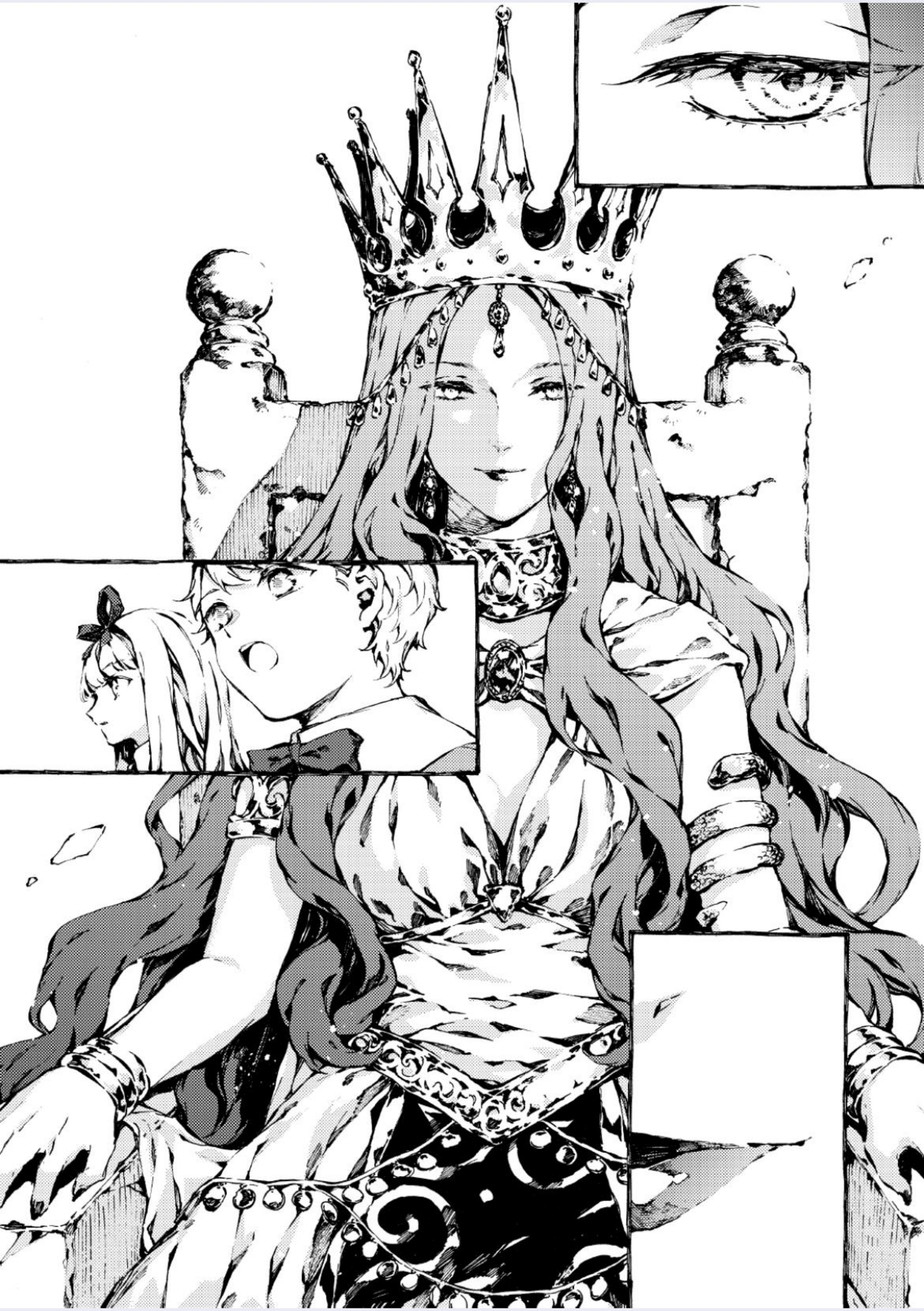
いい人たちだったみたいだね

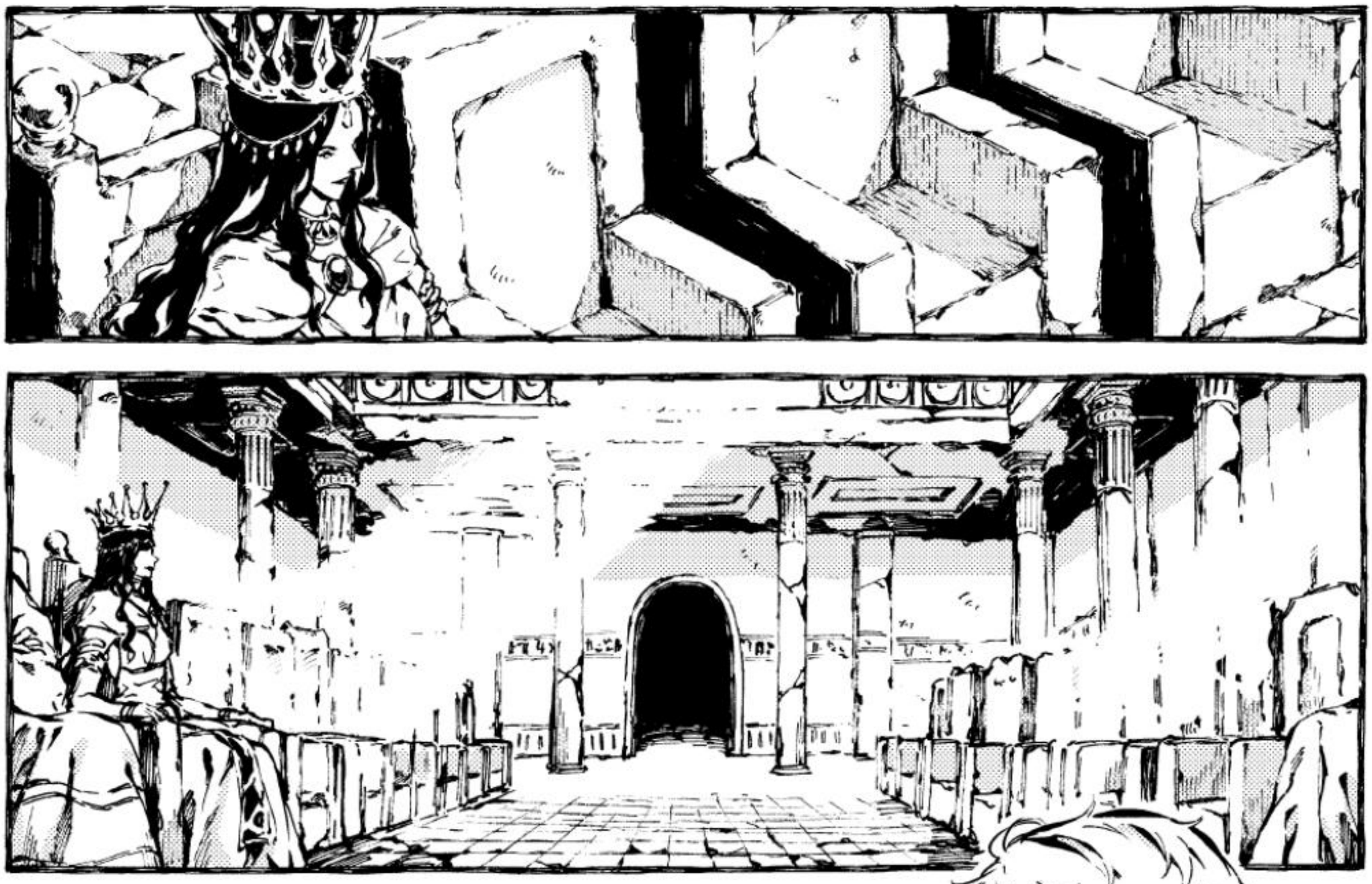
コトン



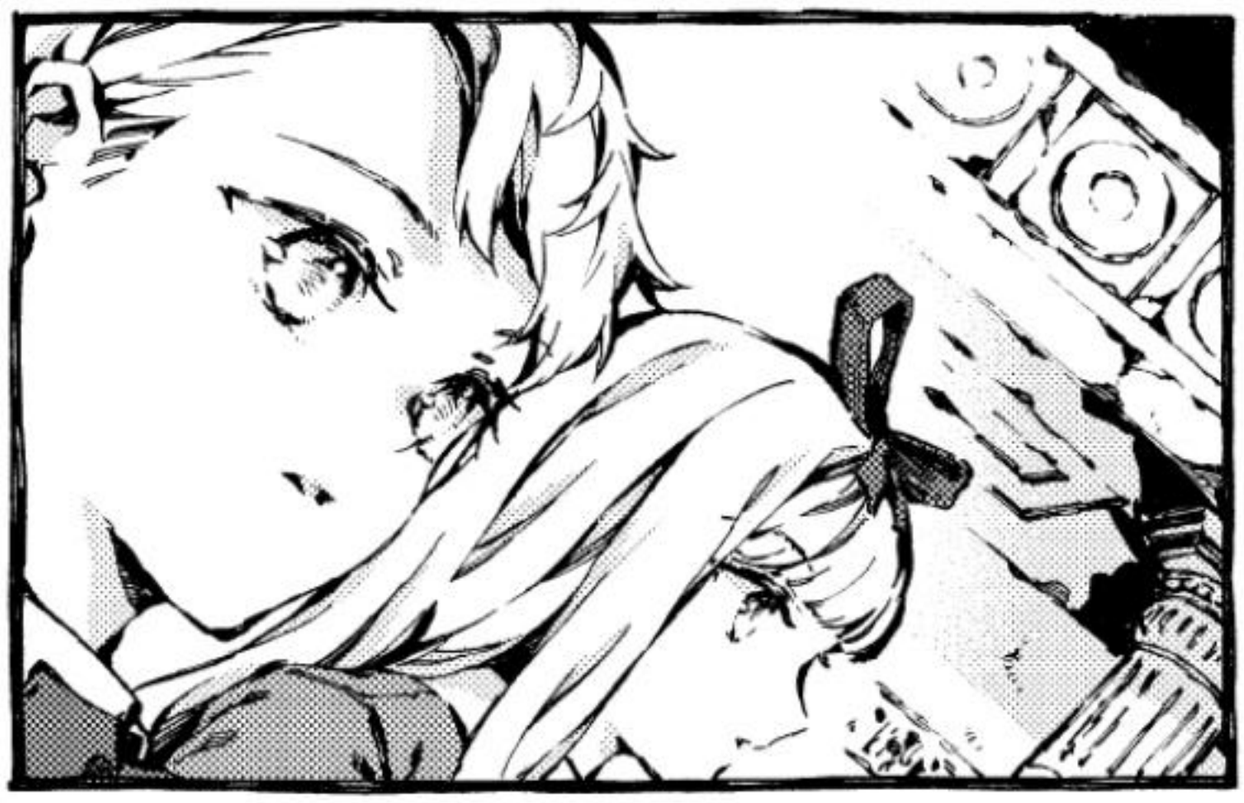


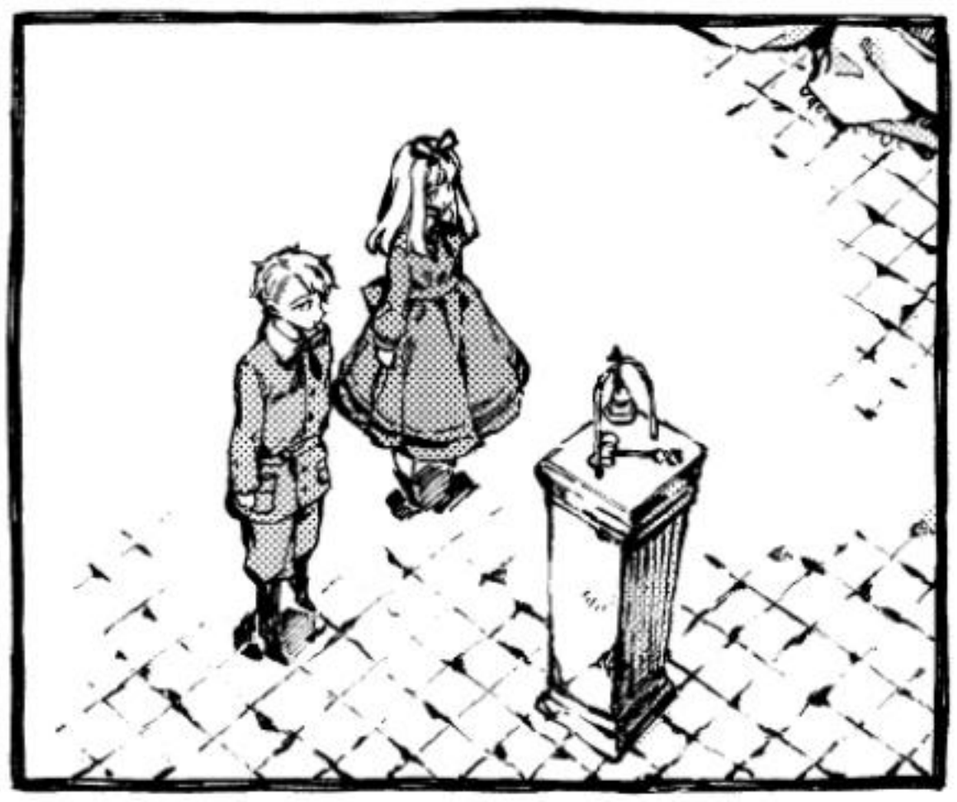


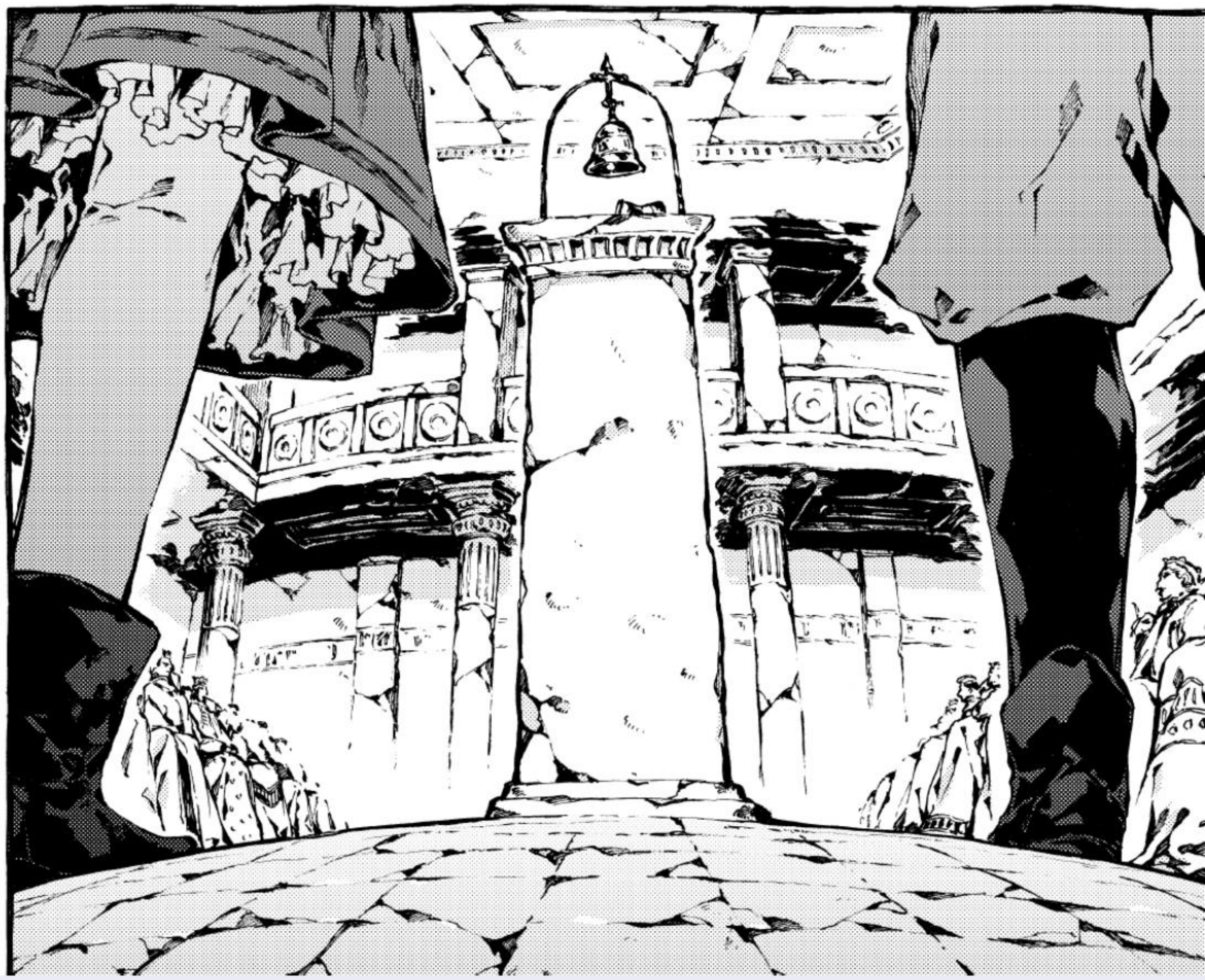



この人たちに
まつわる物語を
知りたいなぁ
ねえ
広間の真ん中にあった
テーブルみたいなのを
もういちど見に行こうよ







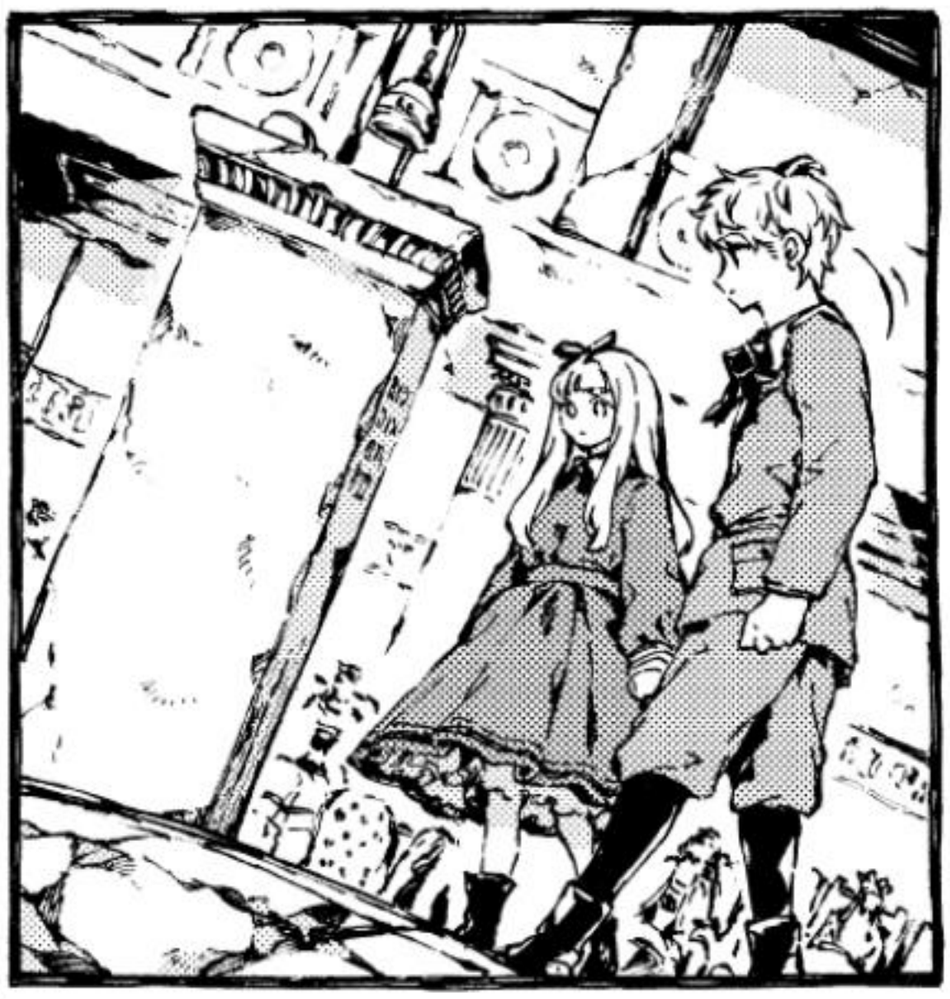


何だろう……

……これは
いったい
何だろう……

ここに何か
書いてある
みたいよ


けど
もちろん
読めないよね




あ
ほんとだ


そう
かしら？
読めるかもよ

Make your
Strike th
分かる…！

Make your choice, adventurous Stranger;
Strike the bell and bide the danger,
Or wonder, till it drives you mad,
What would have followed if you had.

選ぶがよい 冒険好きの客人(まろうど)よ
ベルを打ちて 危険に見(まみ)ゆか
思いまどいて 正気を捨つか
打ちたれば いかなりけむと

冗談じゃないわ！

危険なんて
おことわりよ

でも
どうしようも
ないんだよ！

いまさら…
あとには
引けないよ

あのとき
ベルを打ったら
どうなってた
だろうって

この先ずっと
考えつづけることに
なるんだよ？

このまま
帰って
そのことを
考えつづけて
頭がおかしく
なるなんて

ぼくは
まっぴらだ！

バカなこと
言わないでよ

誰がこんなもの
信じるのよ！

そんなの
どうでも
いいことよ！

打てば
どうなっただろう
なんて…

ここまで
知っちゃったら
誰だって
その先のことを
考えつづけて
頭がおかしくなるに
決まってるよ

それが
魔法の力って
ものなんだよ

ぼく
いまだってもう
魔法が
効きはじめてるのを
感じるもの

わたしは
感じませんけど？

あんただって
魔法なんか
効いてるはず
ないわよ

ふりしてる
だけでしょ

わからずや
だなぁ

そう言ってる
あんたの顔

伯父さんに
そっくりだわ

ほら

そうやって話を
はぐらかそうとする

女子
だからな

まったく
女子ってのは

誰と誰が婚約したか
なんていうゴシップや
馬鹿話にしか
興味がないんだから

いま問題に
してるのは

はい

はい

ひら

ひら

いかにも
男の物言い
ですわね！

言っとくけど

いかにも
女の物言いだ
…とか
言わないでよね

それじゃ
まるっきり
物まねだから

女なんて
呼ぶ気には
なれないね

おまえみたいな
ガキを

ガキで
悪かったわね

…あらそう

ガキが
いっしょにいたんじゃ
お邪魔でしょうから

こんな場所
もうたくさん

わたし
失礼いたし
ますわ

あんたにも
うんざりだわよ

あん
なん
たん
て

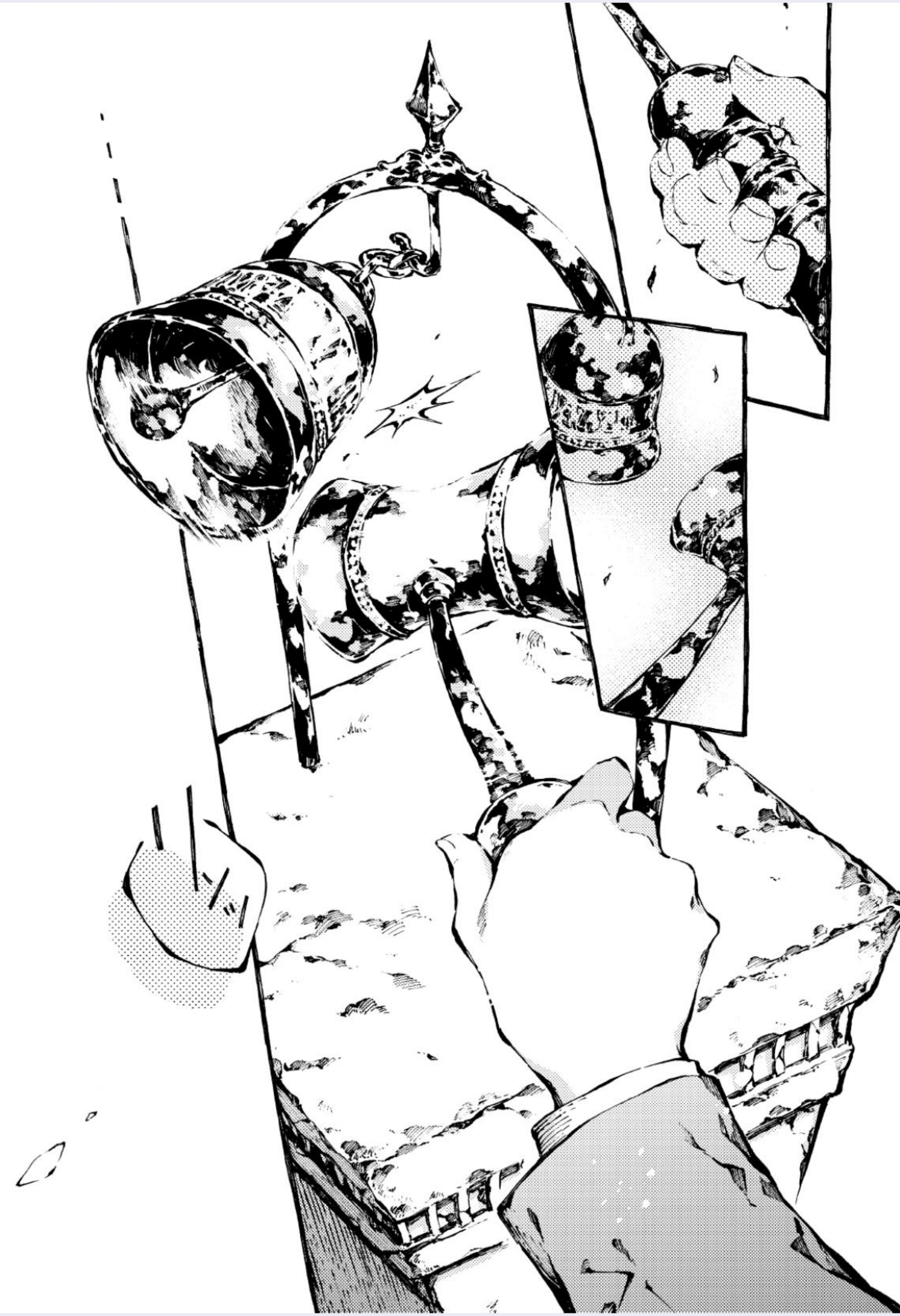
高慢ちきの
最低の

石頭だわ！

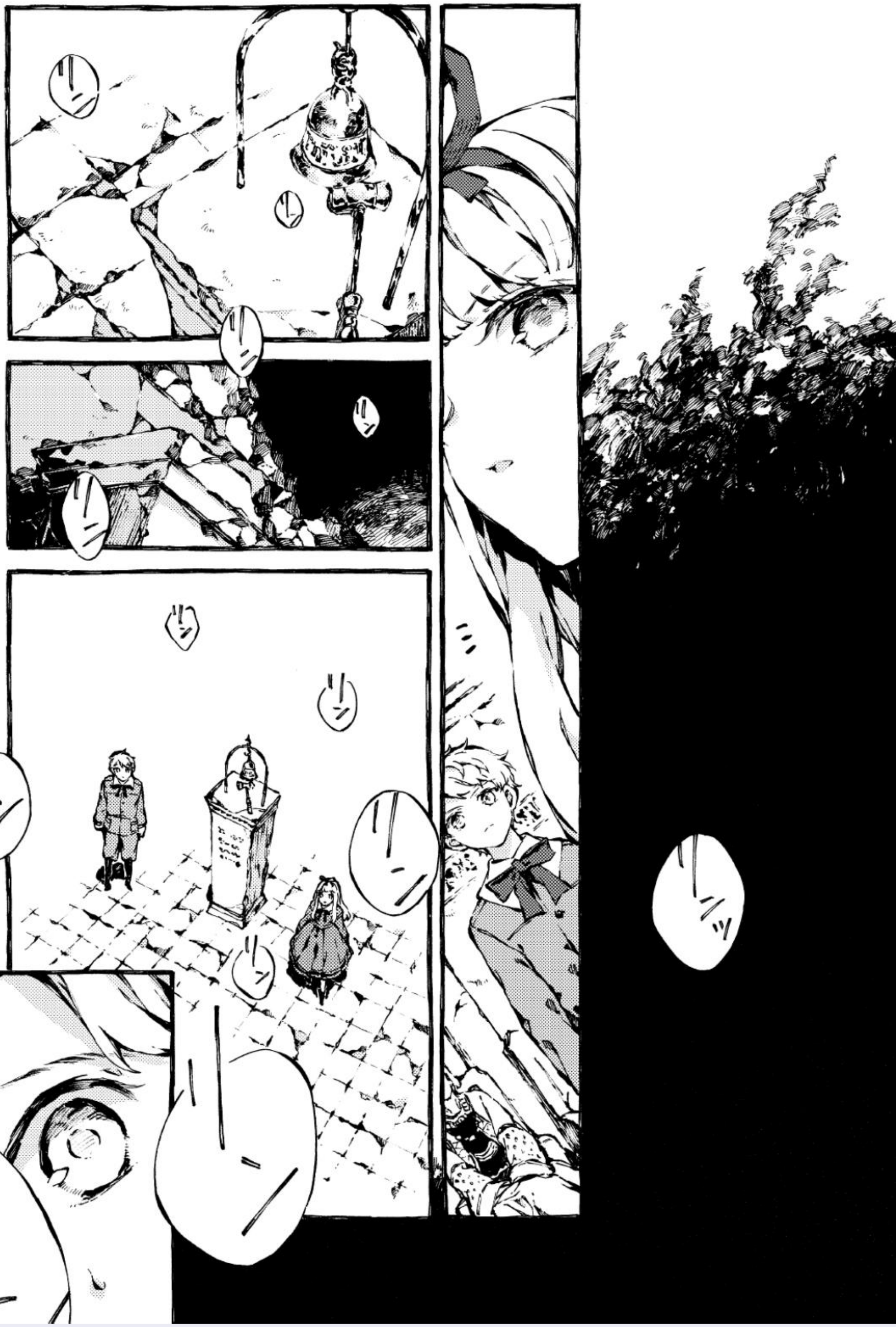
いいかげんにしろ！

――このときのことは

あとになって大変後悔することになるのである…










ゴロゴロ



…ほら
ごらん
なさい！

とにかく

ハッ！

これで
満足でしょ！

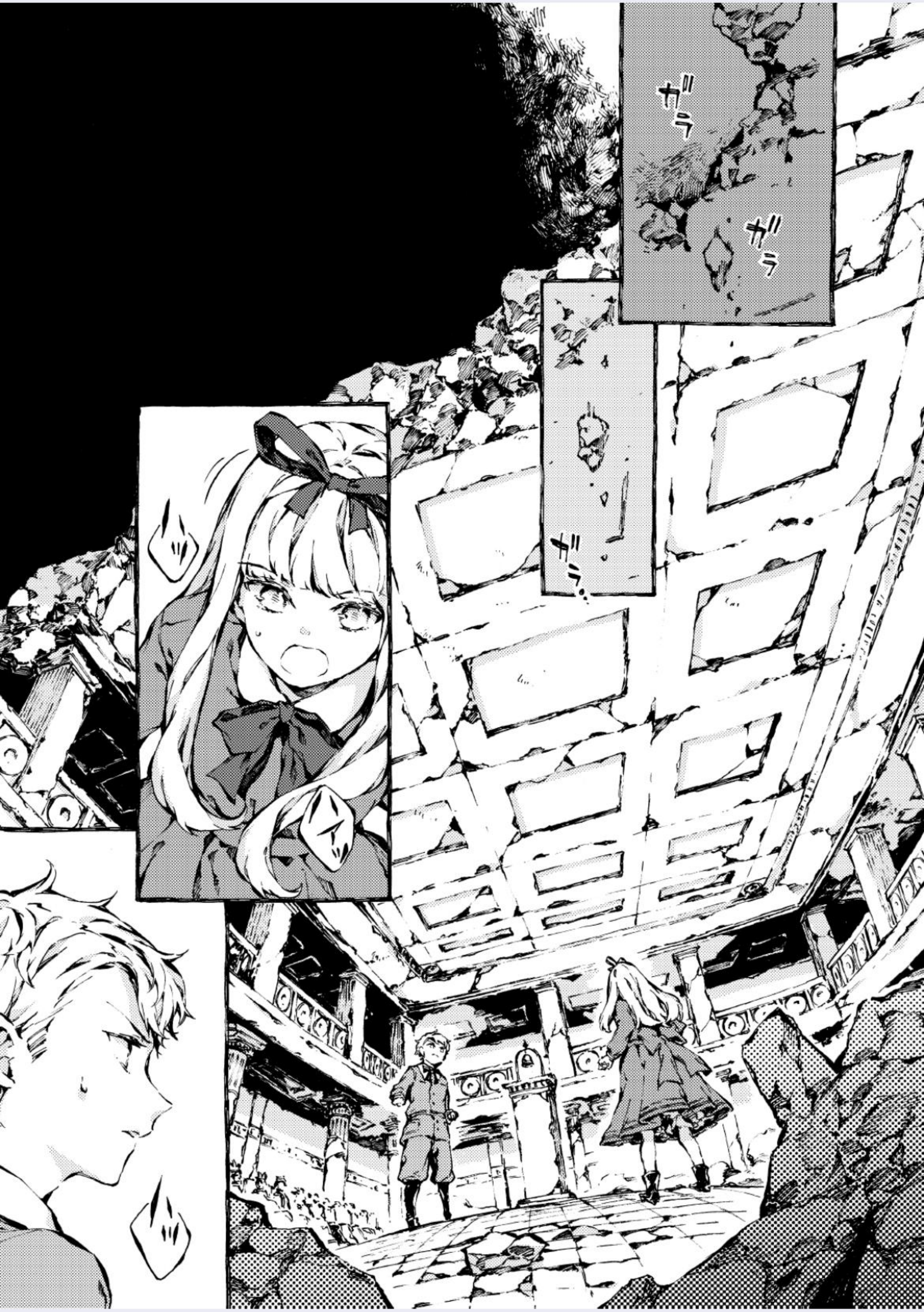
これで
終わったな



つづく

第9話　滅びの言葉（前編）




ガラ
ガラ





わらわを
目ざめさせたのは
誰じゃ？

呪文を
解いたのは
誰じゃ？

ぼく思います

そちか！

……

そちがか？

だが
そちは
たかが小童

それも
平民の子では
ないか

そちのからだに
王族や貴族の血が
流れておらぬことは
一目瞭然じゃ

そち
ごとき者が
なにゆえ畏れ多くも
わが宮殿に
足を踏み入れたのか？

わたしたち

ほかの世界から来たんです

こっちも見て

魔法で

それはまことか？

…

そうです

キッ!!

ドル…

そちは
魔術師などでは
ない

そちには
魔術師の〈しるし〉が
見えぬ

魔術師の召使に
すぎぬ者であろう

他人の魔術の力で
ここへ
やってきたのだな？

ゴゴゴ…

アンドリュー
伯父の
魔術です

ガラ

…ここはおおいに危険である

宮殿全体が崩れようとしておるようじゃ

ゴゴゴゴ…

さ 行くぞ

数分のうちにここを去らぬとがれきに埋もれることになろうぞ

ゴゴゴゴ…

!

とんでもない
女だわ！

すごい力

わたしの腕なんか
ひとひねりで
へし折られちゃいそう

ああ……

……

……あこ何が

とにかくこの女に
指輪のことを
知られないように
しないと

ディゴリーにも
分別があれば
いんだけど…

右手をのばして
左のポケットに
つっこもうとしても
届かないかも
しれないし

それに
左手を
握られちゃったから
黄色い指輪に
手が届かないし

何やってるのかって
気づかれちゃいそう

ディゴリーと
二人っきりで
話せたらいいのに……！

カッ

カッ

ゴゴゴゴゴ

ゴゴゴゴゴ

ゴゴゴゴゴ

この女王は
すばらしく
勇敢な人だ

それに強い

これこそ
女王と呼ぶに
ふさわしい人だ！

女王の口から
この場所の話を
聞かせて
もらいたい
ものだ

——あれは
地下牢への
入口じゃ

あの通路の先には
重罪犯の
拷問部屋がある

これは昔の
宴会用広間で

わらわの曽祖父王が
七〇〇人の貴族を招いて
宴会を催して

そやつらが酒に
酔うか酔わぬかのうちに
皆殺しにした
場所じゃ

連中め

謀反を企てて
おったのでな

ゴゴゴゴ…

やっと
宮殿の正面玄関まで
来たにちがいない



ウィーン！

そちの
魔術の師匠である
伯父とやらは
わらわのような力を
持っておるのか？

…しかし
それはいずれ
わかること

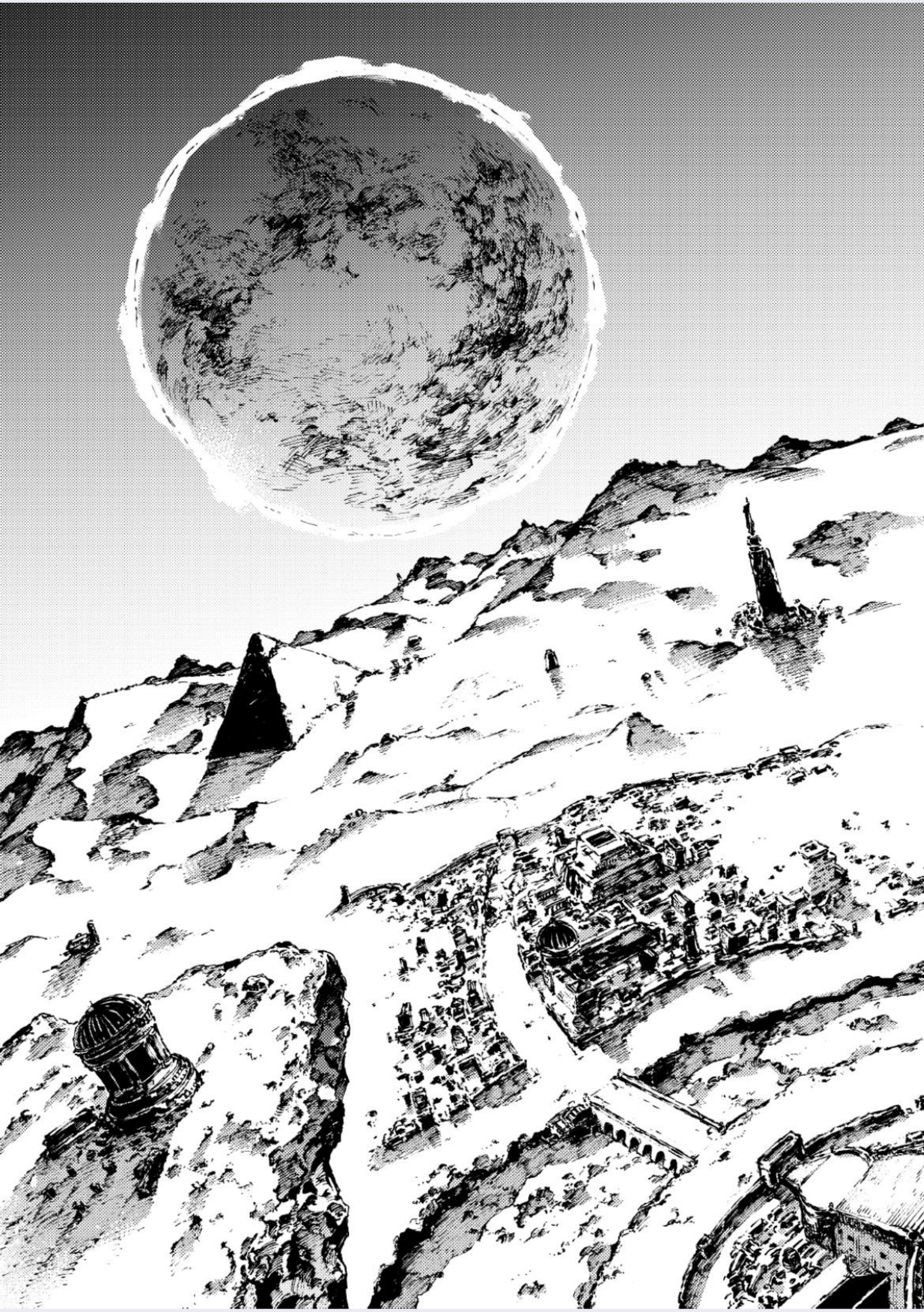
さしあたり
いま見たことを
おぼえておくがよい

わらわを
邪魔だてすれば

物であろうが
人であろうが

このように
なるのじゃ





しかと
見るがよい

今後ふたたび
人の目が
これを見ることは
なかろう

これが
チャーンの
姿じゃ

偉大なる都

王のなかの
王たる者の都

世界の驚異

そしておそらく
ありとあらゆる世の
奇跡であった

小童よ
そちの伯父は
これほどの偉大なる都を
治めておるのか？

いいえ…

伯父はどこも
治めてなんか
いな――

音静い
いまは
静まりかえって
音もないが

かつて
わらわがここに
立ったころは
チャーンの
喧噪で大気が
沸きたって
おったものじゃ

行進の足音

鞭の鳴る音に
奴隷どもの
うめき声

寺院から
聞こえてくる
いけにえの
儀式の
太鼓を打つ音

車輪のきしむ音

チャリオットの
とどろき

わらわは
ここに立ち…

——あれは
最後が
近づいたころで
あった——

通りという通りから
戦いの怒号が
上がるのを聞き

チャーンの川が
血で赤く染まるのを
眺めたものよ

そのすべてを

一人の女が
一瞬にして
永遠に
消し去ったのじゃ

…誰が
ですか？


ちがうな

最後の女王にして

全世界の女王たる

このジェイディースじゃ

つづく

第10話　滅びの言葉（後編）

もとはと
言えば

悪いのは
姉のほうじゃ

姉がわらわを
追いつめたのじゃ

あらゆる
神々の呪いを
あの女の上に
永遠にあらしめよ！

——そうとも
そして命乞いを
聞いてやる用意も
あった

わらわはいつでも
和睦に応じる
用意があった

あの女が
王座を明け渡しさえ
すれば

だが
あの女は
それを拒んだ

あの女の傲慢さが
全世界を
破壊したのじゃ

あの女は

わらわが
〈滅びの言葉〉の秘密を
手にしておることも
承知だったはず

戦が始まった
あとでさえ

双方とも魔法を
使わぬという厳たる
申し合わせがあった

愚か者め！

魔術ならばわらわのほうが
上回ることを知らなんだでは
あるまいに

あの
女は……

――頭の弱い
女め――

わらわが
使わぬとでも
思っていたのか？

……しかし

むこうが
約定を
破ったからには
どうすることが
できよう？

それは
何なんですか？

秘中の秘じゃ

しかるべき
儀式により
口にしたならば

はるか古代より

われら一族の
偉大なる王たちの
あいだには

ある言葉の
存在することが
伝えられておった

それを
口にした者
以外の

生きとし生けるものを
破滅させる力を
持つという言葉じゃ

しかるに
昔の王たちは
心の弱い
腰抜けぞろいで

自らその言葉を
知ろうとする
試みはせぬという
誓いを立て

また
後の世に続く
すべての
王たちにも
同じことを
誓わせた

だが
わらわは
秘密の場所へ
おもむいて

その言葉を
つきとめたのじゃ

そのために
途方もない
犠牲を払った

わらわが好き好んで
その言葉を
使ったのではない

あの女めが
使わせたのじゃ

わらわはあらゆる
ほかの手を繰り出して
あの女と戦った

兵士どもの
血をおしみなく
流して――

人でなし！

最後の
大合戦は

ここ
チャーンの都で
三日三晩続いた

三日の
あいだ

わらわはまさに
この場所に立って
戦況を
見下ろしておった

わが軍の
最後の兵士が
倒れるまで

わらわの姉が
反乱軍を率いて

街から
このテラスへと続く
大階段の半ばまで
押し寄せるのを見るまで

そして
あの
呪われた女

わらわは
魔法を使わなんだ

たがいの顔が
見えるほど
敵軍が
近づいてくるまで
待った

あの女は
身の毛もよだつ
邪悪なる目を光らせて
わらわを見すえ――

勝ったな

……

いかにも

そのあと

ただし

勝ったのは
そなたでは
ないわ

わらわは
〈滅びの言葉〉を
口にした

この世で
生きて
おるのは

わらわ
一人のみと
なった

――瞬ののち

…だけど
国民は？

何の
国民じゃ？

ふつうの
人たちの
ことです

ふつうの
人たちは
何も悪いことを
していないでしょう？

あなたに対して

女の人たちや
子どもたちや
動物たちは
どうなったのですか？

わからぬのか

わらわは
女王であるぞ

民は
わらわの
ものなのだ

わが意のままに
使う以外に

何の役に
立つのじゃ？

…それでも
やっぱりむごいと
思います

そちが
平民の子だと
いうことを
忘れておったわ

そちのような者に
国家の論理が
分かるはずもない

ああ
そうか

よいか
小童

そちや
そちのような
平民どもに
おいては
悪行とされる
ことであっても

わらわの肩には
世界の重責が
かかっておる

わらわのような
偉大なる女王に
おいては悪行とは
ならぬのじゃ

わらわは
いかなる掟にも
縛られるものでは
ない

わらわのような
人間は
孤高なる運命を
さずけられて
おるのじゃ

いいかね

わたしのような人間は

孤高なる運命をさずけられておるのだ

…伯父さんも同じ言葉を口にしていた

女王が口にしたほうがはるかに堂々と聞こえるけれど…

…それで

そのあとはどうしたんですか？

わらわはあらかじめ

先祖たちの像が並んでおる大広間に強い魔法をかけておいた

その魔法とは

わらわも先祖たちとともに像のようになって眠りにつき

何者かがやってきてベルを打ちわらわを目ざめさせるまで

千年の歳月が過ぎようとも食べ物も火もなしに生きつづけられる

…というものだったのじゃ

太陽が
あんなふうになったのも
〈滅びの言葉〉のせい
なのですか？

どのようだと
言うのじゃ？

あんなに
大きくて

あんなに
赤くて

あんなに
冷たくて

太陽は昔から
ああいうものと
きまっておる

少なくとも
何万年

何十万年の
あいだ

そのほうどもの
世界では

ちがう種類の
太陽なのか

はい

もっと
小さくて

もっと
黄色っぽくて

もっと
たくさんの
熱を出します

ほほう！

ニ

つまり

そのほうどもの
世界は
まだ若いのだな

さあ

行こう

ここは寒い

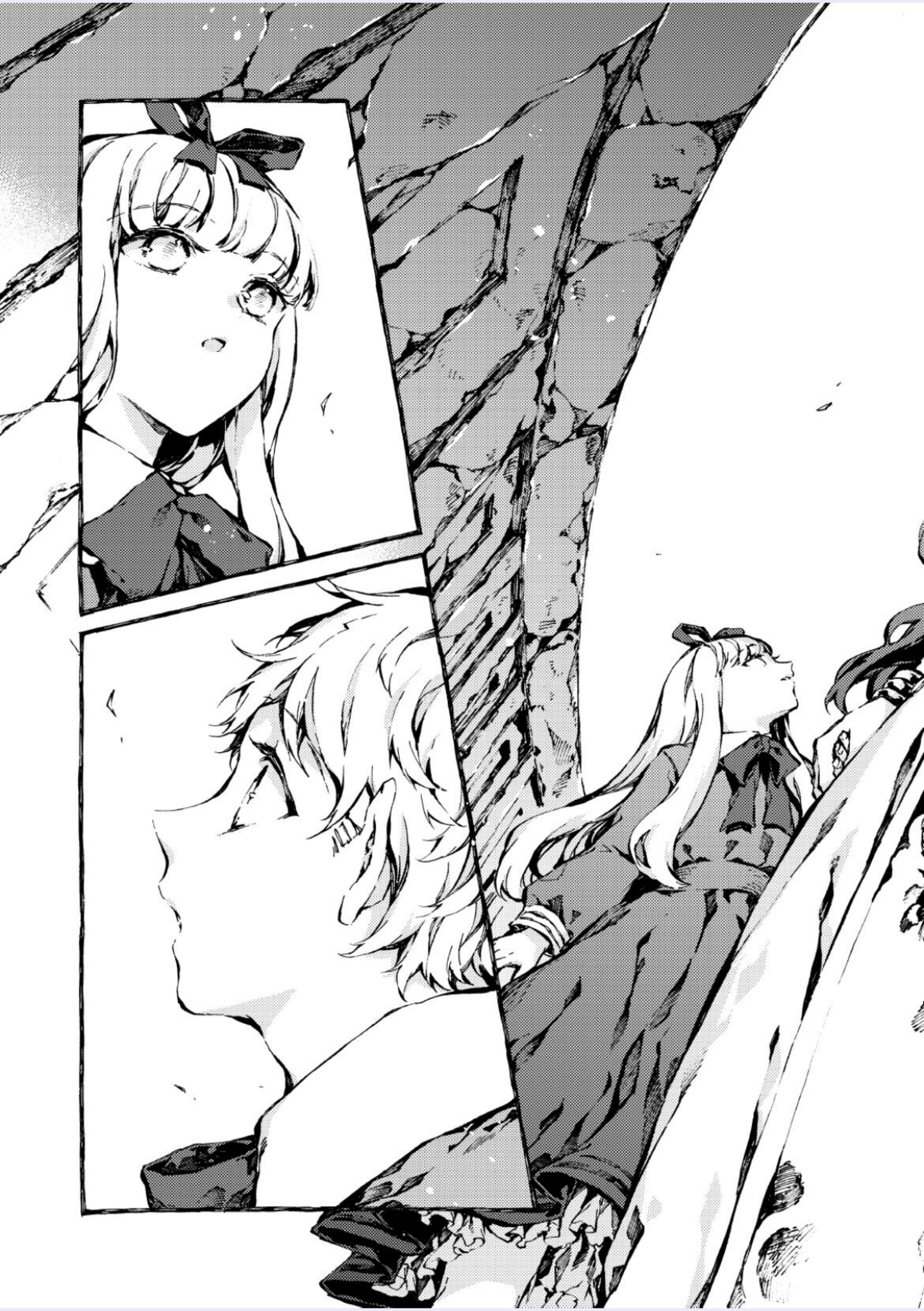
世の終わりを
迎えようと
しておるのじゃ

行くって
……
どこへ？

どこへ
じゃと？

そのほうどもの
世界へ
行くのじゃ

もちろん



女王が一緒に
ぼくたちの世界へ
行くだって…!?

ぼ…
ぼくたちの
世界にですか？

そそ…
そうとは
思いませんでした

そんなの
ごめんだ！

わらわを迎えに
まいったのに
なければ
は

何のために
そちはここへ
つかわされ
たのじゃ？

ぼくたちの世界なんか
ぜんぜん気に入らないと
思いますよ

第一どうやって
連れて帰れるのかも
分からないし…

この人が来るような場所じゃないよね

ポリー？

ポリーは指輪に手が届かないし

ぼく一人でポリーを置いて帰るわけにはいかない…

とすごく退屈なところだし

見るべきものもろくにないし…

わらわが支配するようになれば

たちまちのうちに見るべき都となろう

そんなこと無理です

ちがうんです

支配なんてさせてもらえませんよ

あああ…

早くここから離れたい…！

これまで

しかし

かれらは

すべて倒れ

あまたの
偉大なる王たちが
チャーン王家に
刃向かおうとした

名前さえも
忘れ去られた

愚か者どもめ！

一年もたたぬうちに
そのほうどもの世界など
まるごとわが足もとに
ひれ伏すことになろうぞ

わからぬのか

わらわの
この美貌と魔法を
もってすれば

さっさと
呪文を使って
わらわを
そのほうどもの世界へ
連れてまいれ

なんとでも
ないことに
なっちゃった

おそらく
そちは
自分の伯父のことを
心配しておるのであろう

だが
わらわに
しかるべき
敬意を払えば
命と王位は
許してつかわす

そちの伯父と
戦うために
その
世界のほうどもの
世界へ行く
わけではない
からな

そちをここへ
送ってよこす方法を
見つけたのであれば
そちの伯父は
なかなかの魔術師に
ちがいない

そちの伯父は
全世界の王で
あるのか？

それとも
一部を支配して
おるのか？

王なんかじゃ
ありません

いつわりを
申すでない

魔術というものは
いつの世においても
王の血統が継ぐもの
ではないのか？

平民の魔術師など
聞いたこともないわ

そちが真実を
述べようと述べまいと
わらわには真実を
見とおす力がある

そちの伯父は
そのほうどもの世界の
偉大なる王であり
偉大なる魔術師であるに
ちがいない

そして
その魔術を
用いて

わらわの顔を
魔法の鏡か

あるいは
魔法の水盤に映し
見たにちがいない

そして
わらわの美しさに
心を奪われ

世界を根底より
揺るがせし
強力なる呪文を用いて
世界と世界をへだてる
広き淵を超ぇ

わらわの
恩寵を願い

そのほうどもの世界へ
迎えんがために
そちを送りこんだに
ちがいない

答えるがよい

そうでは
ないのか？

いや
ちょっと
ちがうんですけど……

ぜんぜん
ちがうわよ！

そんな話
一から十まで
でたらめじゃない！

小童め！



いまだ！

早く！


つづく

第11話　アンドリュー伯父の受難の始まり（前編）



放してよ！

放してったら！

ぼくさわってないよ！



はっ…

放してったら！

髪の毛を放してよ！

いったいどういうつもりなの!?

おい！

髪の毛を放せよ！

放すんだ！

ドドドドド

ドドドドド

ドドドドド

ドドドドド

…この指輪

ひとつの世界から
別の世界へ
移るには

指輪を自分で
指にはめたり
直接触ったり
している
必要はなく

指輪に
触っている人に
さわっていれば

それで
十分なんだ…！

早く
ディゴリー！

指輪を替えて

家に帰る水たまりへ！

助けてくれ！

助けておくれ！

いっしょに連れていっておくれ

後生だから！

こんな恐ろしい場所に置いていくつもりではなかろうな？

これでは死んでしまう……

早く

ディゴリー

これが国家の論理ってやつよ

あんたが自分の国でたくさんの人たちを殺したのと同じよ


どうしろって
言うんだ？
馬鹿なこと
言ってないで
そんなの
ごまかしに
決まってるわよ
早くして
…ああ
もう！

水たまりに目印をつけといてよかった

















…ここで女王を見ると

ほとんど人間ばなれしてるな

…伯父さんなんて

魔女と並べると取るに足らないカスみたいなもんだ

…でも

あの女の顔
ケタリーさんの表情に
どこか似かよって
いるわ…

邪悪な
魔法使いの
表情…

つまりこれが
魔術師の〈しるし〉
なのね

…へん

ばか
みたいだ！

伯父さんが
魔術師とはね！

本物の
魔法使いってのは
あの女王のことを
言うのさ

冗談も
いいところだ

…えー

マダム

どこに
おるのじゃ？

わらわを
この世界へ呼びつけた
魔法使いは

まことに
名誉なことで
ございまして——

ありがたき
幸せで——

思いもかけぬ
歓びで
ございまして——

その…

ささやかなる
準備をする暇さえ
ござりますれば——

その
わたくしも――

…その
わたくしが――

魔法使いは
どこにおるかと
聞いておるのじゃ
馬鹿者

わたくしで――

ここに
おりまする
いたずらっ子
どもが
失礼を
働きました
ならば

なにぶん
どうか
お許しを

悪気など
ひとつも――
もちろん

そちがか？

わたくしめで
ございます

マダム



……

ぐぎゃあ

たしかにそちは魔術師のはしくれのようじゃな

立て

犬め

そんなところに伸びておるではないわ

女王の御前であるぞ

そちはどのようにして魔術を使うようになった？

そちに王家の血が流れておらぬことはわらわが断言する

はあ――

あの

たしかに

…その

厳密な意味ではそうかもしれませんが――

厳密には王族ではございません

マダム

…しかしながらケタリー家はたいへんに古い家柄でございまして

ドーセットシャーの旧家でございます

マダム――

黙れ

そちの正体など
わかっておるわ

そちは
本に書いてある
型通りの魔法しか
使えぬ

ケチなつまらぬ
魔術師にすぎぬ

そちの血にも
心の臓にも

本物の魔術など
やどっておらぬわ

口数が多い

最初の
仕事じゃ
よく聞け

わらわの世界では
そちのような類いは
千年も前に
根絶やしにしてやった

だが

この世界では
下僕として
使ってやろう

ありがたき
幸せ――
何なりと
よろこんで
お役に――

…その

お役に
立ちまする

はい

黙れ！

ここは
大きな街と
見た

たちに
チャリオット
なり

空飛ぶ
じゅうたんなり

調教ずみの
ドラゴンなり

そのほうどもの国で
貴人が使うに
ふさわしい乗り物を
調達してまいれ

そのあと

わらわの地位に
ふさわしい
着物や宝石や奴隷を
手に入れられる
場所へ案内せよ

あすから
この世界の征服に
とりかかる

は…
はいっ

ただいますぐに
馬車を呼んで
まいりまする

待て

ムン!!

裏切りなど
ゆめ考えるで
ないぞ

わらわの目は
壁をとおして
人の心の中まで
見ることが
できるのじゃ

どこへ
行こうと
わらわの目が
見ていると思え

命令に
そむくそぶりが
見えたら
即座に
呪いを
かけるから

忘れるな

呪いによって
そちが
腰を下ろそうと
するものすべてが
灼けた鉄のごとく
熱く感じられ

ベッドに
横たわれば
かならず足もとに
目に見えぬ
氷の冷たさを
感じることに
なるであろう

さあ

行け

つづく

裏切りなど
ゆめ考えるで
ないぞ

さあ

行け

第12話　アンドリュー伯父の受難の始まり（後編）


ドン
ドン
ドン
ゴゴゴ…
ゴゴゴ…
ハッ…

……

……

……

結局 今まで
私にいっさい関心を
示さなかったわね…

ケタリーさんを
手に入れたからか

今では
ディゴリーにすら
興味がないみたいだし

魔女って
おそろしく
実利的ね！

コッ

コッ

あの老いぼれめ

何をしておるのじゃ

コッ

コッ

コッ

キュッ

わたし
家に
帰らなくちゃ

ずいぶん
遅くなっちゃった
きっと
叱られるわ

ね

たのむから
できるだけ
早くもどって
きてよね

ふう——っ！

あいつが
うちにいるなんて
ぞっとするよ

それはもう
伯父さんの
責任でしょ

これからどうするか
計画を立てないと

だいたい
こういう
ややこしいことに
なったのは

伯父さんの
魔法のせい
なんだから

それでもさ

また来て
くれるだろう？

こんなピンチに
ぼく一人残して
帰っちゃうなんて

ありえないよ

わたし

トンネルを通って
帰るから

……

…ちっ

それが
いちばん早いし

また来て
ほしいんなら

ごめんなさい
ぐらい
言うべきじゃ
ないの？

ごめんなさい
だって？

女の子って

これだから

わかんないんだ！

ぼくが

何をしたって

いうの？

あら

べつに何も

ただ

あの蠟人形の広間で

わたしの手首を

もげそうなくらいに

ねじっただけよ

ひきょうな

悪ガキ

みたいにね

あと

ベルをハンマーで

打っただけ

バカみたいに

それから

あの森で
家に帰る水たまりに
飛びこむ前に

あんたが後ろを
ふりかえったせいで
あの女がくっついて
きちゃっただけ

それだけ
ですけどね

はあ！

わかったよ
ごめんなさいって
言うよ

蠟人形の
広間でのことは
ほんとうに
悪かったと
思ってるし

さ
ごめんなさいって
言ったよ

だから
たのむよ
もどって
きてよね

もどってきて
くれないと

ぼく
すごく
困るんだ

あんたに何か
起こるって
わけじゃ
ないでしょ

灼けた鉄の椅子にすわらされたりベッドに氷を入れられたりするのは
ケタリーさんなんだから
ちがう？
そういうことじゃないんだよ
ぼくが心配してるのは母さんのことなんだ
あいつが母さんの部屋にはいっていったらどうなる？
母さん
驚いて死んじゃうかもしれないんだよ？
…わかったわ
ああ…
そういうことね

仲直り
してあげる

また
来てあげるわ

来れたらね

ホッ…

でも

イヤ…とにかく

もう
行かなくちゃ


ページ









いやはや

仰天のきわみだわい

ミニ…ぬぉぉ…

まったく

この歳になって！

ジュル

たまげた

……

キュッ

104

あれは
いい女だ

いい女だなぁ

とびっきりの
上玉だ



なあ
アン
ドリューよ

おまえさんは
その歳にしちゃ
おそろしく
若々しく
見えるぞ

いや
じつに
なかなか
いい男だわい

サラ

一頭だての馬車を呼んできてくれ

は…

はいっ

ガチャ

キキッ

ガチャ








あー……
レティティアさんよ

わたしは…

…その……

出かけなくては
ならんので

五ポンドばかり
用立てて
もらえないかね

スリ

いい子
だから——

だめ
ですよ

兄さん

兄さんにお金は貸しませんと

何度言っているかしれないでしょう

なあ聞き分けのないことを言わんでおくれレティティアちゃんよ

きわめて重要な用件なのだ

金を用立ててくれないとわたしはひどく困った立場に追いこまれてしまうのだよ

兄さん

わたしに
お金を無心する
なんて

恥ずかしいと
思わないの
ですか

うちを
三十年前より
ずいぶん貧乏に
してくれたのは
どこの誰かしらね

ブランデーと葉巻の
出費ばかりを
重ねて

「レティちゃんに
代わって
財産を管理して
あげよう」
などと言いながら

仕事
ひとつせず

レティ
ちゃんや！

あんたには
わからんかも
しれんが

きょうは
予定外の出費が
かなりかさみそう
なのだよ

ちょっとした
接待をしなくちゃ
ならんのでね

さ

たのむよ

めんどうな
ことを言わない
でおくれ

…接待って

いったい
誰を接待
するのです？

あー…

……その

非常に高貴な
お客人が

たったいま
到着なさった
ところなのだ

ムムー…

～～

高貴な
お客人が

聞いて
あきれますよ！

ゴッ

この一時間

玄関のベルは
一度も鳴ってないじゃ
ありませんか

ゴッ



奴隷
おい

チャリオットひとつに

何時間待たせるのじゃ？

つづく

第13話　玄関前の大騒ぎ（前編）

おい
奴隷

チャリオットに
ひとつに

何時間
待たせる
のじゃ？

兄さん

さる高貴な外国の方だ

このお若い方はどなたですの？

非常に重要なお…

…ひ……

お方なんだ

馬鹿馬鹿しい！

フ…

いますぐこの家から出ていきなさい

この性悪女！

出て
いかないと
警察を
呼びますよ

この女は
何者じゃ？

わらわに
吹き飛ばされたく
なければ
ひざまずけ

下人め

この家で
そのような
言葉づかいは
許しませんよ





そんな
ことだろうと
思ったわ

この女
飲んだくれて
いるのね

酔っぱらい
とはね！

……

まともに
しゃべることも
できないじゃ
ありませんか——

チャ

失礼
いたします
旦那さま

すばらしく
にぎやかな朝の時間を
すごしていた

す……







馬車が
まいりました
――

す…

案内せよ
奴隷

ボン
暴力は
まことに遺憾で…

ボン
抗議
せざるを……

ガッ!

ズズ

バタン

たいへんだ！

魔女が
ロンドンに
野放しに
なっちゃう

アンドリュー
伯父さんと
いっしょに…！

いったい
どういうことに
なるんだろう……

あ

ディゴリー
坊っちゃま

ミス・ケタリー
が…！

まったくもって
愉快な一日を
すごしていた

ト!!

!


ガッ…
いたた…


ガ…

フゥ…
打ち身で
すんで
よかったわ

ホ…

生まれてこのかた
経験したことがないような
一日をすごしていた

サラ

ミセス・カーク
ディゴリーの母の
お昼ごはんは

わたしが
持っていき
ますから

あなたは
いますぐ
交番へ行って

頭のおかしい
危険な女が
野放しに
なっていると
伝えなさい

カチャ

カチャ

カチャ

カチャ

カチャ…

ぱくっ

…問題は
いかにして
一刻も早く魔女を
もとの世界へもどすか

あるいはとりあえず
この世界から
追い出すかということ……

どうあっても
魔女を家の中で
暴れさせる
わけにはいかない

お母さんが
魔女を見たら
たいへんな
なる

そして

できることなら
ロンドンの街中でも
魔女が暴れるのを
阻止しなくちゃ

魔女は

チャーンで
王宮の門を
吹き飛ばした

あの
とんでもない魔力で
この世界を征服する
つもりなんだろう

いま現在
でさえ

バッキンガム宮殿や
国会議事堂を
吹き飛ばし

多数の警官が
吹き飛ばされて
ちっぽけな
ちりの山に
なっているに
違いない

カチャ

そして

はっきり
言えることは

ぼくには
何ひとつ打つ手が
ないということだ

…だけど





あの指輪は
磁石みたいに
効いたんだっけ

ぼくが魔女に
さわってる
あいだに



黄色い
指輪を
つければ

魔女もぼくも
〈世界のあいだの森〉に
行くはずだ

そしたら

あれは

あの場所のせいで
起こったこと
なんだろうか

それとも

魔女はまた
弱るのかな？

自分の世界から
引きずり出された
ショックで
ああなっただけ
なんだろうか？

どっちに
しても

やって
みるしかない

あいつを
どうやって
見つければ
いいんだろう？

レティ
伯母さんは

行き先を
ちゃんと
言わないと
外出を許して
くれそうも
ないし

手持ちの
お金は
二ペンスしか
ないし

ロンドンじゅう
探しまわるには

乗り合い馬車や
市電に乗るお金が
いるしなぁ…

…どっちにしても

ヤヤ…

どこを探せばいいかなんて

見当もつかないや

アンドリュー伯父さんはまだ魔女といっしょにいるんだろうか？

ガラッ

…けっきょく

ぼくに
できるのは

伯父さんと魔女が
家にもどって
くるのを願って
待つことだけだ

玄関を
見張って

二人が
帰ってきたら
いそいで
駆けだしていって

魔女が
家にはいる前に
つかまえて
黄色い指輪を
つけなくては

ここからなら
玄関へ上がってくる
石段も見張れるし

家の前の通りも
見張ることが
できるから

知らないうちに
誰かが玄関から
はいってくる
心配はない

ポリーはいまごろ
何してるんだろう……？

その頃——

ヒタ…

ヒタ…

ポリー…！！

昼食に
遅れるなんて
今までいったい
何をしていたの？

ディゴリー・カークと
出かけていたの

ビショ…

びしょぬれ
じゃない！

…まあ！

こ…これは
水たまりに
入ったの

…森の中に
あった……

…つまり

公園の中に
あったの？

公園のような
ところだったかも…

あながち
うそではない

どこの森？

わからない

黙って
出かけて

ロンドンの
よく知らない
場所で

よく知らない
公園にはいって

水たまりに
飛びこんで
遊んできた

**なんて
悪い子！**

もう一度
こんなことが
あったら

ゴゴゴ

もう
「カークさん家の
息子さん」とは
遊ばせません
からね

ゴゴゴ

…罰として

えー

昼食は
おいしいおかずや
デザートは
全部ぬきです

っ！

しょぼ…

…

たっぷり二時間
ベッドにはいって
じっと
反省して
いなさい

キィ…

ポリーは
どうしているの
だろう

ン…。

ドクン

あっ

ドクン

ドクン

ドクン

魔女だ！

ドクッ

…違った

ドクン

来た！

ガタ

ゴト

BAKERY

ガタ

ゴト

……

ドクン

ドクン

ドクン



！！

まあ

おいしそうな
ブドウ
ですこと！

妹には
何よりですわ

でも
かわい
そうに！

メイベルは
いまとなっては

若さの国から
摘んできた果物でも
食べさせなくては

治らないんじゃ
ないかと……

この世の
ものでは
効きそうも
なくて……



〈若さの国〉？

……だって

〈若さの国〉は

どこかに
ほんとうに
あるのかも
しれない

いまのぼくは

……いつもなら
こんな会話

ドクン

伯母さんが
たいした意味もない
大人の会話を
しているだけだと思って

ドクン

気に
もとめなかった
だろう

ドクン

知っているじゃ
ないか

この世とは
ちがう

別の世界が
ほんとうに存在
することを……！

つづく

第14話　玄関前の大騒ぎ（後編）

もしかしたら

どこかに

ほんとうに

〈若さの国〉が

あるのかもしれない

何だって

不可能とは

言いきれない

はずだ

だって

いまの
自分は

この世とはちがう
別の世界が
ほんとうに
存在することを
知っているし

じっさいに
そういう世界のひとつへ
行ってきたじゃないか…！

どこか
ほかの世界に
お母さんを
治してくれる果物が
あるかもしれない！

それに

それに——

…そんな都合のよいことなどとても実現するはずがないだろう？

これまで何度も願っては失望してきた？

…でも

もしかしたら…

し実も……
もしかしたら
実現できるかも
しれない……

いままでだって
もうすでに
不思議なことが
さんざん起こって
いるのだし

それに
自分の手もとには
魔法の指輪があるのだ

あの森の
いろんな水たまりに
飛びこめば

さまざまな世界へ
行けるに
ちがいない

ひとつひとつ
手あたりしだいに
探してみれば
いいのだ

そうすれば
お母さんが
治るかもしれない

何もかもが
以前のように
なるかもしれない……

あれ？

何だろう？

消防馬車かな？

どこの家が火事なんだろう？

…たいへんだ

ドキッ

こっちへ来るぞ…！

あ！……



あいつだ!!




ドン
ドン
ドン


ドドドド
ドドドド

ガヤ
ガヤ
ガヤ
ガヤ
ガヤ
どうしたの？
ん？



だいじょうぶか!?

おい

引っぱれ!

ドドドド

ドドドド

いやこっちに!

ドガッ

ドガッ

こっちに引っぱれ!

ガチャ

ドガッ

伯父さん…?

あの女です

ホッ

あの女です…！

ホッ

お願いします

おまわりさん

わたしの店から
何十万も
何百万もする商品を
盗っていったんです

あの女め

ワナワナ

あの
首にかけている
真珠のネックレス
見えますか？

あれ
うちの
店のものです

おまけに
あの女に一発
殴られたんです

そうだよ
おまわりさん
あの女だよ

それにしても
みごとな青タンだ
きれいに一発
食らったもんだ

いやはや
力の強い
女だなぁ！

ビーフステーキ用の
生肉で湿布すると
いいですよ

だんな
効き目
ばつぐんです

さてと

こ
ど
で
これはいったい
どういうこと
ですかな？

だ
あの女が——
からね

その辻馬車の
じじいを
逃がすなよ

そいつが女を
そそのかし
たんだ！

ゴゴゴ？

さてさて

いったい
これは何事
ですかな？

しょむふ

をむふう

ぽむふい

ふざけるのは
やめなさい

これは
笑いごとでは
ありませんぞ

いいですか

その帽子を
取りなさい











ありがとう

ありがとう
ございます…

ありがとう
ございます

いやはや

すっかり縮み
あがりましたわい

どなたか

ブランデーを
一杯
くださらん
かな——

いいですか

1

事情を
聞かせて
もらいますよ

あそこにいる
若い女性は

おたくの
お連れ
ですかな？

あぶない！


?!
ドドド
ゴゴゴ

…なんとか
魔女にさわれる
ところまで
近づきたい
けれど……

こっちは
人が多すぎる

…かといって
反対側へ
回るには

あの興奮した
馬の後ろ足と
鉄柵とのあいだを
通らなきゃいけない…

…でも

危険
だけど…

行かなきゃ…！

あの

ちょっと

おまわりさん！

あの女が
乗ってんのは

ハアッ

あたしの
馬なんでさ

んで
あの女が
木っ端みじんに
しやがった馬車も

あたしの
馬車なんでさ！

一人ずつ順に

一人ずつ順に
やりますから…

あの馬の
こたぁ

んな悠長なこと
言ってる場合じゃ
ねえんです

ありゃ
そんじょ
そこらの馬じゃ
ねえんだ

あたしのほうが
よくわかってん
だから

あれの
父親は
騎兵隊の
将校さんを
乗っけてた
軍馬なんでさ

あの女が馬を
あおりつづけたら
いまに
死人が
出ますよ

ちょっと

あれのとこへ
行かして
くださいよ

ほれ
嬢さんよ

その馬の手綱を
取らして
おくんなさい

そんであんたは
降りたほうがいい

あんたみたいな
レディが

こんな
やっかいごとに
巻きこまれたくは
ねえだろう？

おうちに帰って
お茶でも飲んで
おとなしく
横になるがいいよ

そうすりゃ
気分が
良くなるって

よしよし

落ち着け
ストロベリー

いい子だ

よしよし

落ち着け…

ダメ!!

…犬め

手王の乗馬から手を放せ

余は

女帝ジェイディスであるぞ

つづく

第15話　街灯下の乱闘（前編）

余は

女帝
ジェイディスで
あるぞ

ほう
女帝
だって？

お偉い
ことで

コルニー・ハッチ※の女帝に万歳三唱だ！

Hip hip hooray!

Hip hip hooray!

Hip hip hooray!

Hip hip hooray!

…？

え？

※ロンドンにある精神科病院

ゴゴゴ

ゴゴゴ

ゴゴゴ

ゴゴゴ



ヒヒーン

ドドドド

馬が少しのあいだ
じっとしていて
くれさえすれば

いまだ！

魔女のかかとを
つかめるかも
しれない…！

ーーーーーー！

<

止めなくちゃ！

いいところに来てくれた！

ぼくにしっかりつかまってて

それから指輪のほうたのむよ

黄色だからね

コクン

ぼくがいいって言うまで指輪つけないで

トン

あの女を
引きずり
下ろせ

敷石を
ぶつけて
やれ

軍隊を呼べ！

ヒヒーン!!

ヒヒーン!!

ヒヒーン!!

わらわが
そのほうどもの世界を
征服したあかつきには

この代償は
高くつくぞ

この都には
石ひとかけらも
残らぬであろう

この地を
チャーンのごとく

フェリンダの
ごとく

ソーロイスの
ごとく

ブラマンディンの
ごとくにして
くれようぞ

——マダム
…お嬢さん……

…どうか

どうか
お静まり
あそばして…




ドドドド
うまぴょい～

…おう

……おう…

ゲズッ

これは幻覚か？

この世の終わりか？

わたしは魔術師になろうと思ってなったわけではないのだ

すべては誤解なのだ

こんなことは耐えられん

何もかも名付け親のせいだ

ゴチ

抗議せねばならん

ゴチ

ひどすぎる

ゴチ

こんな病弱の身なのに

ゴチ

ドールセットシャーの古い家系なのだぞ

…くそっ！

あいつを
連れてくるつもりは
なかったのに

これは
めんどうなことに
なったぞ

ポリー
そこに
いる？

いるわよ

そんなにぐいぐい
押さないでよ

押してないよ

…ちょっと



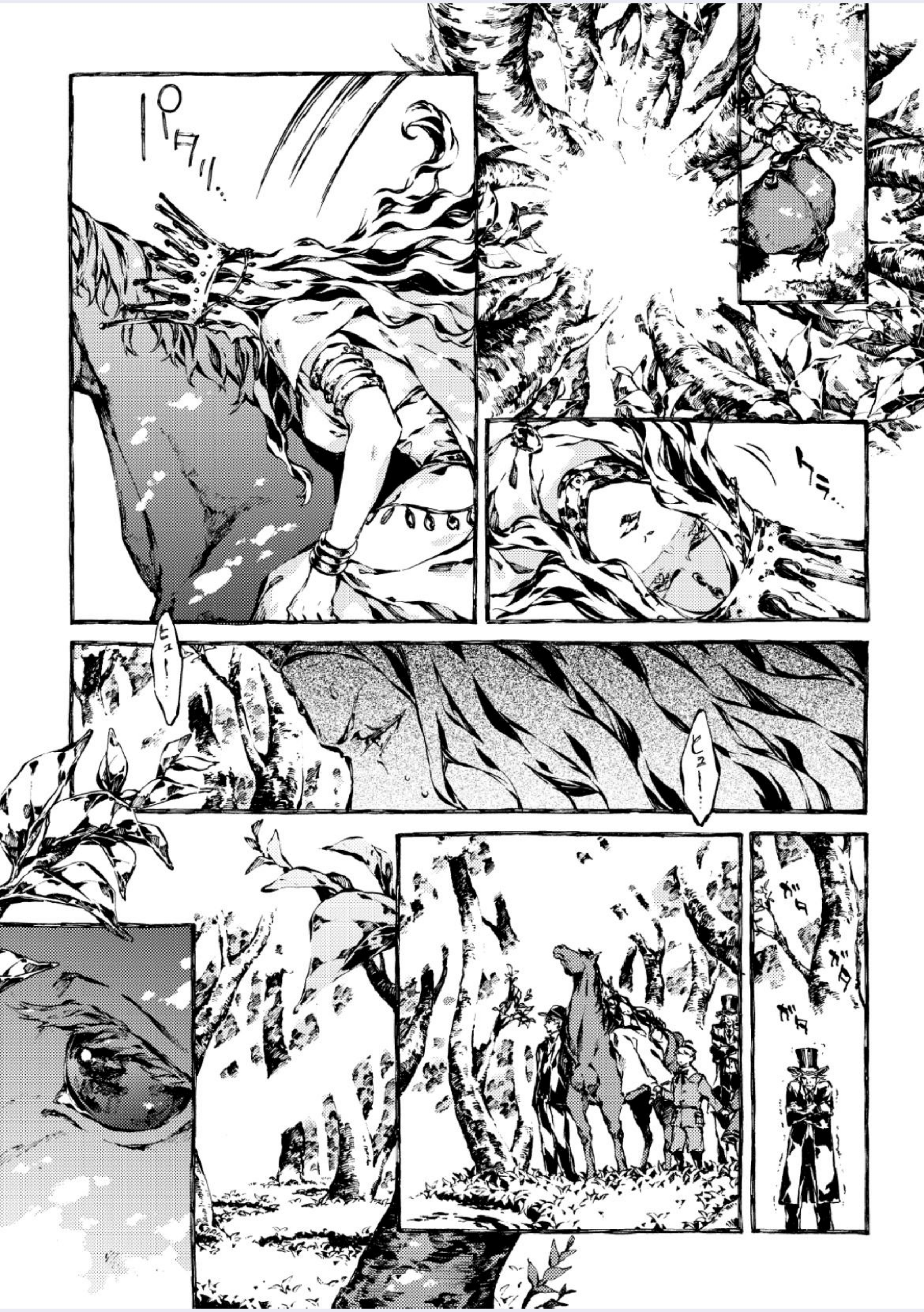
見てよ！

馬も
くっついて
きちゃった

それと
ケタリーさんも

あと
御者の
おじさんも！

混んでた
はずだわ


ドクン…
ドクン…
ドクン…

ポン ポン

よーしよし

いい子だ

こんなに
おとなしく
なったのを
見るのは

はじめて
だ！

よーしよし

どうどう

落ち着け


ﾖｵ…
いまよ！
緑！




ヤバイってこの匂い
なんだよこれ
お気の毒さま

な着そ
着いたんじゃ
ない？

どこかには
着いてる
みたいだよ

少なくとも
ぼくは何か
しっかりしたものの上に
立ってるけど？

ほんとだ

わたしも
そういえば
同じだわ

…だけど

どうしてこんなに
暗いのかしら？

ねえ

わたしたち
飛びこむ
水たまりを
まちがえたの？

たぶん

ここが
チャーン
なんだよ

真夜中に
もどってきたんじゃ
ないかな？

ここは
チャーンではない

ここは
からっぽの世界じゃ

〈無〉の世界じゃ

つづく

第16話　街灯下の乱闘(後編)

ここは
からっぽの世界じゃ





〈無〉の
世界じゃ

《無》の世界……

星ひとつない
漆黒の闇

足の下には
冷たくて平らな
何か

まさに
その通りかも
しれない

おたがいの
姿さえ
まったく見えない……

……わが命運も
ついに
尽きたか

ああ…

そのような
ことを
おっしゃい
ますな

わが親愛なる
若きレディよ
どうか
そのようなことを
おっしゃいますな

そんなに
悪いことでは
ないはずです

そうだ
御者さん
フラスクを
持ちあわせでは
ないかね？

――ああ

酒が一口あれば
落ち着くんだが――

まあまあ

みなさん

どうかひとつ
落ち着いてください

骨の折れた方は
おりませんかね？

よかった

とりあえず
それだけでも
ありがたい
ことでさ

ここが何か
工事中の穴に
落っこちたんだと
したら…

——たとえば
地下鉄の新しい駅とか
ですがねぇ——

あんなふうに
落っこちたあとじゃ

ありえないような
幸運でさ

そのうちに
誰かやってきて
助けてくれるはず
ですよ

…で

もし
おっ死(ち)んじ
まったんだと
したら――

――だと
したら

…ありえないとは
言えませんからね…

まあ

海で何かあったら
もっとひどい目に
あうわけだし

人はどうせいつか
死ななくちゃ
ならんわけですから

まっとうに
生きてきた
人間なら

心配
することは
何もありゃ
しません

あたしの
考えを
言わしても
もらうなら

時間を
やりすごすのに
いちばん
いいのは

讃美歌を
歌うことだと
思いますよ

Come, ye thankful people, come

Raise the song of harvest home

All is safely gathered in

God our Maker doth provide

Ere the winter storms begin

For our wants to be supplied

……

Come to God's own temple, come

Raise ...

ブランデー…

それに葉巻のにおい？

ポン

指輪を
つけなさい

ポン

さっさと
おさらばしよう…

思か者め！

その小童から手を放せ

わらわを裏切ろうとする者には

わらわが人間の考えを聞きとれると言ったのを

忘れたか？

あらゆる世界で時の初めより誰も聞いたことがないような仕返しをしてやる

それに

ぼくのことを

こんな場所に
ポリーを
残して——

——あと
御者さんと
馬も残して

自分だけ
帰ろうとするような
人でなしだと
思ってるのなら

大まちがい
ですからね

…なんと
聞き分けのない
礼儀知らずな
小僧だ

しっ！


?



……

……如此也

命。

なんて美しい歌なんだろう！

おお……！

すてきな歌じゃありませんか？



空から声…？

いや……

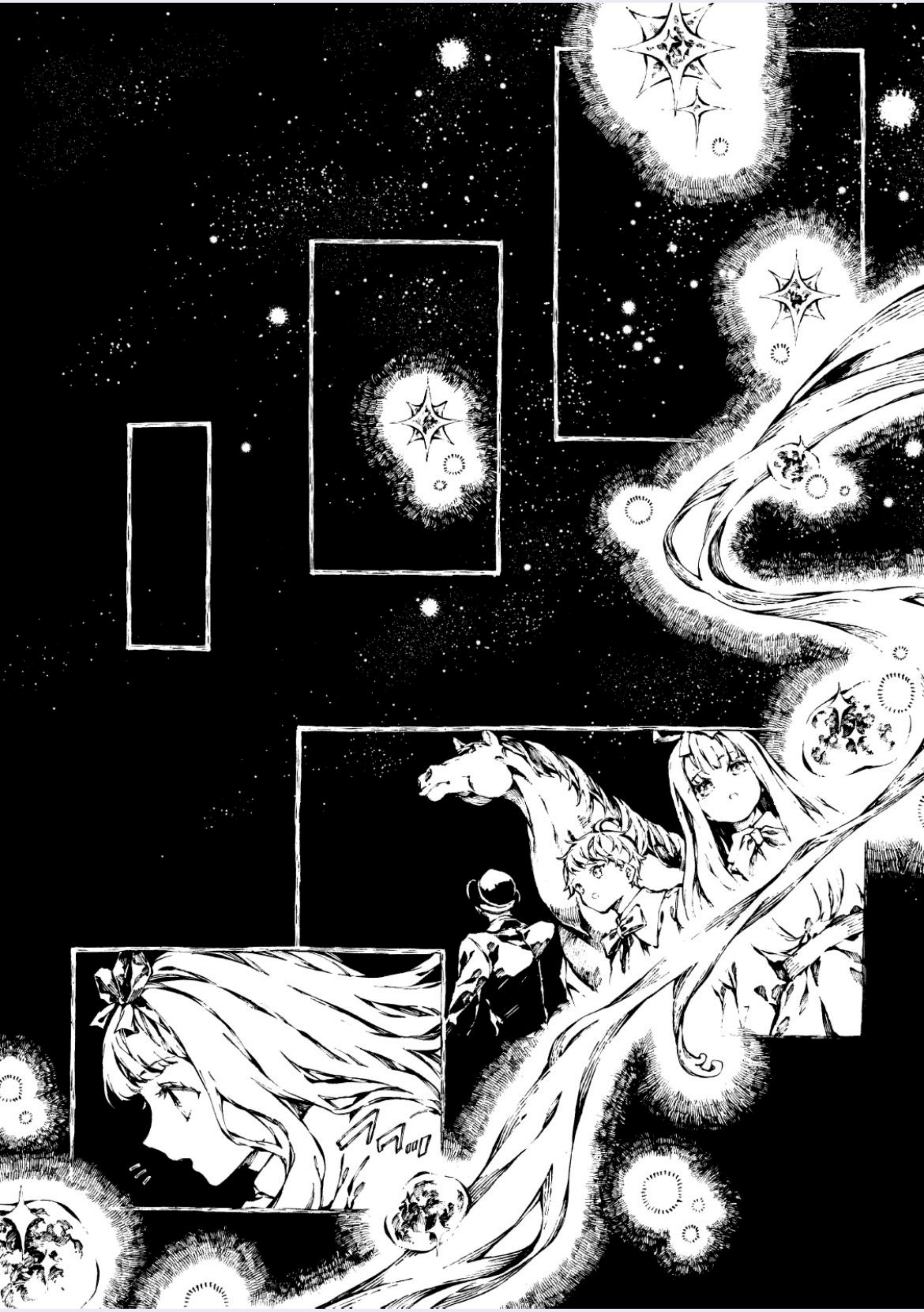
星たちが
歌っているんだ

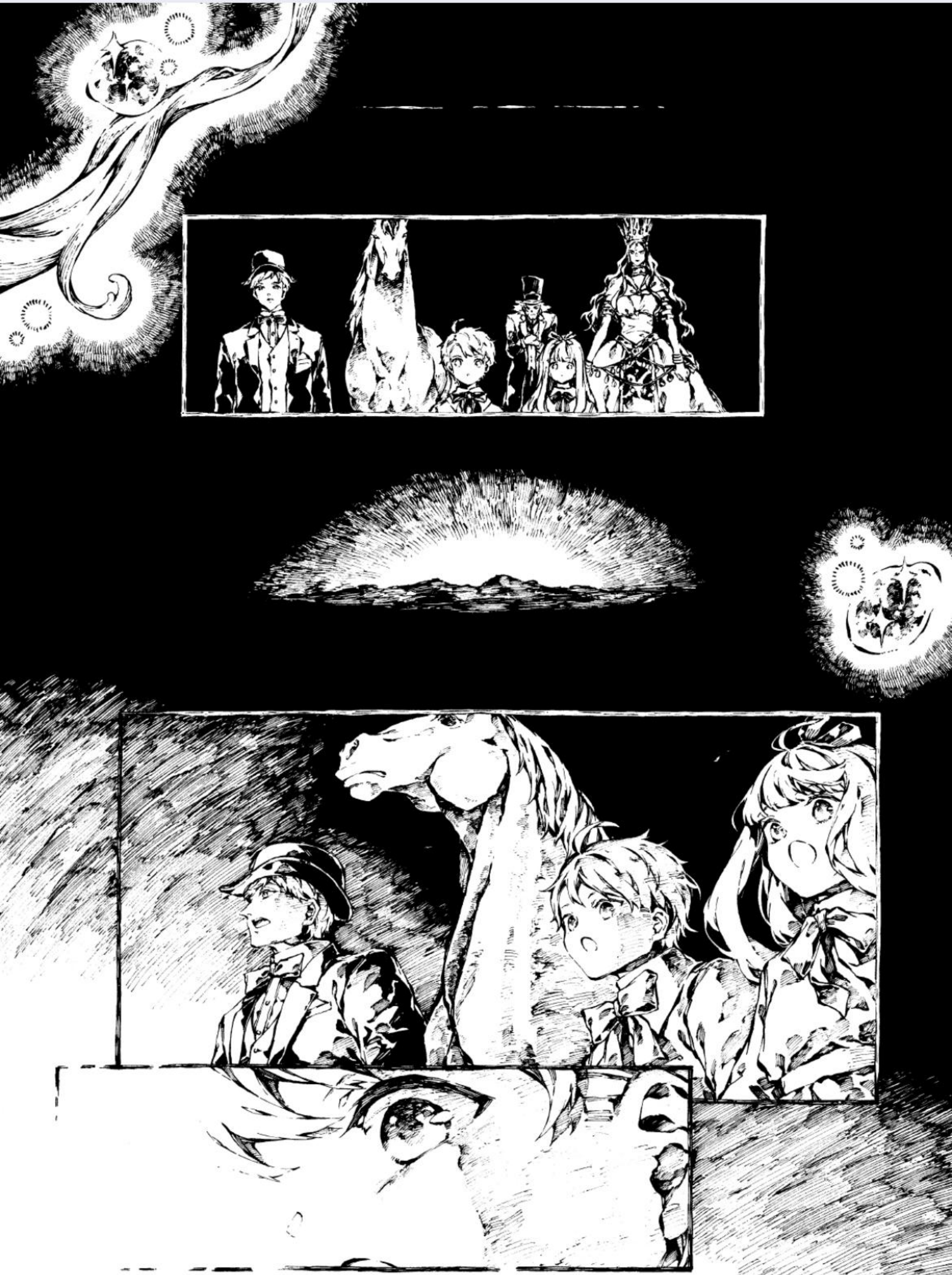
最初の声が
星々を空に配して
歌わせているんだ……

神に
栄えあれ！

こんなことが
あると
知ってたら

あたしゃ もっと
ましな人間に
なってただろう
がなぁ





…この世界全体が

わらわの魔法とはちがう魔法で満たされておる

それも

わらわの魔法より強い魔法で……

ガヤ

ガヤ

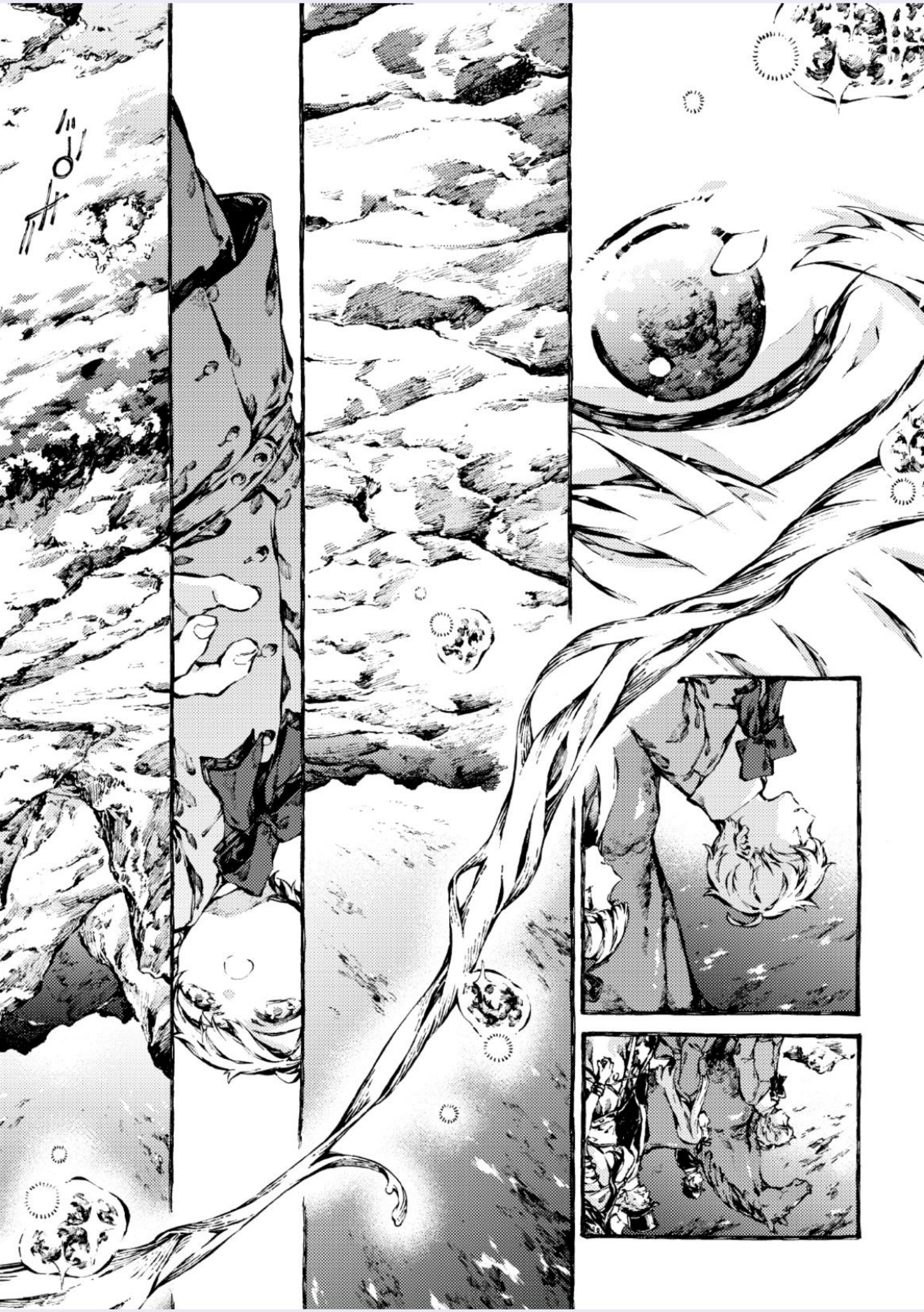
ガヤ

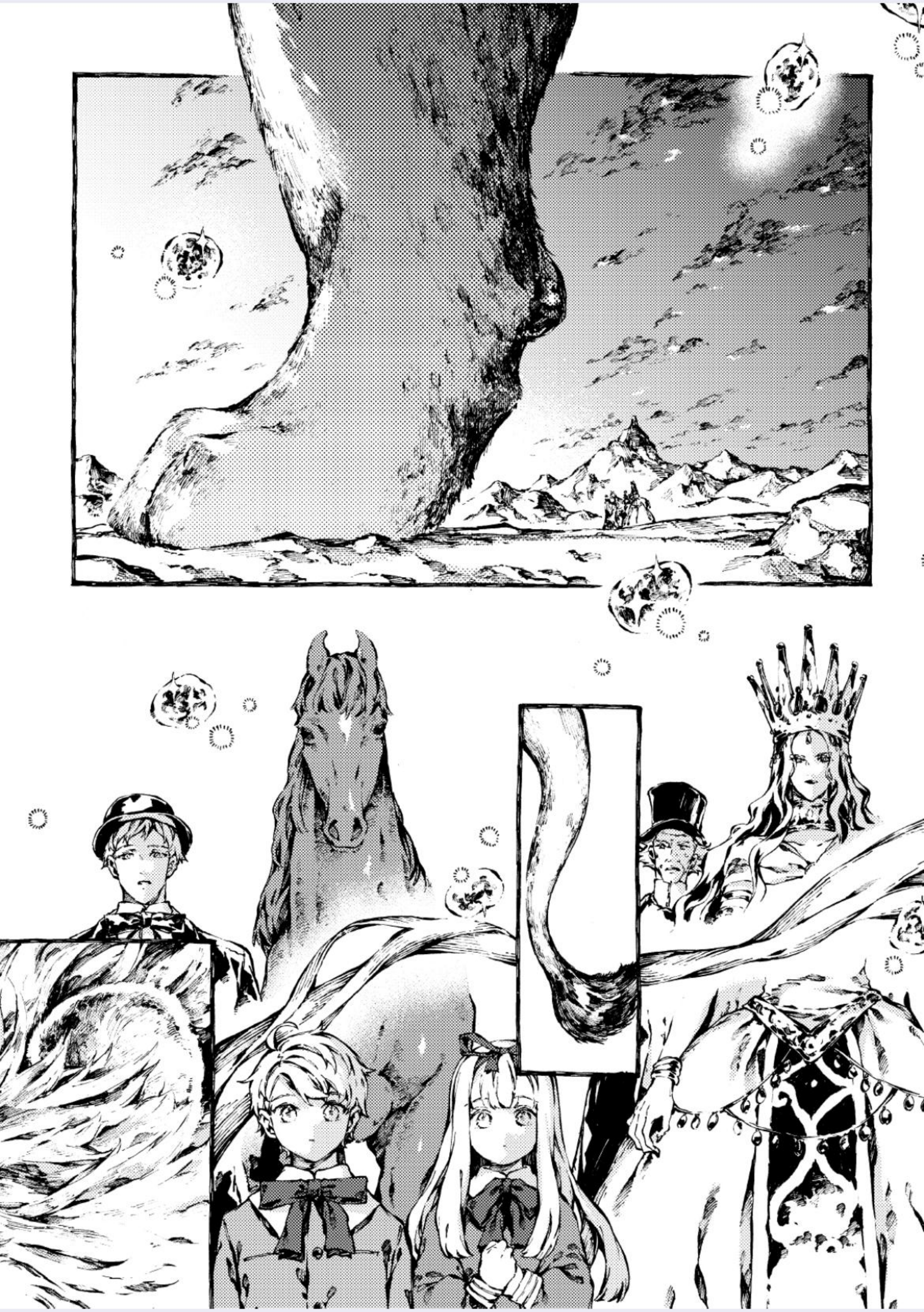
ガヤ

ドドド













……ここは
途方もなく
ひどい世界じゃ

仰せのとおりで
ございます

マダム

すぐに
去らなくては
ならぬ

魔法を準備せよ

はなはだ
不愉快な
場所ですな

文明の
かけらもない

もしもわたしが
もっと若くて

鉄砲を持って
いたら――

冗談じゃない！

おたく

あのライオンを
撃ち殺せると
思ってるわけじゃ
ないでしょうね？

そんな人
いるわけ
ないわ

魔法の
準備をせよ
老いぼれめ

かしこまりまして
ございます
マダム

わたくしは
子どもたち二人に
触れて
おらなくては
なりませんので…

さ
ディゴリー

あの女は
置き去りに
しよう…

いますぐ
家にもどる指輪を
はめなさい

…なに

指輪とな？

ドッ

ドッ

ドッ

そうさ

ぼくの
ポケットには

ポリーとぼくを
家に連れもどしてくれる
指輪がはいっている

いいか

よく見ろ！

ぼくの手は
いつだって
指輪に届くように
なっている

だから

ぼくたちから
離れてろ

おじさんには
すまないと思うけど

それに馬も
気の毒だと
思うけど……

しかたない

あんたたち二人は
両方とも
魔術師なんだから

いっしょに楽しく
暮らせばいいさ

みなさん

お静かに

聞こえる
この音楽が
聞きたいんです

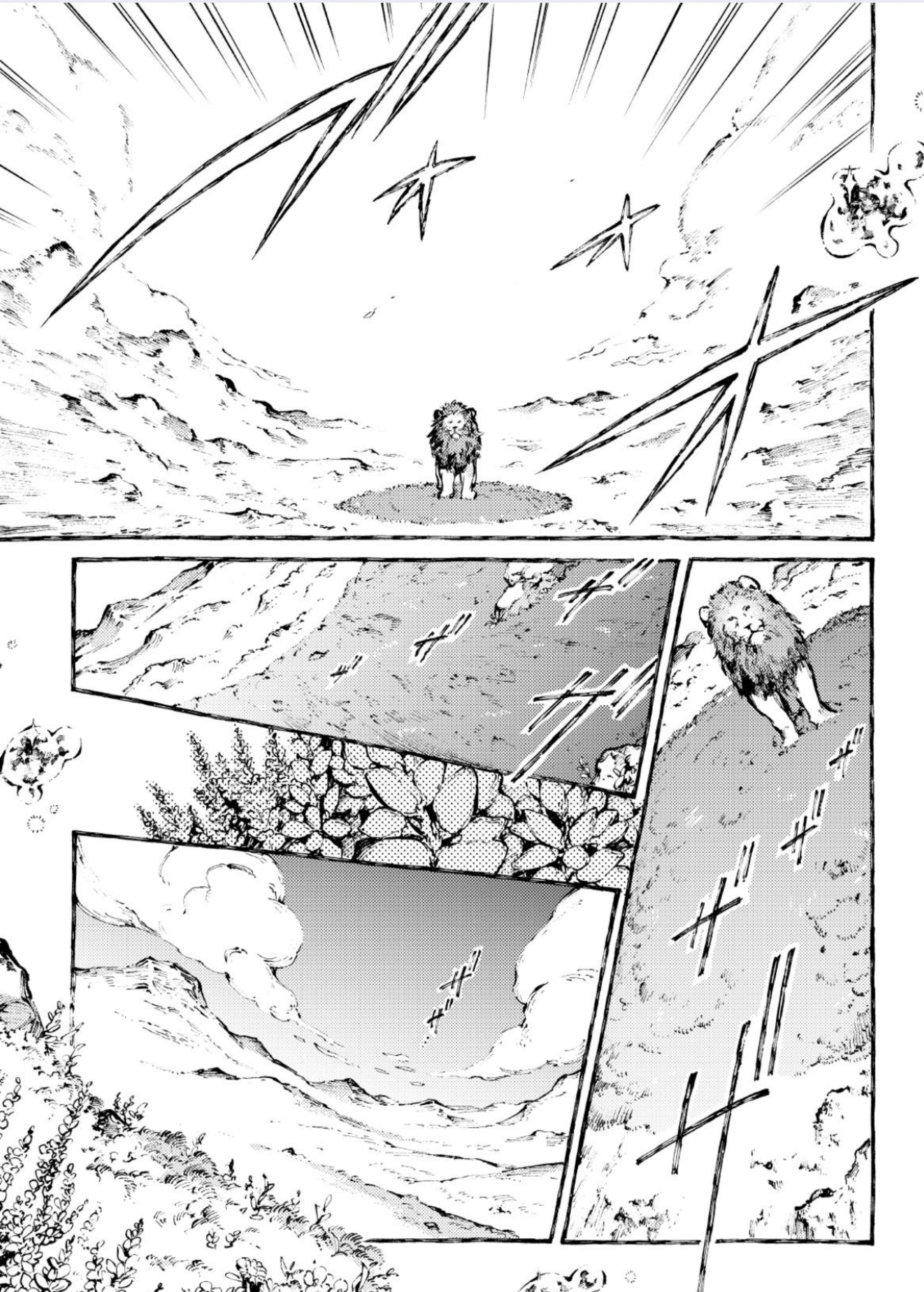
あたしゃ

つづく

第17話　ナルニア創世(前編)



——さっきまでとは
ちがう歌？



メキ
メキ
メキ

やめろ！

下がれ

だめだ
もっと
下がれ

ズ!!…

誰で
あろうが

その小童(こわっぱ)どもから
一〇歩以内に
近づいたやつは

脳天を
たたき割ってやる

おまえは
その小童といっしょに
こっそり
自分の世界にもどって

わらわをこの世界に
置き去りにする
つもりだったのだな

なるほどな！

…そうですとも

マダム

もちろん
そうですとも

当然ですよ

わたしはきわめて
不名誉かつ
不愉快なる扱いを
こうむったのですから

わが力の
およぶかぎり
丁重におもてなし
しようとしたにも
かかわらず

それに対して
あなたは何を
なさったか

あなたは
高級宝石店にて
強盗をはたらいた

いいですか
もういちど
申します

――あなたは
強盗をはたらいた
のです

そして
とほうもなく
高価にして
豪勢なる昼食を
食べさせろと
要求し

おかげでわたしは
金鎖つきの時計を
質に入れるはめに
なった…

申し上げておきますがね
マダム

わが家系には質屋通いをした者は一人たりともおらんのです

いとこでヨーマンのエドワードを除いては

あの胸につかえるような食事のあいだじゅう——いまだに思い出すだけでむかむかする——

あなたの態度も会話も

周囲の人たちが眉をひそめるようなものでした

わたしは公衆の前で面目をつぶされたようなものです

もう二度とあのレストランに顔を出すことはできますまい…

あなたは警官にも襲いかかった

しかも——

やめましょうだんな

やめときましょう

いまは
見ること
聞くこと
です

しゃべるときじゃ
ありません

ムニュ

ムニュ

……

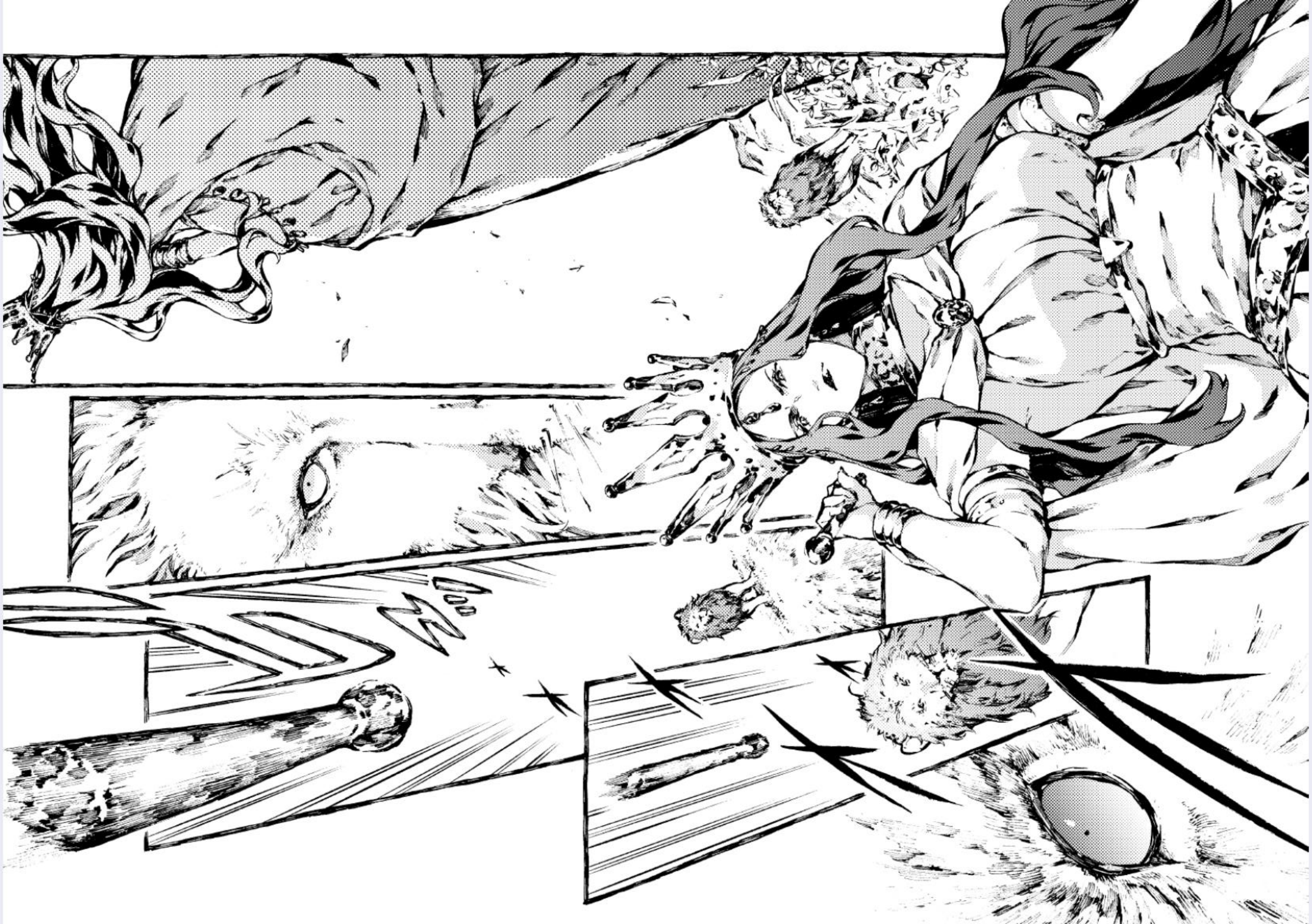
…少しずつ

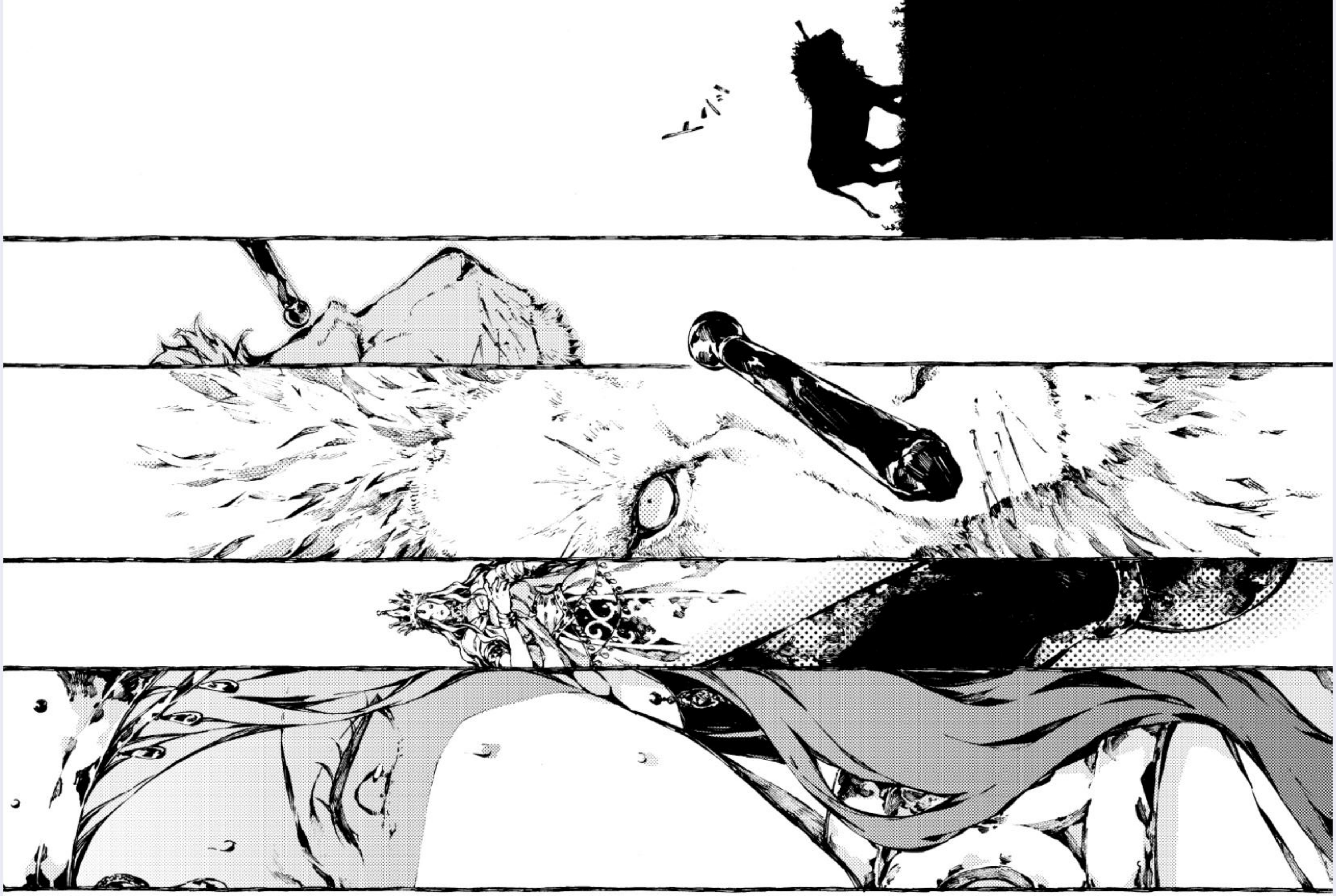
少しずつ…
近づいて
きている？
ニヨキ
ニヨキ
ニヨキ

すべての
ものは

ライオンの
頭の中から
生まれてくるに
ちがいないわ！




ZOOO









ゴゴゴ

さあ
ディゴリー

あの女も
いなくなったし

ライオンめも
行ってしまった

わたしと
手をつないで

すぐに指輪を
はめなさい

近寄るな

ポリー

あいつから
離れてろ

ぼくのそばへ
おいで

まっぴらだね

おまえは
とんでもなく反抗的で
しつけの悪い子どもだ

いますぐ
言われたとおりに
しないか

アンドリュー
伯父さん

警告
しておく

一歩でも
近づいたら
ぼくたち
消えるからね

ぼくたちは
ここにいて

これから
何が起こるか
見たいんだ

わたしの
このありさまを
見るがいい

いちばん
上等な上着と
いちばん上等な
ベストだったのに

ここが
つまらん場所だとは
言わん

わたしが
もう少し
若ければ…

——いや
先に若い者を
来させれば
よかったんだな
猛獣狩りの
うまい
やつを——

おじさんも
ほかの世界を
知りたがって
いたんだと
思ったけど？

いま現実に
そういう世界に
やってきて
うれしいと
思わないの？

うれしい
だと!?

この国も
使い道が
ないわけでは
あるまい

気候は
まことに
けっこう

こんなに
いい空気は
はじめてだ

状況さえ
もう少し
良ければ

やりようも
あった
だろうが…

…ああ

鉄砲さえ
あればなぁ

鉄砲なんて
冗談じゃない

あの馬のほうが

…誰とは
言いませんが

あたしは
ストロベリーに
ちょいと
マッサージでもして
やってきます

そこらの
人間より
よっぽど話が
分かるってもんでさ

シーッ

伯父さん

まだあのライオンを
銃で撃ち殺せるなんて
思ってるんですか？

魔女が鉄の棒を
投げつけたって
へっちゃら
だったのに

いやぁ

あれは
欠点もあるが

なかなか勇敢な
お嬢さんじゃて

…？

元気がよくて

けっこうな
ことだ

ポポ

ポポ

何が
けっこうな
ものですか

とんでもないと
思うわ

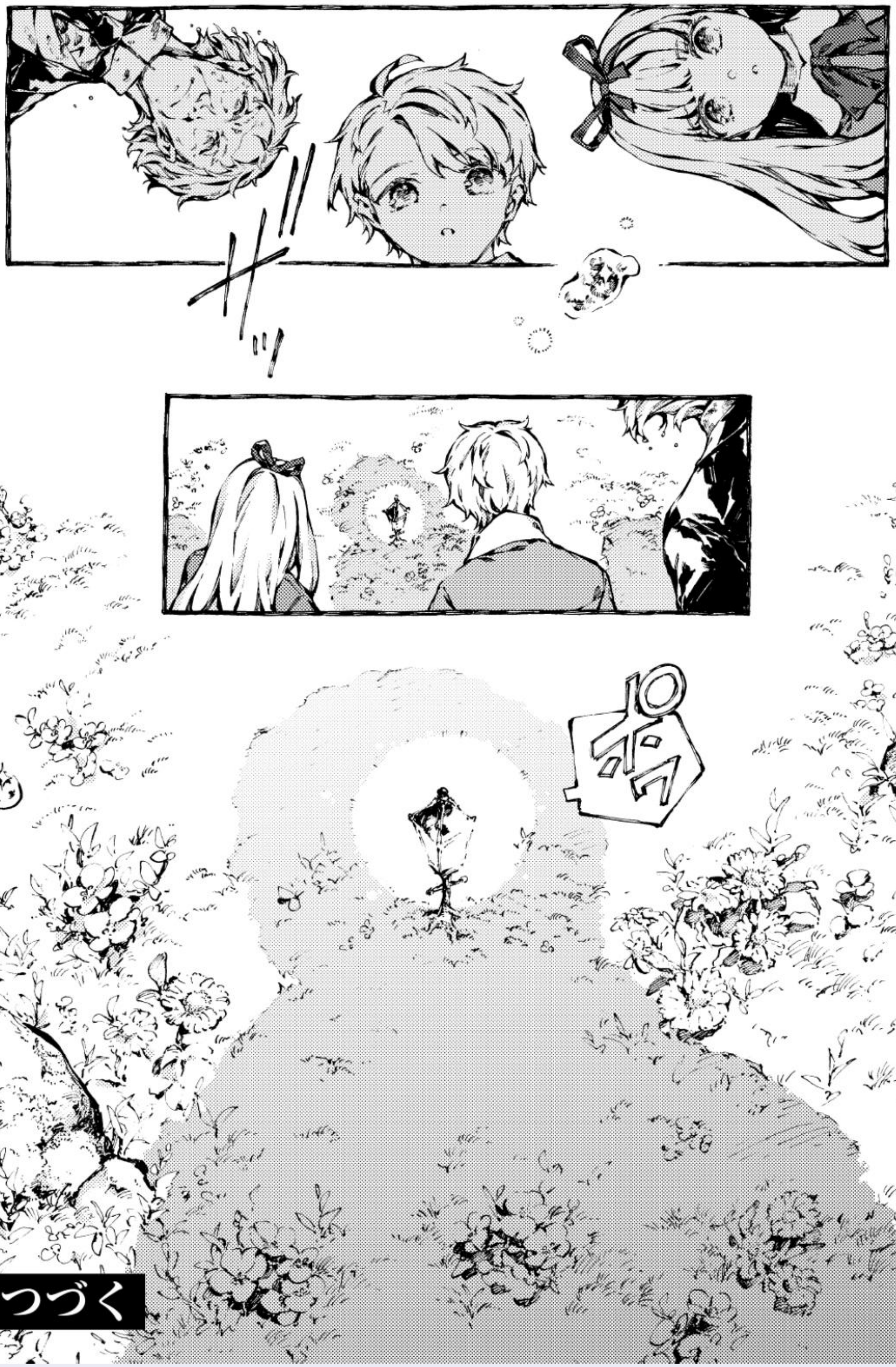
あのライオンが
魔女に何をした
というの？

あれ！

ありゃ何だ？

こっちへ来て
見てごらんよ

ねえ
ポリー


つづく

第18話　ナルニア創世（後編）

キィィン

……これ

生きてる

ショキ

ショキ

ショキ

――て言うか

明かりが
ともってるよ

ボヘ

このわたしでさえ

かような魔法が
あろうとは
夢にも思わなかった

すばらしい

これは
すばらしいぞ

ここは
何もかもが
街灯さえも
芽を出して
成長する世界
なのだな

それにしても
街灯は
どんな種から
育つんだろう？

わからないの
伯父さん？

ここは

さっき鉄の棒が
落ちたところだよ

――魔女が
ロンドンの街灯から
ひきちぎった鉄の棒が

そういう
ことか！

それが
土にささって

小さな街灯になって
育ってきたんだよ

…もうかなり
成長しているけれど

いや

仰天

仰天

ほう

ほう！

わたしの魔術を
笑った連中め

これを見たら
なんと言うか？

あの
馬鹿な妹め

わたしのことを
頭がどうか
しておるなどと
言いおって

わたしは

ありと
あらゆるものが
生命力にあふれて
育っていく世界を
発見したのだ

コロンブスが
なんだ
コロンブスくらいで
騒ぎおって

アメリカなんぞ
これにくらべたら
何ほどの
ものでもないわ

この国で
商売する気になれば
可能性は無限だ

くず鉄を
運んできて
土に埋めれば

新品の機関車だの
軍艦だの
何でも
作れるわけだ

元手は
ただ同然で

育ったものを
イギリスへ持っていけば
目いっぱいの値がつく

わたしは
大金持ちに
なれるぞ

…それに

この気候！

もうすでに何歳も若返ったような気がする

ここで保養所を経営するのもよかろう

もちろん

何人かの人間には秘密を打ち明けねばならんが…

りっぱな療養施設を建てれば

年間二千万は下るまい

とにかく
あの獣を
撃ち殺すことが
先決だな

おじさまって
魔女と
そっくりですね

殺すことしか
考えないんだから

それでもって
わたし自身に
ついては

ここへ
移住してきたら
寿命が何年
延びることか

六〇を
越した者にとって
きわめて重大な話だ

この国で暮らせば
一日たりとも
歳を取らずに
すむかもしれん！

いやはや
驚いた

若さの国
とはな！

…え!?

若さの国!?

伯父さん

ほんとうに
ここが
若さの国だと
思うんですか？

——メイベルは
いまとなっては
若さの国から
摘んできた果実でも
食べさせなくては
治らないんじゃ
ないかと——

アンドリュー
伯父さん

この国には
母さんの病気を
治せるようなものが
あると思いますか？

ここは
薬屋じゃ
ないんだぞ

何を寝ぼけて
おるのだ

さっきの
話だが――

…伯父さんは
母さんのことなんか
どうだっていいんだね

心配してくれてるかと思ってたのに

だって

ぼくの母さんだけど

伯父さんの妹でもあるわけでしょ？

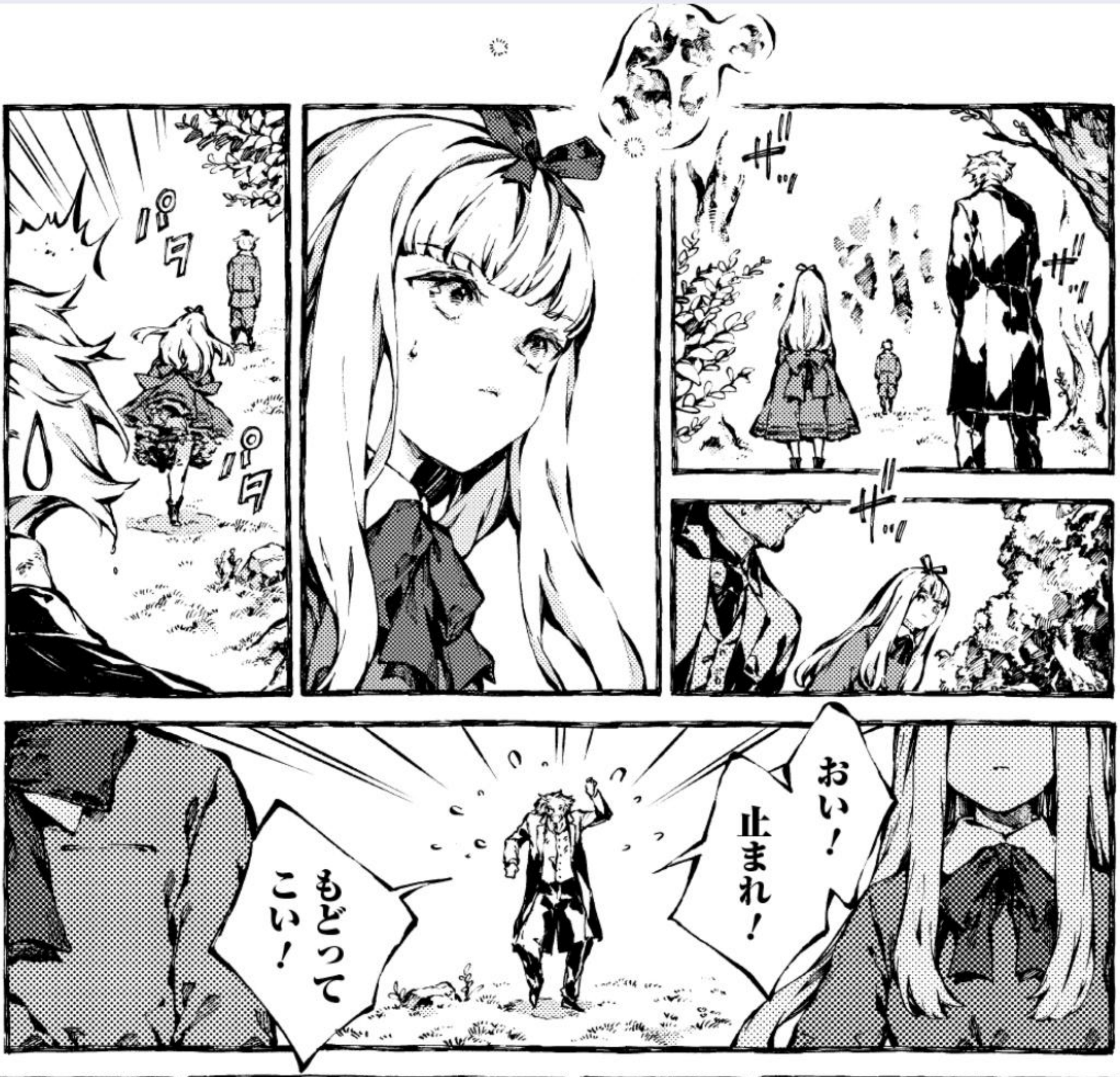
……でも

もういいや

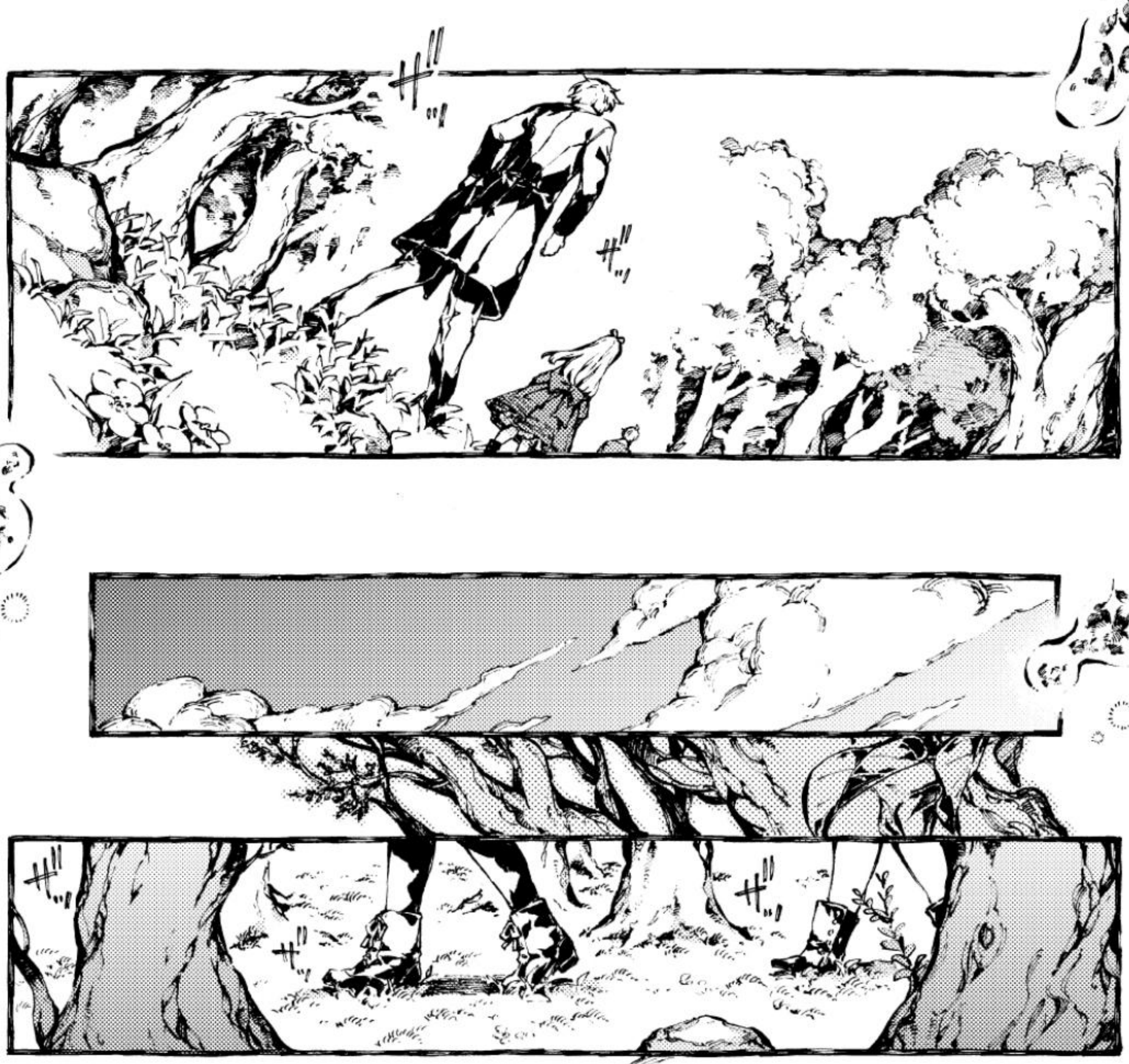
助けてくれるかどうか

ぼく

ライオンに直接聞いてくる


おい！
止まれ！
もどってこい！


……
…ぼうずめ
錯乱しおったな



…歌がふたたび
変化した？

…なんだか

すっごくワクワクする…！

とっても、動きたい気分だ！

いやぁ

なかなか元気のいいお嬢さんだ

あの気性は残念だが

それでもめっぽういい女に変わりはない

ああ

いい女だなぁ

ドゴ

ドゴ

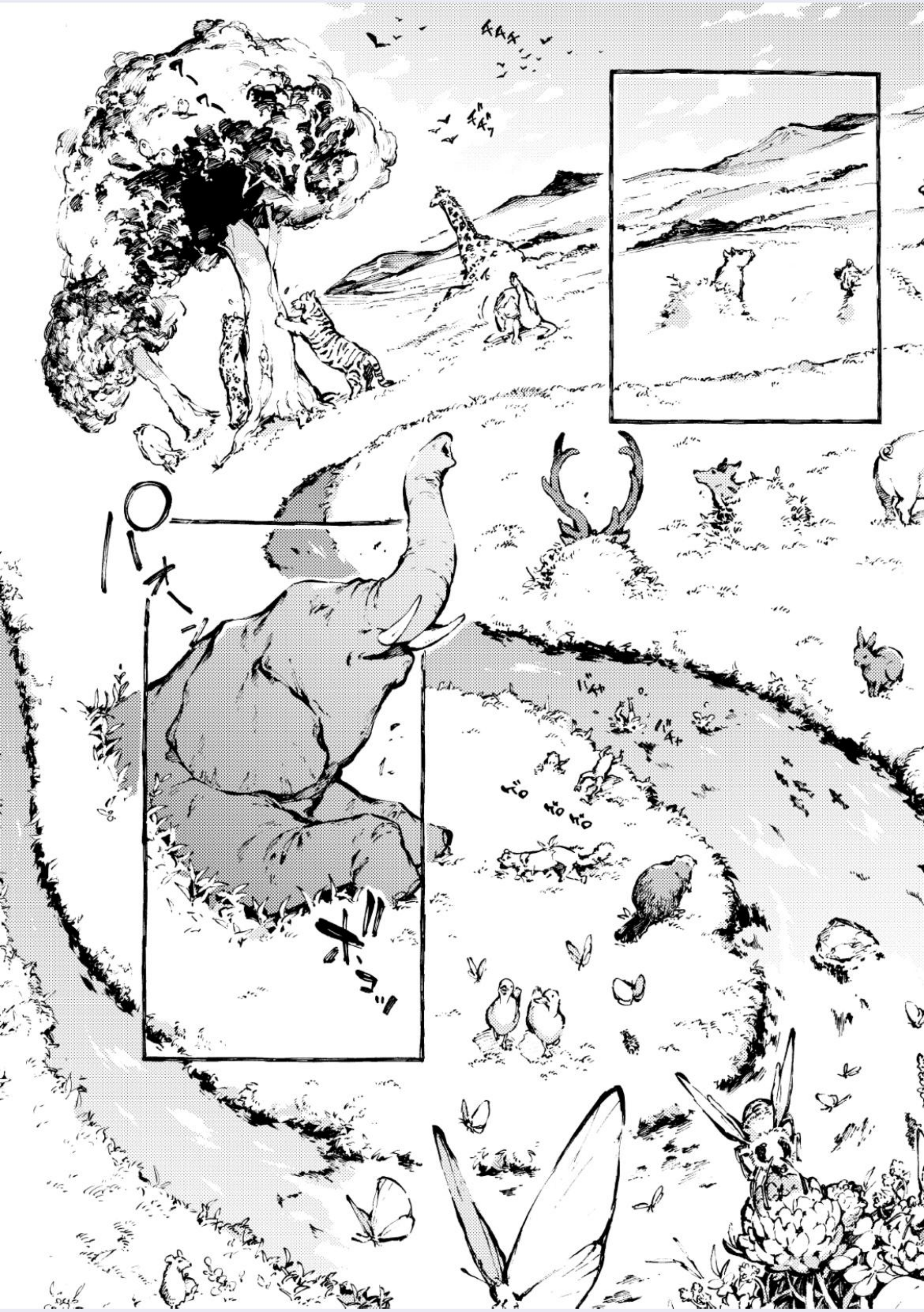
ドゴ

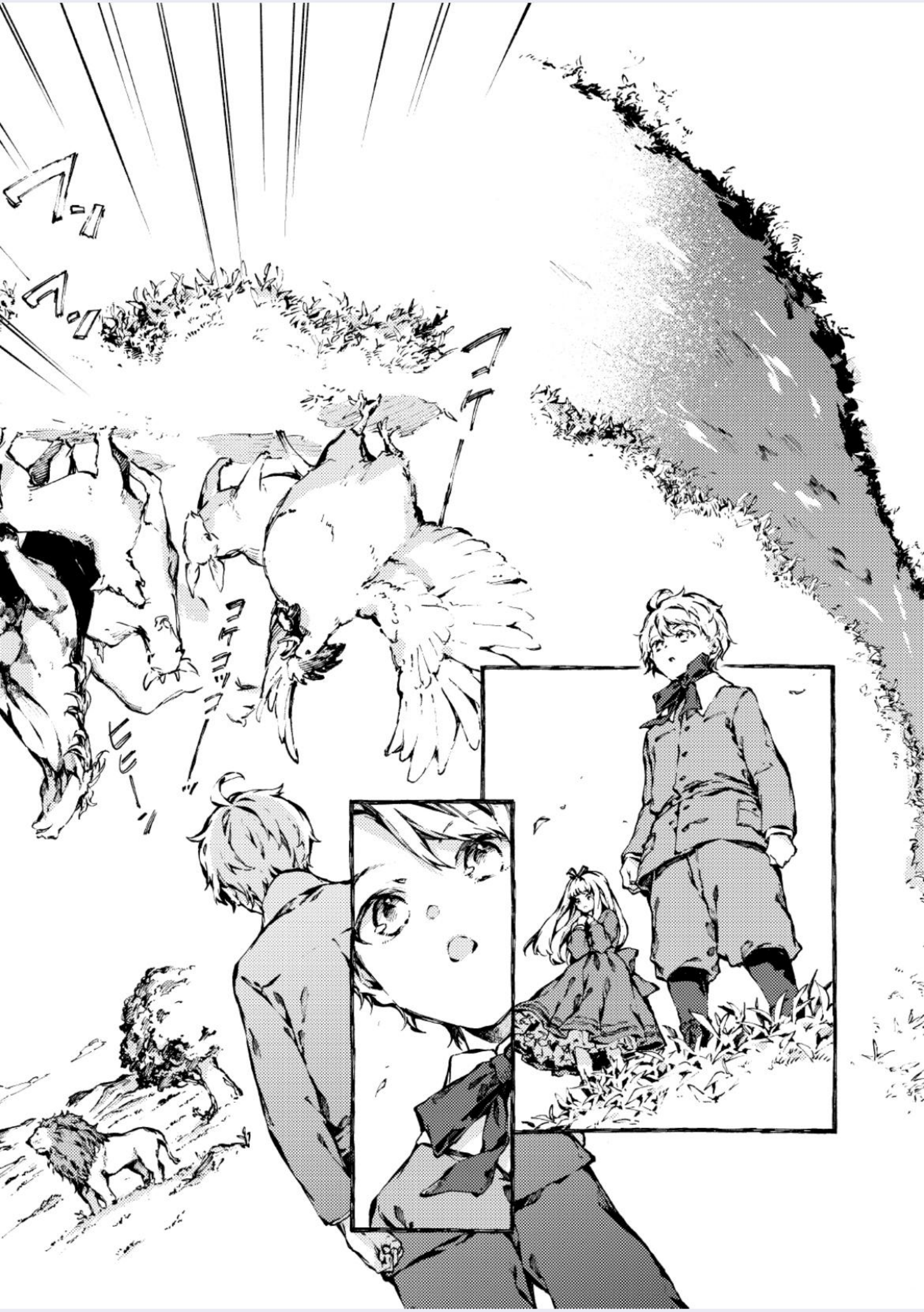



ボッ!!
ボッ
ボッ
ボッ



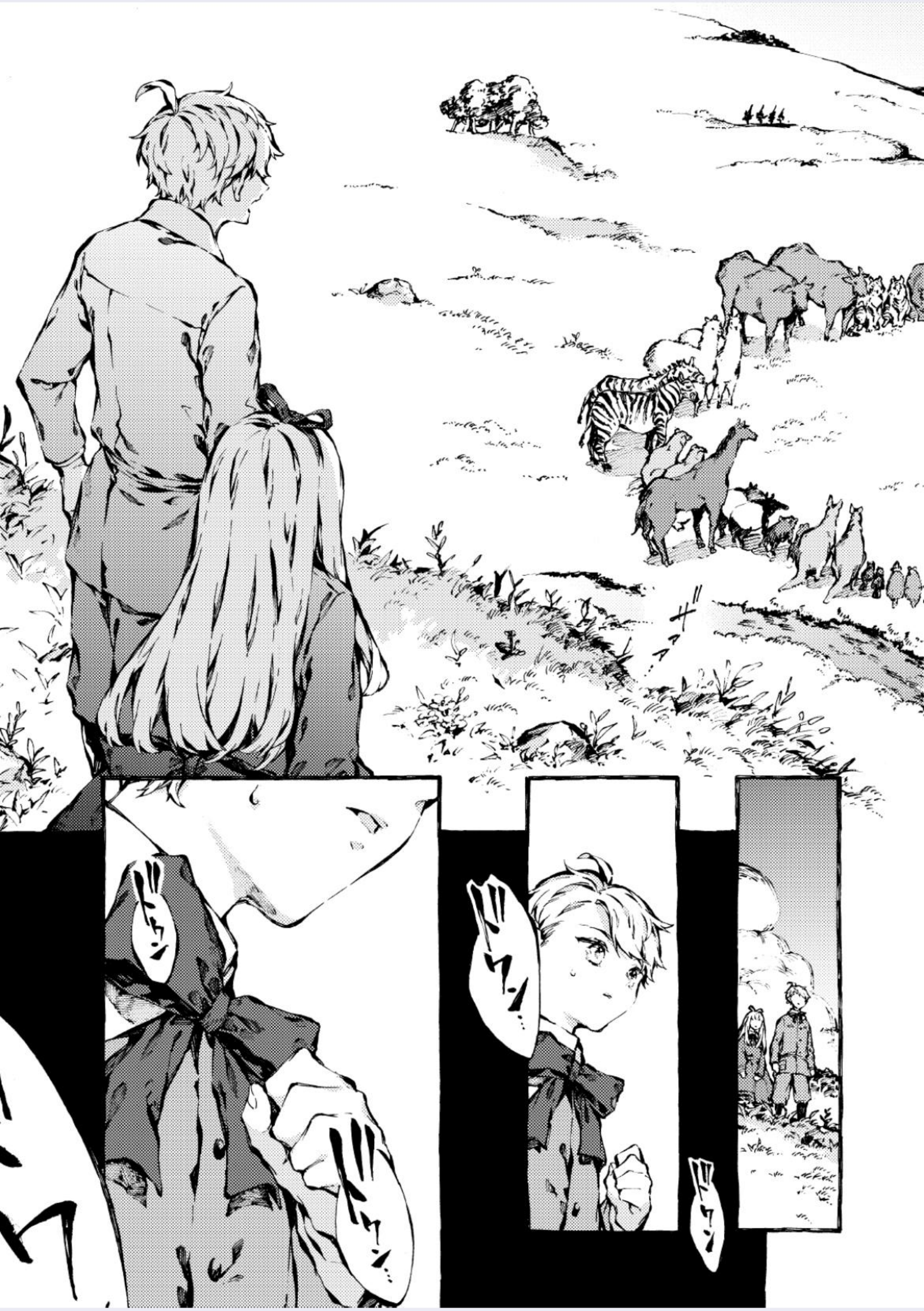




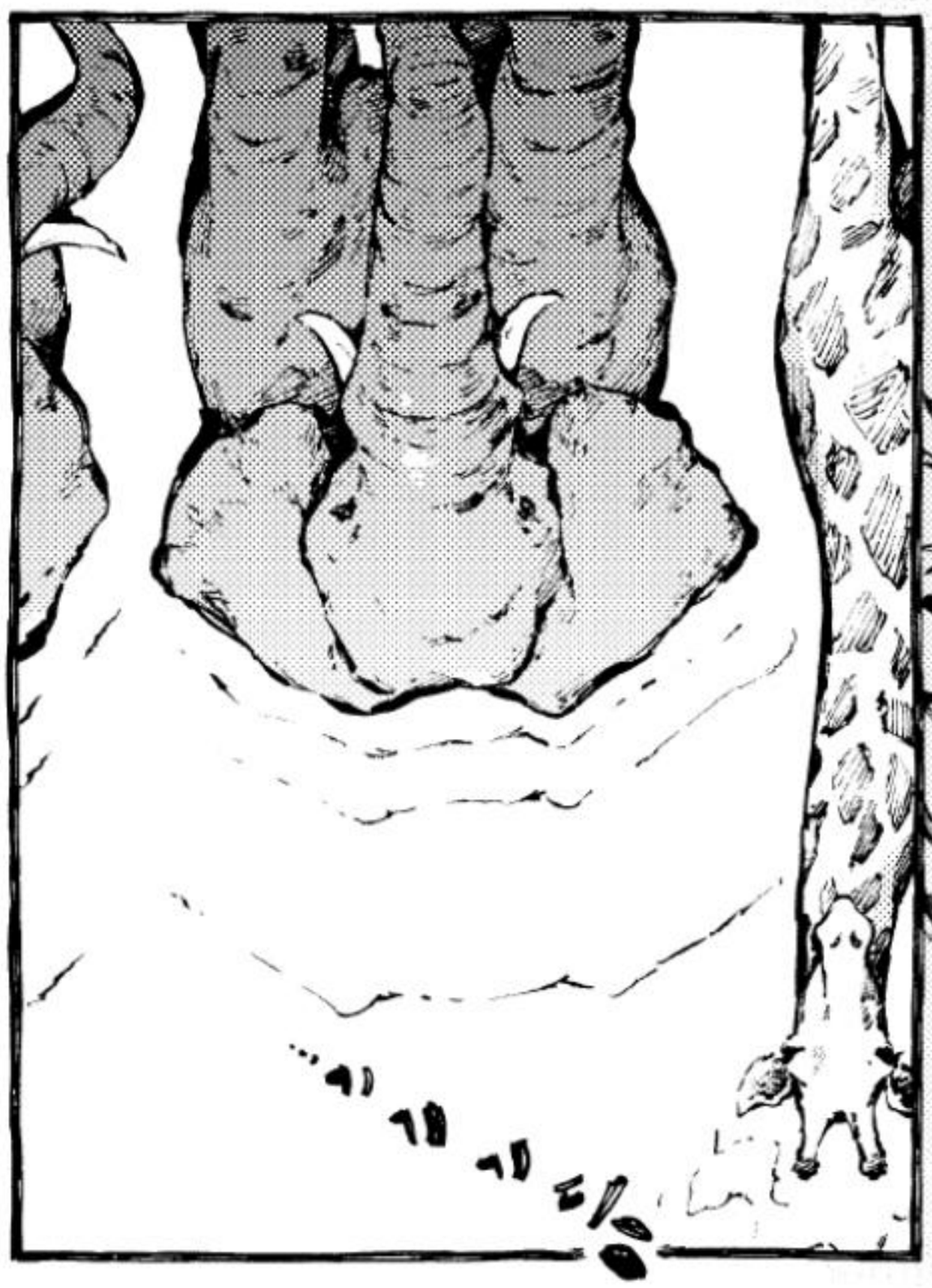

ゴゴゴゴゴ
ゴゴゴゴゴ
ゴゴゴゴゴ


















ああいう人
ああいう人
ああいう人よ

目ざめよ

愛せよ

考えよ

話せ

歩く
木々となれ

もの言う
けものとなれ

聖なる
流れとなれ

つづく

第19話　最初のジョークと、そのほかのこと（前編）

ナルニア

ナルニアよ

ナルニア

囚ざめよ

愛せよ

考えよ

話せ

歩く
木々となれ

もの言う
けものとなれ

聖なる
流れとなれ





アスラン万歳

われらは
聞き

コポ

われらは
従う

われらは
目ざめ

われらは
愛する

われらは
考え

われらは
知る

われらは
話し

あの…

すみません

まだあまり
よくわかんないんだけど

わっ!

あら
ストロベリー
じゃないの!

よかったわ
ストロベリーが
〈もの言うけもの〉に
入れてもらえて

ザッ
ザッ

たまげたなぁ

あたしがいっつも
言ってたとおりだ

この馬は
頭がいいんでさ

選ばれし
ものたちよ

これより
あなたがたは

あなたがた自身の
ものである

わたしは
あなたがたに
このナルニアの地を
永遠に与える

わたしは
あなたがたに
森を与え

果実を与え

川を与える

わたしは
あなたがたに
星を与え

わたし自身を
与える

わたしが選ばなかった
〈もの言わぬけもの〉たちも
あなたがたの
ものである

彼らを
やさしく扱い
慈しみなさい

しかし
彼らのような
在り方に
もどってはいけない

なぜなら

あなたがたは
〈もの言うけもの〉では
なくなってしまう

もどれば

あなたがたは
彼らの中から
選ばれしものであり

彼らの中へ
還りうるもの
だからである

そうしては
ならない

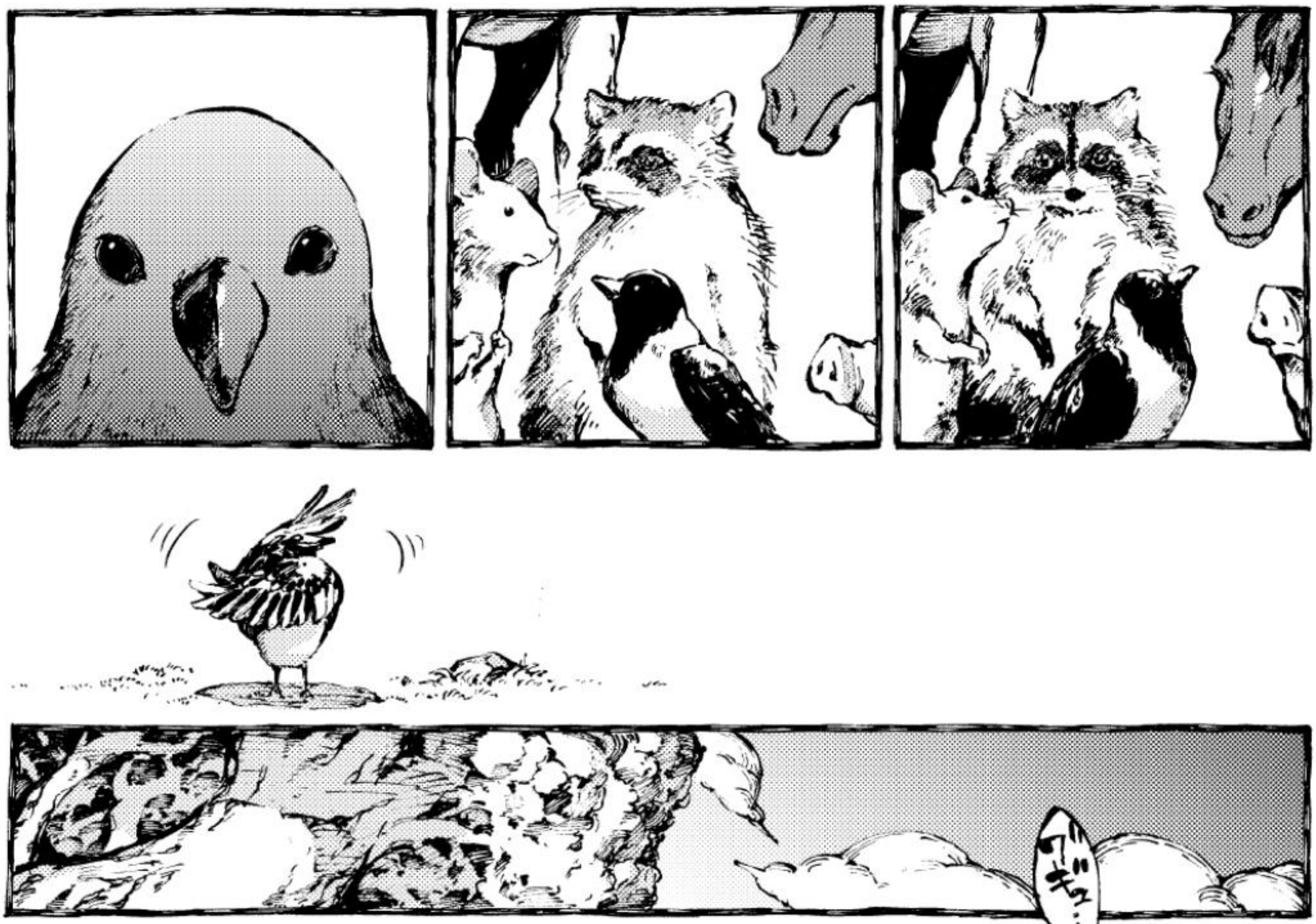
いいえ
アスラン

いたしません

いたしません

もどるなんて

まっぴらです！


ハッ…
生き物たちよ

笑うがよい

もはや
もの言わぬ
愚鈍なけものでは
ないのだから

しじゅう
まじめ
くさっている
必要はない

恐れる
ことはない

ジョークも

言葉によって
もたらされる
ものなのだ

正義も

ドドド

ぼく

最初のジョークを
言ったんですか？

これから先
ずっと

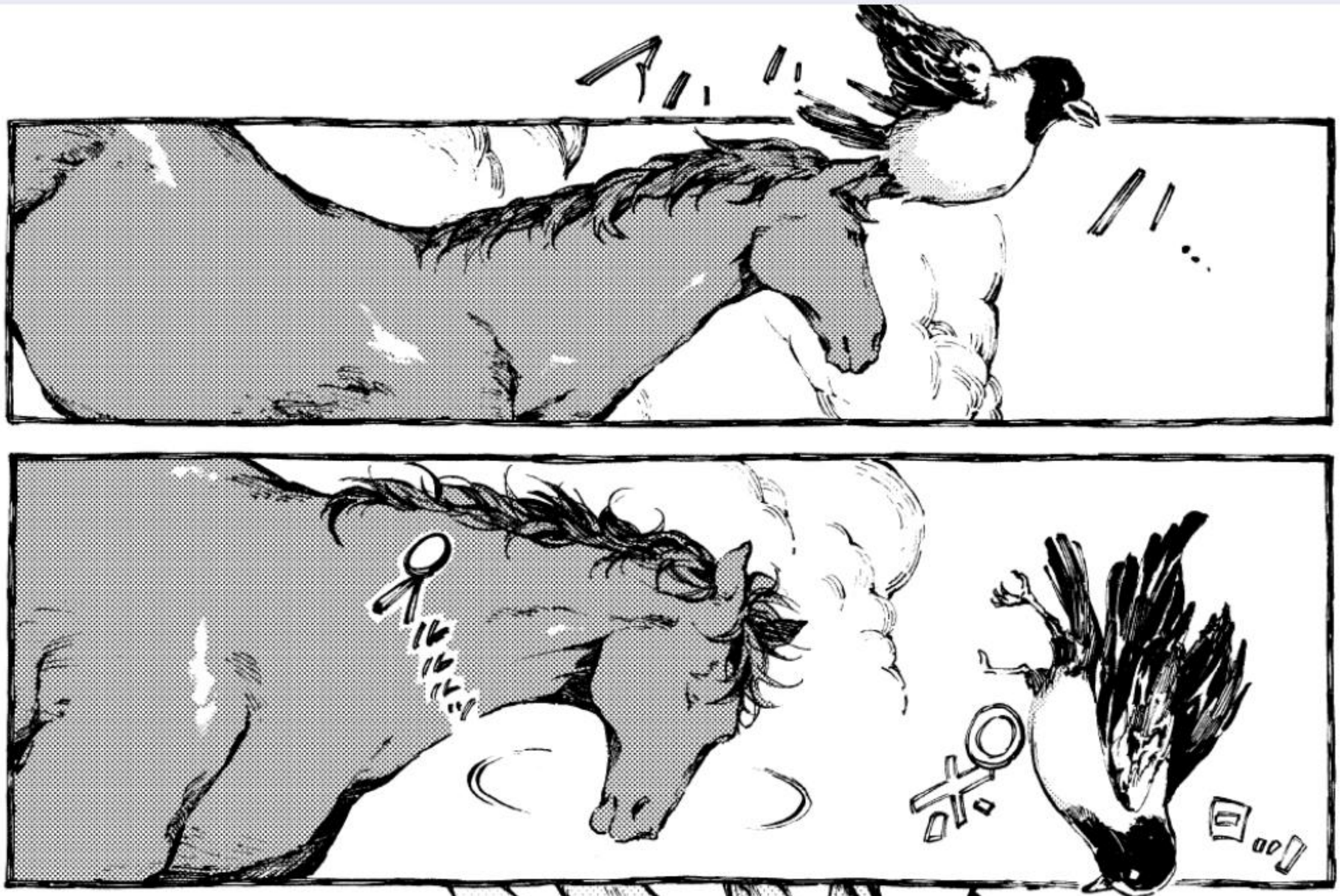
ぼくがどんなふうに
最初のジョークを
言ったかが
語りつがれて
いくんですか？

いや
そうではない

小さき友よ

あなたは
最初のジョークを
言ったのではなく

最初のジョークに
なっただけだ



さて

これでナルニアは
できあがった

あなたがたのうち
何名かを協議会に
招集しようと思う

次は
この地の守りを
考えなくてはならない

川の神

ドワーフの頭

オークの精

オスのフクロウ

ワタリガラスのつがい

そしてオスのゾウよ

わたしと
ともに
来なさい

話しあわなくては
ならぬ

すでに悪が
はいりこんでいる

この世界ができて
まだ五時間にも
ならぬのに

この世界に何がはいりこんだって？

ザワ

ザワ

〈あーく〉？

〈あーく〉って何だ？

いやちがう

〈あーく〉じゃないぞ

アスランは〈あーぐ〉って言ったんだちがうか？

ねえ

ぼく

追っかけなきゃ
ならないんだ

アスランを

——あの
ライオンを

アスランに
話があるんだ

本気？

わたし
だったら
やめとく
けど

話をしなくちゃ
ならないんだ

母さんのこと

母さんの病気を治せる何かが手にはいるとしたらアスランがくれると思うんだ

あたしがいっしょに行ってあげましょう

あたしゃ

あのライオンの風采が気に入ったんでね

ほかの動物たちが襲ってきそうにも見えないし

それにストロベリーとちょいと話もしたいし

ディゴリー！

もどってきなさい！

それ以上
先へ進むことは
許さん！

言うことを聞いて
もどってくるんだ！

はてな？

アスランの
名にかけて

こいつら
いったい
何なんだ？

あのう…

これは大きな
レタスじゃないかと
オレは思うんだ

いいえ
ちがいます
ほんとう
です

わたしたち
レタスじゃ
ありません

わたしたち
食べても
ぜんぜん
おいしくない
ですから

ほれ！

こいつらは
口がきけるんだ

口をきく
レタスなんか
聞いたこと
あるか？

この三人は
〈二番目のジョーク〉
なんじゃないかな？

たぶん

そうだと
しても

最初のジョークに
くらべたら
カスみたいな
もんだな

少なくとも
オレには
おもしろくも
なんともないね

ワクワク

ワクワク

ガヤ
ガヤ
ガヤ
ガヤ
あれは…

ガヤ
ガヤ
ガヤ
なんだろう？

ガヤ
ガヤ

ガヤ
ガヤ

お願いです

ぼく

すごく
急いでるんです

ライオンに
会いたいんです

つづく

第20話　最初のジョークと、そのほかのこと（後編）

お願いです

ぼく

すごく
急いでるんです

ライオンに
会いたいん
です

キョロ

キョロ

なあ

ストロベリーよ

あたしだよ

分かるだろう？

知りませんなんて言わないでおくれよ

おい

馬

このモノは何を言ってんだ？

うーん

よくわからないんだよな

おれたちみんな

まだあまり何も知らないだろう？

けど

こういうモノを
前に見たことが
あるような気は
するんだよな

なんか
前は
ちがうとこに
住んでたような
気もするし…

——ていうか
自分が
なんかちがうもの
だったような
気がする

——アスランが
ちょっと前に
みんなを
目ざめさして
くれたより
前の話なんだけどさ

なんだか

えらく
ごちゃごちゃ
してんだ

夢みたいに

けど
この三つのモノ
みたいなのが
夢に出てきたような
気はするなぁ

なんだって？

あたしを
おぼえて
ないって？

おまえさんの
具合が悪い夜
なんかにゃ
あったかい
マッシュを
持ってって
やったのに？

ちゃんとブラシも
かけてやったのに？

寒い時期に
立たせっぱなしに
しておくときにゃ
忘れずに毛布を
かけてやったのに？

おまえさんが
そんな薄情な
やつだとは
思わなかったよ

ストロベリー

…ああ

そうだ

思い出して
きた

ちょっと
待ってくれ
いま
思い出すから

…そうだ

あんたは
何だか黒くて
恐ろしいものを
おれの後ろに
くくりつけて

そんでもって
おれをたたいて
走らせたんだ

そんで

どこまで
走っても

その黒いやつは
ずーっとガタガタ
いいながら
後ろから
追っかけてきたっけ

生きるために
稼がにゃ
ならんかったんだよ

な？

おまえさんの
暮らしも

あたしの
暮らしも

あれに
かかってたんだ

仕事も
いやだ
鞭も
いやだって
いうんじゃ

厩だって
干し草だって
マッシュだって
手にはいらねえし

オートムギも
口に
はいらねえんだぞ

ほれ
オートムギ

食わして
やった
だろうが

金が
払える
ときは

忘れたとは
言わせねえぞ

ピョ

オートムギ？

ピョ

うん

…ああ

だんだん
思い出して
きたぞ

それは
おぼえてる

あんたはいっつも
どっか後ろのほうに
すわってて

おれはいっつも
前で走ってた

あんたと
黒いやつを
引っぱって

もっぱらおれが
働いてたんだな

ゴホ…

…夏場は
そうだった
かもしれん

おまえさんが
暑い思いをして
働いて

あたしゃ
御者席にすわって
涼しくしてた

おまえさんは
あったかくして
られるけど

あたしゃ御者席に
すわったまんま
足は氷みてえに
冷えるし

鼻は冷たい風で
もげそうになるし

けど
冬は
どうだい？

手はかじかんで
手綱を握るのも
やっと
だったんだぞ？

そのとおりだ

おまえさんの言うとおりだよ！

たしかにきつい暮らしだった

あたしゃいつも言ってたもんだ　石だたみは馬にはかわいそうだってな

草もなくて

硬い石ばっかしで

きつい暮らしだったな

あれがロンドンって街なんだ

しかたないさ

あたしだって
おまえさんと
同じで
あんな街は
きらいだった

おまえさんは
田舎育ちの
馬だし

あたしも
田舎育ちの男だ

昔は合唱隊で
歌を歌った
もんだった

田舎の実家に
おった時分は

けど

田舎じゃ暮らして
いけなかったのさ

…すみません

あの
お願いです

急いで
もらえませんか？

ライオンが
どんどん遠くへ
行っちゃう……

ぼく
どうしても…！

どうしても
ライオンと
話がしたいんです

なあ
ストロベリーよ

この坊や
あのライオンに
話が
あるんだそうだ

おまえさん
たちが
アスランとか
呼んでる
あの
ライオンに

どうだろう

この坊やを
背中に乗せて

ライオンの
ところまで
ひとっ走り
連れていってやって
くれんかね？

坊や
よろこぶと
思うよ

あたしと
こっちの
嬢ちゃんは
あとから
ついていくから

乗せる？

…ああ
思い出した
おれの背中に
すわるって
ことだね？

あんたみたいな
二本足のチビが
ずっと昔
そんなことを
したもんだった

その子は
白くて小さくて
硬くて
四角いかたまりを
くれたっけな

ありゃ
うまかった

——草より
甘くて

うまかった
なぁ

ああ
それは
角砂糖だ

お願いだよ
ストロベリー

お願いだから
ぼくを乗せて
アスランのところまで
行ってくれない？

一度くらいならいいよ

乗りなよ

いい子だストロベリー

さ坊や

おじさんが乗せてやろう

じゃ

たのむよ
ストロベリー

あの例の
白いかたまり

もしかして
持ってないかね？

ううん
ごめん

持って
ないんだ

じゃ
しかたないか

ブルル

ワン
ワン
ワン

ヌッ

おい
見ろよ

あそこのあれ

さっきの
へんちくりんな
生き物の仲間じゃ
ないか？

むこうのほう

川の
すぐそば

木の下……

行こう！

行って
何なのか
見てみよう

一方

時は
さかのぼり

ドキ！

あんなに
たくさんの
危険な野獣が
野放しで
うろついている…

Q…

なぜほかの
動物たちは

あの大きな
ライオンから
逃げようと
しないのだ？









何が起こっておるのだ？

いったいぜんたい

そもそもここに来てからというもの

何ひとつ理解できないことばかりだ!!

なんだ？

……歌？

このひどく不愉快な歌は…

……なんだ

ライオン
じゃないか



——いま
聞こえているのは
歌ではない

さっきから
聞こえていたのも
歌などではない

もちろん
歌なんか
歌えるはず
ないじゃないか

ああ
そうだ

気のせいに
ちがいない

ちょっと
まいって
いるんだな
神経が

ライオンが
歌うなんてことが
あってたまるか

自分が
聞いているのは
ただの吼え声に
すぎないのだ——

ナルニアよ





目ざめよ


アスラン万歳
ガオン

ドドドドド…

ズキズキ

ズキン

馬鹿者
どもが！

これで
指輪は
子どもたちと
いっしょに
野獣に
食われてしまって

わたしは二度と
家にもどれなくなるに
ちがいない

ディゴリーめ
なんと
自分勝手なやつ
なのだ！

ほかの連中も
連中だ

命を
好き
捨てたいのなら
にすればいいが

このわたしは
どうなる？

連中は
そこのところを
考えておらんのだ

誰も
わたしの
考えてくれ…

…な……

……

ドドドドド

ドドドドド

ドドドドド

追っかけろ！

ドドド

ヒィィ

追っかけろ！

先回りしろ！

囲め！

行け 行け！

フレー

フレー！

おたずねしますが

おたくは動物ですか？

野菜ですか？

それとも

鉱物ですか？

ﾊｧ!!

つづく



第21話　ディゴリーとアンドリュー伯父の試練(前編)

おたずねしますが

おたくは動物ですか？

野菜ですか？

それとも

鉱物ですか？

よしよし

わんちゃん

いい子だね

おじさんは

ニヤァ

哀れな
年寄りなんだよ

ニヤァ

？

？

？

？



それみろ！

ただの木だよ

そうだと思ったんだ

ガサッ

これは動物だ

まちがいなく動物だ

おそらくさっきの連中と同じ種類の動物だと思う

納得できないな

動物は

あんなふうに
ひっくりかえって
伸びたり
しないだろう

おれたちは
動物で

おれたちは
ひっくりかえったり
しない

こういう
ふうに
ついう
うにな

動物ってのは
ちゃんと
立つもんだ

ある日



三つめの
ジョーク！

三つめの
ジョーク！

三つめの
ジョーク！

おれは
やっぱり
木だと思うな

木なら
幹にハチの巣が
あるかも
しれないわね

これは
どう見ても
木ではないと
思います

ひっくり
かえる前に

何かしゃべろうと
していたように
思いましたが

それは
木の枝が風に
鳴っただけさ

これが
〈もの言う
けもの〉だと

おっしゃる
つもりじゃ
ないでしょうね？

そうは
言ってもね

まさか
おたく

こいつは
何の言葉も
しゃべりません
でしたよ？

そうは
言っても

これは
何かの動物の
一種かも
しれませんよ

この端っこに
ついている
白っぽい
かたまりは

顔みたいな
ものじゃ
ありません？

この穴が
目と口なのでは
ないかしら？

もちろん
鼻は見当たり
ませんけどね

そこら
あたりは
まあ……

――えへん

大目に見て
あげませんとね

鼻と呼べるほどの
鼻がついている
動物は
ごくごく少数しか
おりませんから

ただいまの発言に
きわめて強く
抗議する

ゾウの
言うとおり
だよ

いい考えが
ある！

たぶん

あれは
しゃべれない
けど

自分では
しゃべれると
思ってる動物だよ

あれを
立たせることは
できないかしら？



やっぱり！

動物じゃないんだよ

生きてないもの

いいや これは まちがいなく 動物だ

自分でにおいを嗅いでみるといい

なぜだ？

においを嗅ぐだけがすべてではありませんよ

自分の鼻を
信用できなけりゃ
何を
信用するんだ？

それは
あなた

脳みそ
でしょう

ただいまの発言に
きわめて強く
抗議する

とにかく

これを
なんとかしないと

だってこれ

〈あーく〉かもしれないでしょう？

そうだったらアスランに見せなくちゃなりませんからね

みなさんのお考えはどちらかしら？

これは動物？

それとも木みたいなもの？

木だ！

木だ！

わかりました

じゃあ木だとすると植えてあげないとね

穴を掘らなくては

ところで

どっちを上にして植えつけるべきなんだ？


これが枝にちがいないわ！


じゃあ
この灰色のふわふわしたものが根っこにちがいない


いや
この二つに分かれているほうの端っこに泥がたくさんついているし
大きく広がるから
これが根っこなんじゃないかな？


それなら——


ガッ
ガッ…



ずいぶん
しおれてるねえ

もちろん
水やりが
必要なのよ

ここにおいでの
みなさんに対する悪気は
さらさらないのですけれど

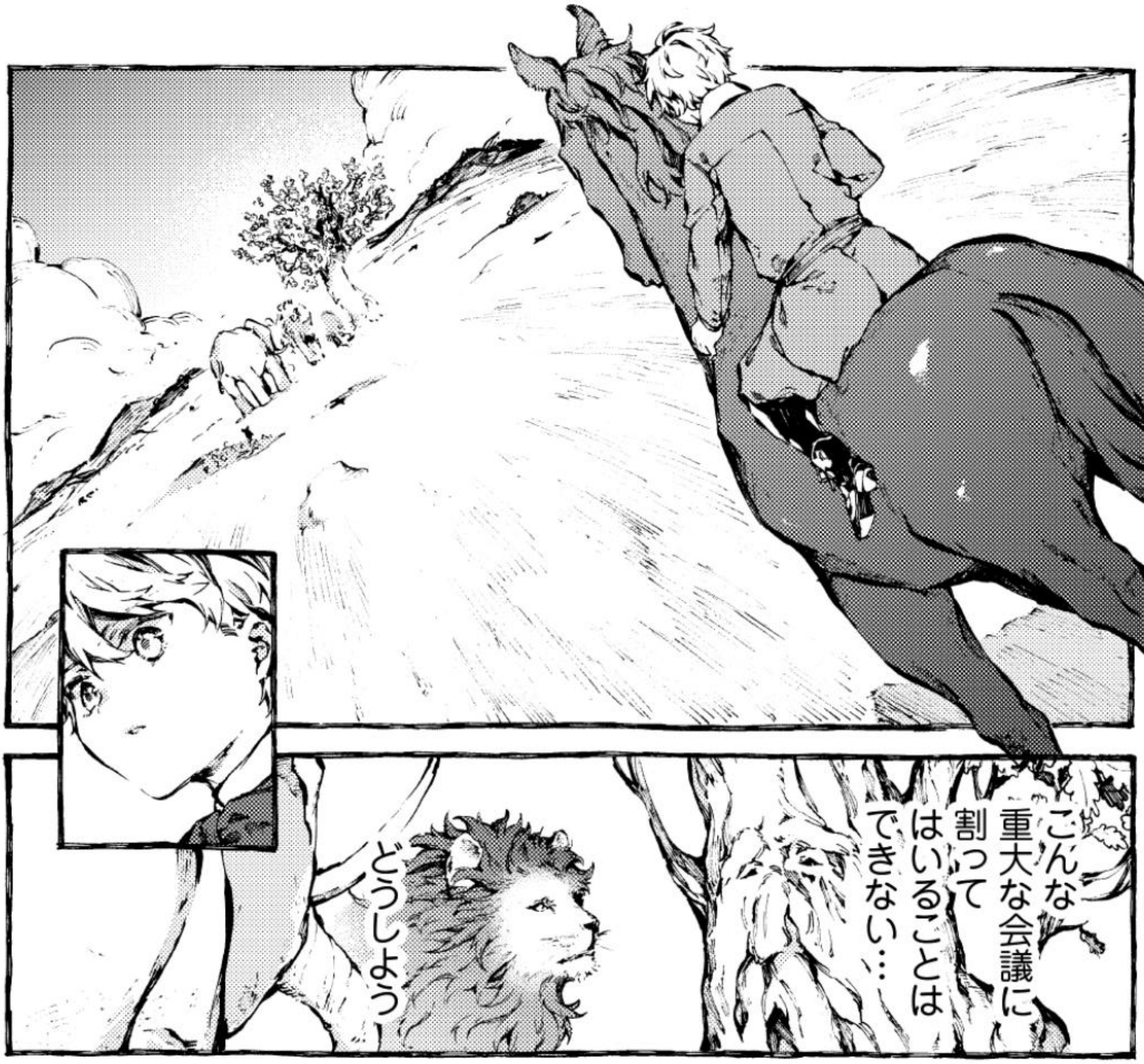
そういう
お仕事には

やはり
わたしのような
鼻が――

ただいまの発言に
きわめて強く
抗議する






こんな
重大な会議に
割って
はいることは
できない…
どうしよう







お願いです

ライオン…

——その

アスランさん

どうか…

…あの

お願いです

この国にある果物で
母さんの病気を
治すことのできる果物を

ぼくに
もらえませんか？

これが
その子だ

この子どもが
やったのだ

……
たいへんだ

ぼく
何をやったん
だろう？

アダムの
息子よ

わたしの
新しい国
ナルニアに

邪悪な
魔女がいる

なぜ魔女が
この国へ来たのか

ここにいる
善き
けものたちに

話して聞かせなさい

……

…ぼくが
連れて
きたのです

アスラン

つづく

第22話　ディゴリーとアンドリュー伯父の試練（後編）

なぜ魔女が
この国へ来たのか

話して
聞かせなさい

…ぼくが
連れて
きたのです

アスラン

ぼく

魔女を
ぼくたちの
世界から
連れ出して

もといた世界へ
もどした
かったんです

そこへ
連れていった
つもりでした

いかなる
目的で？

どのようなわけで
魔女は
あなたの世界に
やってきたのか

アダムの
息子よ？

魔術……

……

……のせいです

…ぼくの伯父のせいなんです

アスラン

伯父は
魔法の指輪を
使って

ポリーとぼくを
ぼくたちの世界から
送り出したんです

とにかく
ぼくは行くしか
ありません
でした

伯父がポリーを
先に送って
しまったから

…で
そのあと

ぼくたちは
チャーンという
場所で
魔女に出会って…

ぼくたちが
もどるときに
魔女がついてきて——

魔女に
出会った
…と？

魔女が目を
さましたんです

…あの

ぼくが
目ざめさ
せたんです

ベルを打ったら
どうなるか
知りたくて

ポリーは
反対しました

だから
ポリーのせいじゃ
ないんです

ぼく――

し

……ぼく

ポリーを
力ずくで
押さえつけました

悪いことを
したって
わかって
います

ぼく

ベルの下に
書いてあった
詩のせいで

ちょっと魔法に
かかっていたんだと
思います

そうかな？

…いいえ

いま
考えると
そうじゃ
なかったと
思います
ぼく
魔法に
かかったふりを
していただけです
…これで
何もかも
だめに
なっちゃった

母さんに
何も持って帰っ
あげられなく
なっちゃった

聞いたか
友よ

わたしが
あなたがたに与えた
新しく
けがれのない世界に

七時間も
たたぬうちに
悪の力が
はいりこんだ

悪の力は

このアダムの息子によって

目ざめさせられ

この世界にもたらされた

しかし落胆することはない

その悪から
わざわいが
生じるであろう

しかし
それはまだ
はるかに先のことだ

そして
わたしは

それまでの
あいだは

最悪の事態が
わたしに
ふりかかるように
しておく

アダムの息子が
わざわいを
もたらしたので
あるから

何百年にも
わたり

アダムの息子に
わざわいをしりぞける
助けとなってもらう

この地が
心楽しき世界の
心楽しき国で
ありつづけるよう

手段を
講じるとしよう

こちらへ
来なさい

そこの
二人

息子よ

わたしは
あなたを昔から
知っている

あなたは
わたしを
知っているか？

少なく
とも

ふつうの
意味では

いえ
存じ
ません

でも

どういう
わけだか

ご無礼を承知で
言わして
もらうんなら

前にお目に
かかったことが
あるような
気もします

よろしい

あなたは
自分で
思っているよりも
よくものを
わかっている

あなたは
この地を
どう思うか？

そして

これから
わたしについて
もっとよく
知ることになろう

すごく
いいとこだと
思います

ここにずっと
住みたいと
思うか？

はあ

あの…

お家あ

あたしには
家内が
おりますんで

もし家内が
いっしょ
でしたら

あたしら二人とも
ロンドンに
もどりたいなんて

これっぽちも
思わないだろうと
存じます

あたしら
二人とも

もともとは
田舎の出
なんで



——これは
呼び声にちがいない

その呼び声を
聞いた者は

誰でもその声に
従いたいと思い

どれほど
遠い世界や
遠い時代にいても

その声に
従うことが
できるのだ——





ゴゴ

ゴゴ

わが子らよ

あなたがたを
ナルニア初代の
王と女王とする



あなたがたは
すべての生き物を
統べ

名づけ

公正に
扱い

敵が
あらわれたときには
敵から
守ってやりなさい

敵は
あらわれるで
あろう

ゴクッ

なぜなら
この世界には
邪悪な魔女が
いるからだ

ゲホッ
ゲホッ

コホッ
すみません

たいへん
もったいない
話ですが

そんで家内も
同じように
感謝しておるとは
思うんですけど

あたしは
とてもそういう仕事に
向いてるような人間じゃ
ございません

学校さえ
まともに
行って
ねえような
者で……

なるほど

あなたは
鋤や鍬を使って
地面を耕し
食べ物を得る術を
知っているか？

はい
それなら
少しはできます

そういうふうに
育てられましたもんで

あなたは
これらの生き物を
やさしく公平に扱い

彼らが
あなたの生まれた世界の
〈もの言わぬけもの〉
たちのような
奴隷ではなく

〈もの言う
けもの〉であり
自由な民で
あることを
心にとどめて
おけるか？

わかります

すべての生き物に
公平であるように
つとめますです

そして

あなたは
あなたの子どもたちや
孫たちも

それになろうよう
育てることが
できるか？

それは
自分しだいで
できると思います

ベストを
つくします

そうだな
ネリー？

そして

あなたは
子どもたちの
あいだにも

また
ほかの生き物たちの
あいだにも
えこひいきをせず

他者を服従させたり
酷使したりする行為を
許さぬようにできるか？

あたしは
そういうことは
許せない質なんで

ほんとうに

そんなとこを
見つけたら
ひどくとっちめて
やりますです

そして

もし

かならず
あらわれるであろう敵が
この国を襲ってきて
戦になったときには

あなたは
突撃の
先頭に立ち

退却の最後尾を
守ることが
できるか？

それは――

人間と
いうもんは
じっさいに
試されるときが来な
ほんとのとこは
わからないと思いま

こぶしで
殴りあう以上のけんかを
したことがないもんで

あたしも
もしかしたら
臆病者の顔を
さらすことに
なるかもしれません

自分の役目を
果たすように
がんばります

――できるだけ
…という
意味ですが

よろしい

あなたは
王のなすべきことを
すべて果たすであろう



まもなく
戴冠式をおこなう

あなたと
あなたの子どもたちと
あなたの孫たちは
祝福され

ある者は
ナルニアの王となり

またある者は
南の山々の
かなたに広がる
アーケン国の王と
なるであろう

それから
そちらの娘よ

あなたも
よく来た

あなたは
呪われた
チャーンにおいて

廃墟と化した
宮殿の
〈肖像の間〉で

この少年が
暴力を働いたことを
許したか？

はい
アスラン

もう
仲直り
しました

よろしい

次は
この少年だ

それでは

つづく

第23話　ストロベリーの大冒険（前編）

それでは
次は
この少年だ

アダムの
息子よ

わたしの大切な国
ナルニアに対して

よりにもよって
その誕生初日に
あなたは
害をなした

それをつぐなう
覚悟はあるか？

…あのう

ぼくに
何ができるか
わからないん
ですけど

だって

女王は
逃げちゃったし

それに——

覚悟はあるか

と聞いたのだ

はい

ぼくの母さんを
助けると約束して
くれるなら

お役に立つ
つもりが
あります――

し

……いや

このライオンは
取り引きのきく
相手ではない

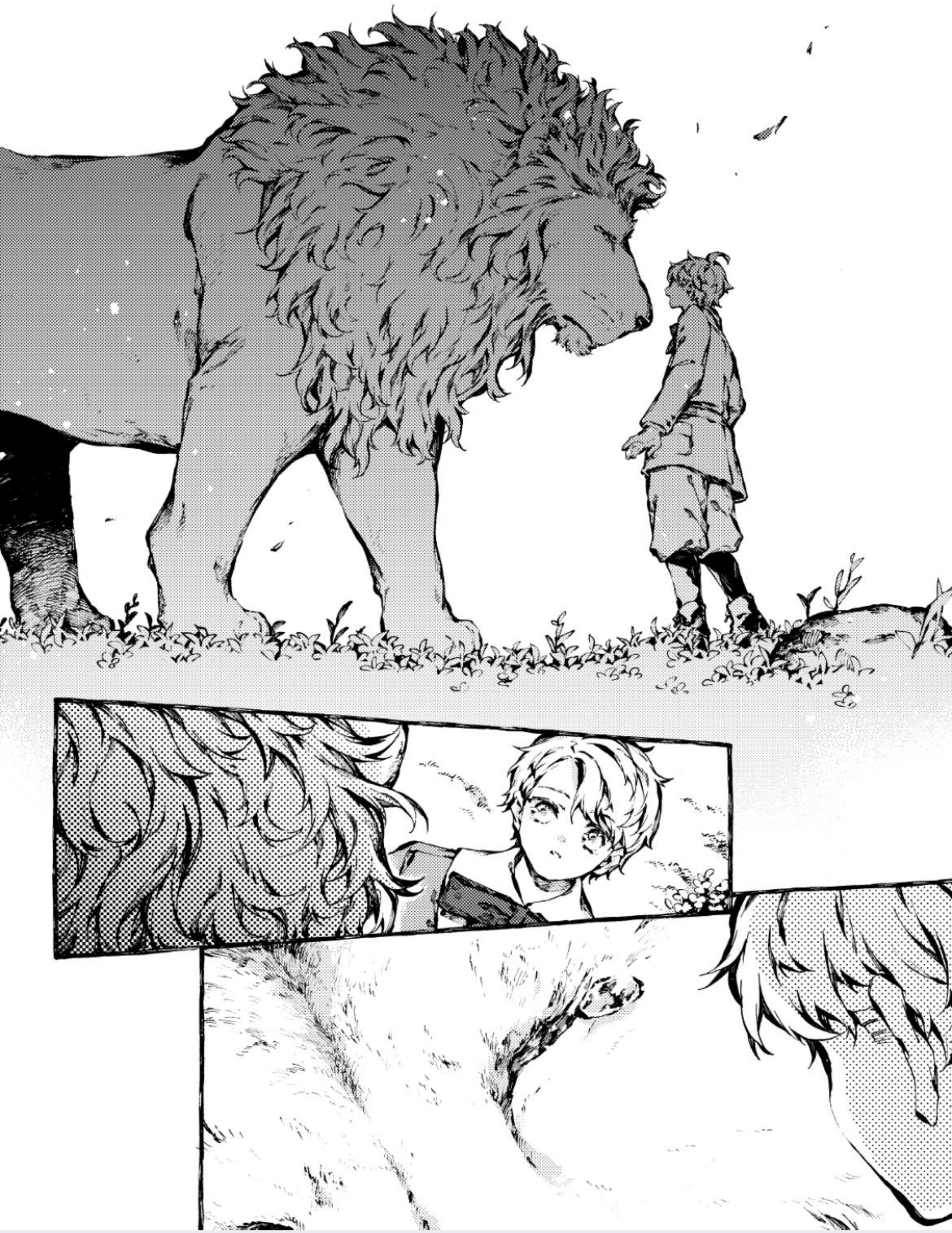
…でも

お願いです

お願いですから

どうか

母さんの病気を
治すものを
いただけませんか？



息子よ

わが息子よ

わかっている

悲しみは大きい

この国でそれを知るのは

いまはまだあなたとわたしだけだ

わたしたちはたがいに助けあおう

しかし

わたしはナルニアの暮らしを何百年何千年の先まで考えねばならない

あなたが
この世界へ
連れこんだ魔女は

ふたたびナルニアへ
もどってくるだろう

だが

それはまだ
先のことだ

わたしは
このナルニアに
魔女を近づけぬ
力を持つ木を
植えたいと思う

その木は
長き歳月にわたって
ナルニアを魔女から
守ることになろう

そして
この国は

いつか太陽が雲に
おおわれる日まで
長いあいだ

輝かしい朝を
迎えることとなろう

あなたは

その木が育つ種を
手に入れてこなくては
ならない

わかりました

ｲｲﾝ…!

これから
せねば
ならぬことを
教えよう

親愛なる
息子よ

西の方角を
ふりむいて

何が見える
か
言ってみなさい

ものすごく
大きな山々が
見えます

アスラン

この川の上流が
滝になって
崖を流れ落ちて
くるのが見えます

そのむこうには
もっと高い山脈があって
ほとんど黒く見えます

そして
崖のむこうには
高い丘が連なっていて
緑の森がしげっています

それから

もっとずっと
遠くには
大きな雪山が
いっぱい連なって
見えます

——アルプスの
写真みたいに

その先は

空しか
見えません

よい目をしている

よいかな

ナルニアの国土は滝が流れ落ちるところまでだ

崖の頂上から先はもはやナルニアの国ではなく〈西の荒野〉にはいる

あなたは山々を越えていき

氷山に囲まれた緑の渓谷にある青い湖を見つけなくてはならない

湖のいちばん奥にけわしい緑の丘がある

その丘の頂に果樹園がある

その果樹園の
中央に
一本の木がある

わかりました

アスラン

お急ぎでないと
いいのですが

その木から
リンゴを一個もぎ取り
持ち帰ってくるのだ

短い時間で
そこまで行って
帰ってくることは
できないだろうと
思います

アダムの
小さき息子よ

助けを
与えよう

ブルルル

ブルルル

アスランの
お望みとあらば

思し召し
ならば

トン

トン

翼の生えた馬に
なりたいか？

どうして
おれなのか
わかりませんけど

——おれ
そんなに
賢い馬じゃないので

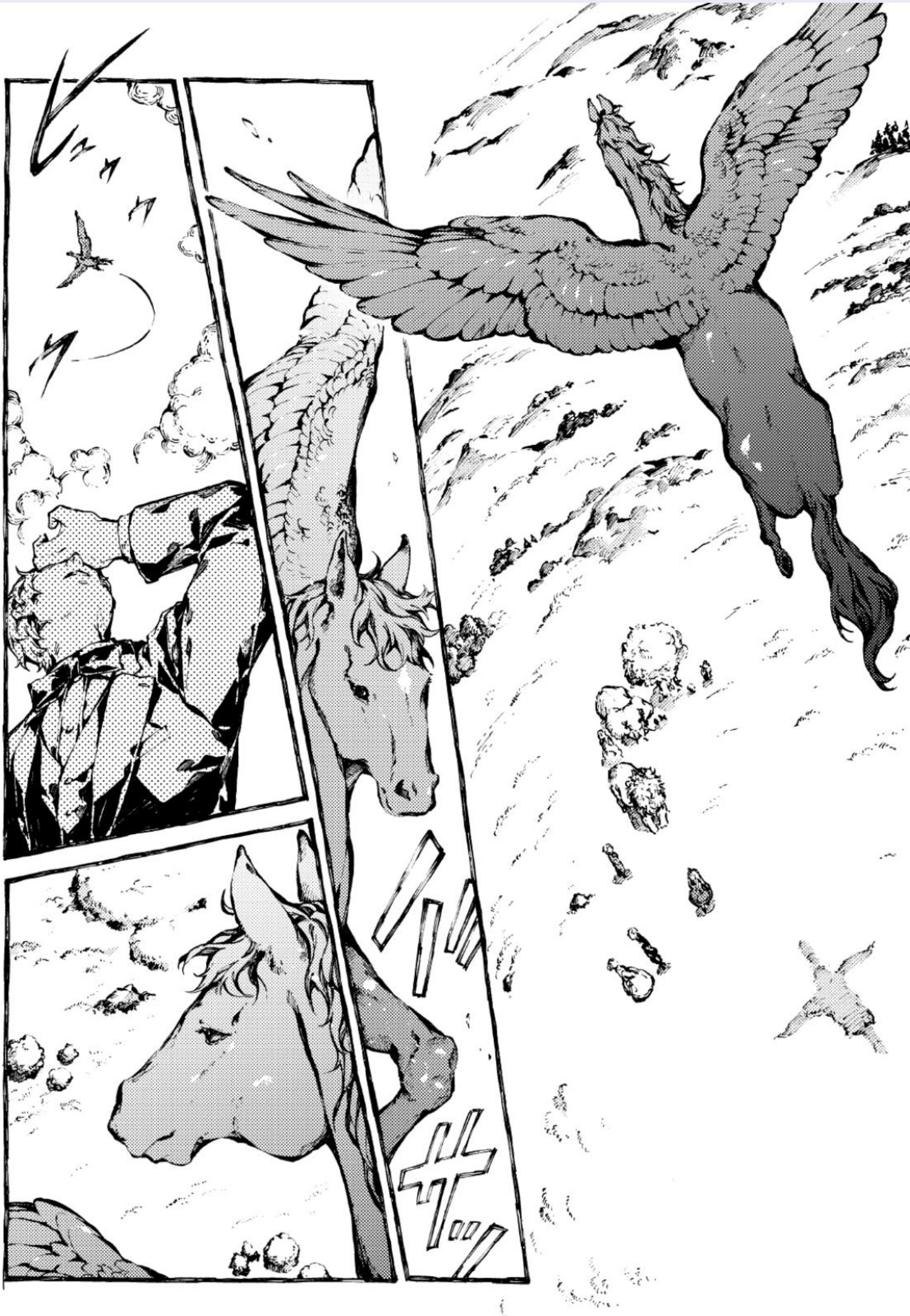
すべての天馬の
父となれ

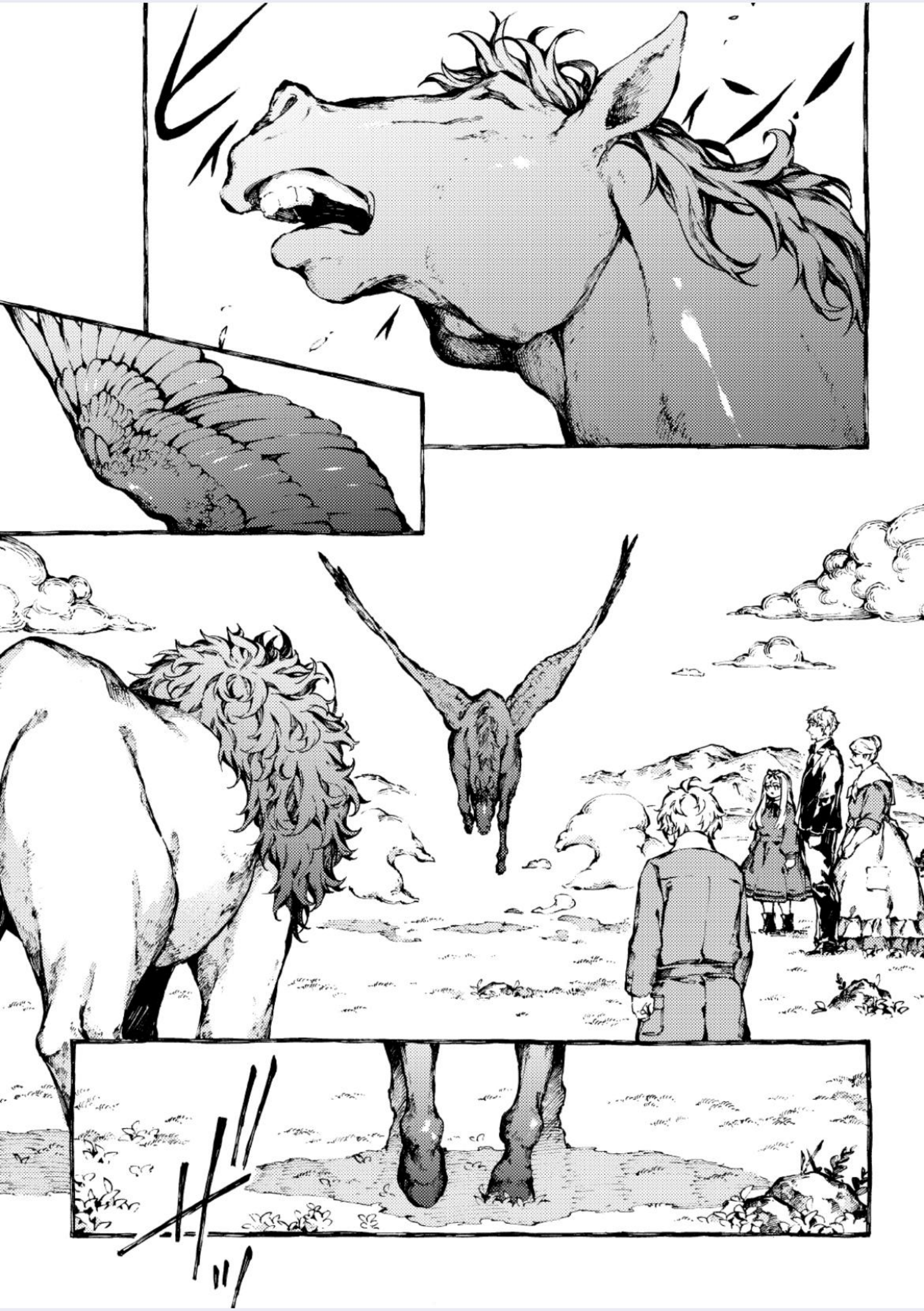
翼を持て



おまえの名を

フレッジとする





どうかな
フレッジ？

とても
いいです
アスラン

この小さき
アダムの息子を
背中に乗せて

わたしが話した
山あいの渓谷まで
連れていって
くれるかな？

え？
いますぐに？

いますぐに？

よしきた！

！

おいで
ぼうず

おれは前に
あんたみたいなのを
背中に乗せたことがある
ずっと昔の
ことだけどな

あのころは
緑の草原が
あったなぁ。
あと
角砂糖も

イヴの
娘たち二人は
何をこそこそ
話して
いるのかな？

できましたら

こちらのお嬢さんも
いっしょに
行きたがって
いるように思います

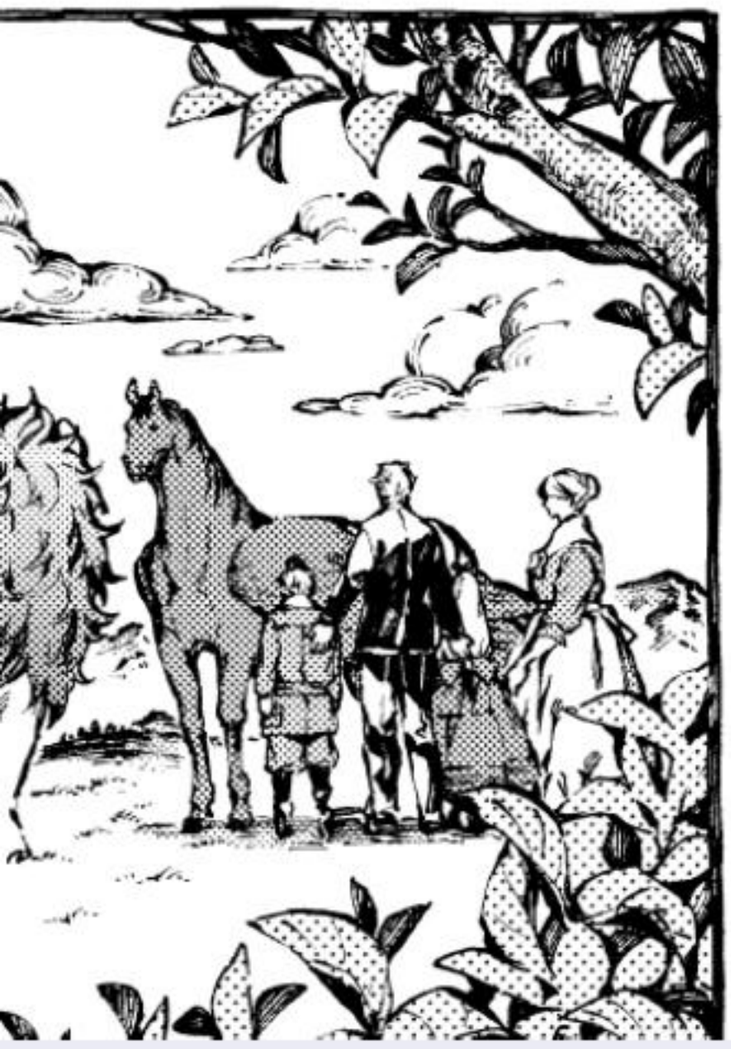
おじゃまで
なければ

フレッジは
何と言うかな？

ああ
二人でも
かまいませんよ

小さい
人たちなら

ゾウも
いっしょに
なんて言われると
困りますがね



わぁお！
のっ
っ

さあ
いいぞ
ストロベリー

！！

……じゃなくて
フレッジ
妙な
感じだな

あまり高く
飛びすぎぬ
ように

氷の大山脈を
越えて行こうと
してはならない

緑の谷間を
探して
そこをたどって
飛んでいくように

かならず
そういう道が
ある

では行け

わが
祝福とともに

たのむよ
フレッジ！

これは
楽しくなるぞ

しっかり
つかまってろよ

ポリー





つづく

第24話　ストロベリーの大冒険（後編）



うん

あれが
アーケン国の
あるところね

ね

前を見て！



ここから
ちょっと
ジグザグに
のぼるから

しっかり
つかまっててよ

ドドド



ヒュオオ

ね

ふりかえって！

後ろを見て！





いろんな場所が
どんなところなのか
知りたいなぁ

まだ
どんなところでも
ないんじゃない？

だって
誰も
住んでないし

何も起こって
ないんだもの

この世界は
きょうできた
ばっかりだから

うん

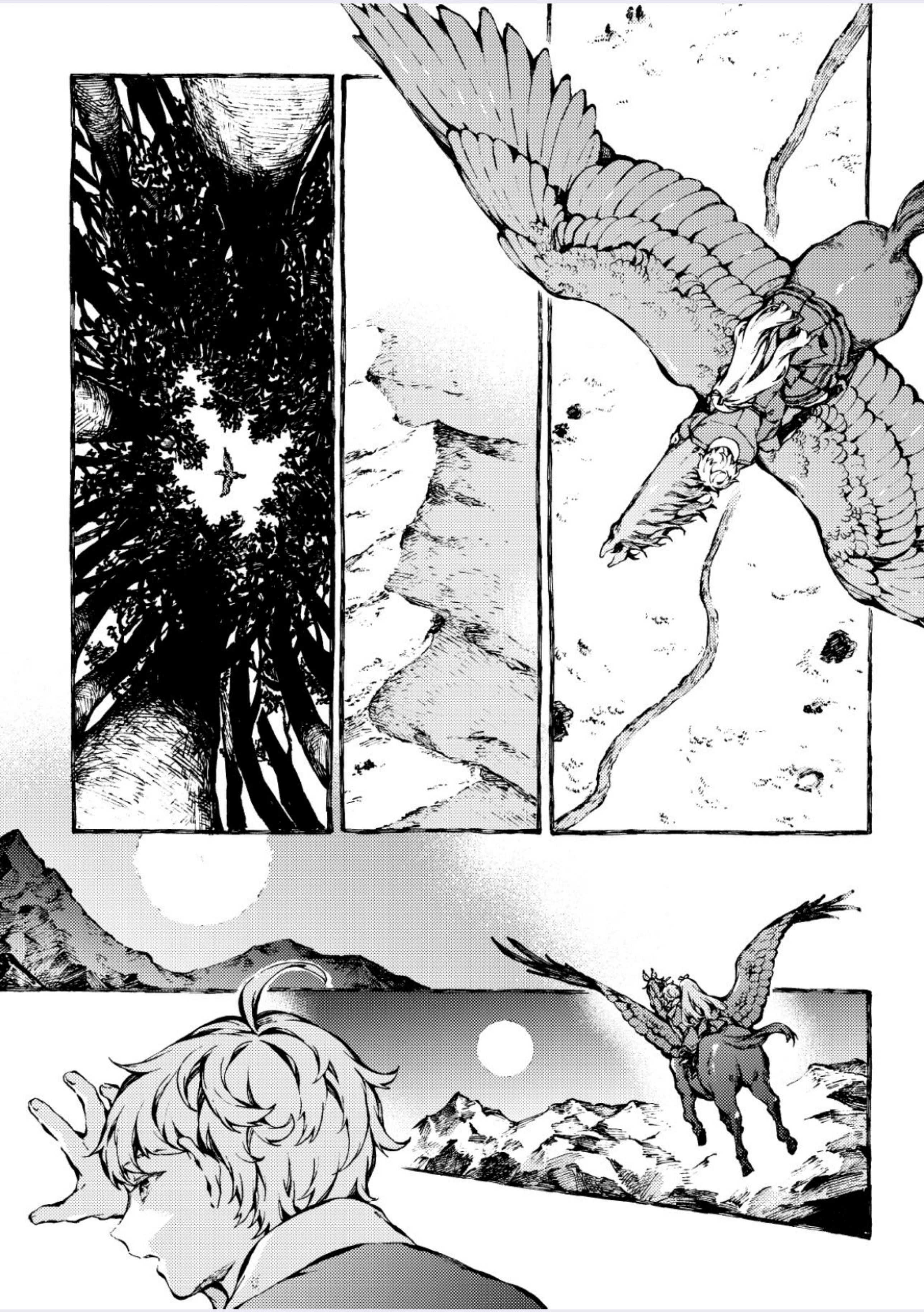
始歴史が始まるんだ

でもいずれは

ああいう場所にも人が行くようになるだろう？

そしたら

まだ歴史が始まってなくて
よかったわ
だって
何の戦いが何年だったとか
めんどくさいこと暗記しなくていいもの



アスランが言ってた
湖のある谷間は
まだ影も形も
見えないし

ここらでいったん
地面に下りて
夜をすごすのに
いい場所を探すってのは
どうだろう？

アッ

こんなに
高いと
けっこう
寒いわね

おれの翼も
痛くなってきた

今夜じゅうには
目的地に
着けそうもないよ

そうだね

ばさっ

ばさっ

ビュオオオ

それに
もう夕ごはんの
時間だし

ぐぅ～…



……

おなかが
すいたな

さあ
たらふく
食べなよ

ムシャ

ムシャ

さあ

二人とも
遠慮せずに

モグ

モグ

三人でたっぷり
食べられるくらい
あるから

けど
ぼくたち
草は
食べられ
ないもん

ほむ

モグ

モグ

ほむ

ああ…

――ほむ

それじゃ

どうしたもんかね

すごくおいしい草なんだけどね

誰か食事の心配をしてくれてもよかったのに

アスランがしてくれただろうと思うよ

たのめばね

たのまれなくても

アスランだったらわかったんじゃないの？

もちろん

ムシャシャ

ムシャシャ

ムシャシャ

わかったと思うけど――

でも

たぶん

アスランは
たのまれるのが
好きなんだと思うよ

ねえ

どうしたら
いいと思う？

どうした
もんかねえ

モグ

草を
食べたくないって
言うんじゃねえ

モグ

思ったより
おいしいかも
しれないよ？

モグ

ばかなこと
言わないでよ

人間は草なんか
食べられないに
決まってるでしょ

馬が
マトン・チョップを
食べられないのと
同じよ

ヒヒーン

たのむから
マトン・チョップとか
言わないでよ

ますます
おなかが
すいてきた

ハーハー…

ゲッ

…

じゃあ
ポリーが
指輪を使って
家にもどって

何か食べ物を
取ってくるのは
どうだろう？

ぼくはまっすぐ
アスランの使いに
行くことを
約束したから
寄り道はできないし

何が起こって
こっちにまた帰って
こられなくなるか
わからないから

でも

ディゴリーだけ
残していくわけには
いかない

！

ねぇ

何もないよりは
ましじゃない？

わたし
上着のポケットに
タフィーの残りが
はいってるの

うん
はるかに
ましだよ

でも
気をつけて

ポケットに
手を
入れるとき
指輪に
さわらない
ようにね

ん――……

ゴソ
ゴソ
ゴソ

トクン×…

十卄

ドド…

一…

一……

ぜんぶで
九個あるわ

そうだ！

一人四個ずつ
食べて

残った一個は
土に埋めたら
どうだろう？

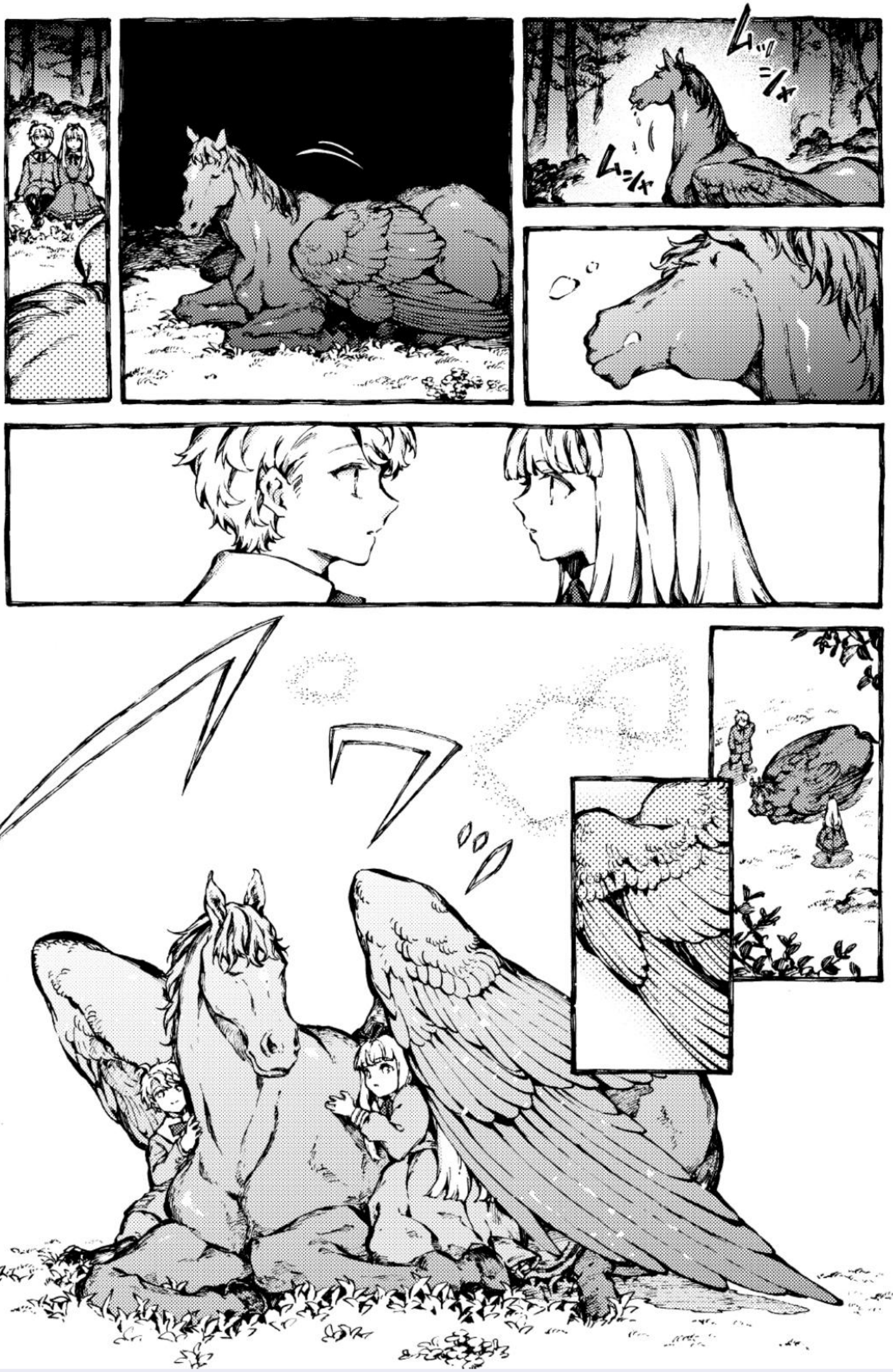
街灯から
ねじり取った鉄棒が
小さい街灯に
なったんだから

コワン

これだって
タフィーの木に
なるかも
しれないよ？



ギュルルル..




うぅぅ…


しっ！

ガサッ

たぶん
木の葉が風に
鳴っただけだよ

どっちに
しても——

どうかな

待て！

ほら
まただ

アスランに
かけて
何かがいるに
ちがいない

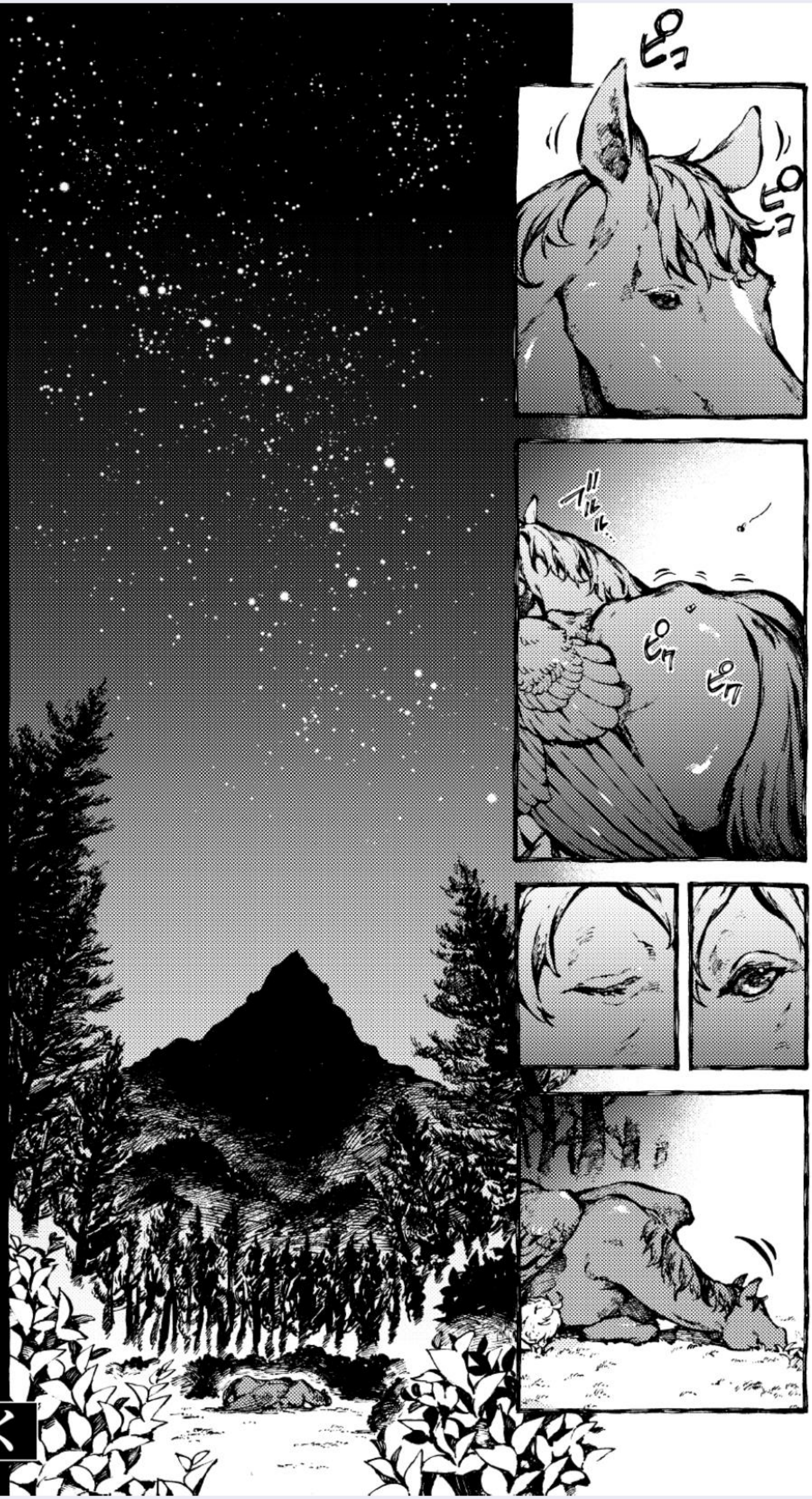


キョロ

背の高い
黒い人影が

ぼくも
見た！

速足で
西の方角へ
歩いて
いったわ！


ピィ
ピィ
ハァハァ…
ピィ
ピィ
つづく



第 25 話　魔女との対決（前編）

起きて
ディゴリー

起きて
フレッジ

ほんとに
タフィーの木が
生えてきたのよ

それに

とってもすてきな朝！



やったあ！

でも
ぼく

先にちょっと
ひと泳ぎ
してくるよ


ひゃっ!!


はぐっ

おとってもおいしいわ！

うん！

柔らかくて汁気もたっぷり！

タフィーとそっくり同じ味というわけじゃないのね

でもタフィーを思い出すような味だなぁ

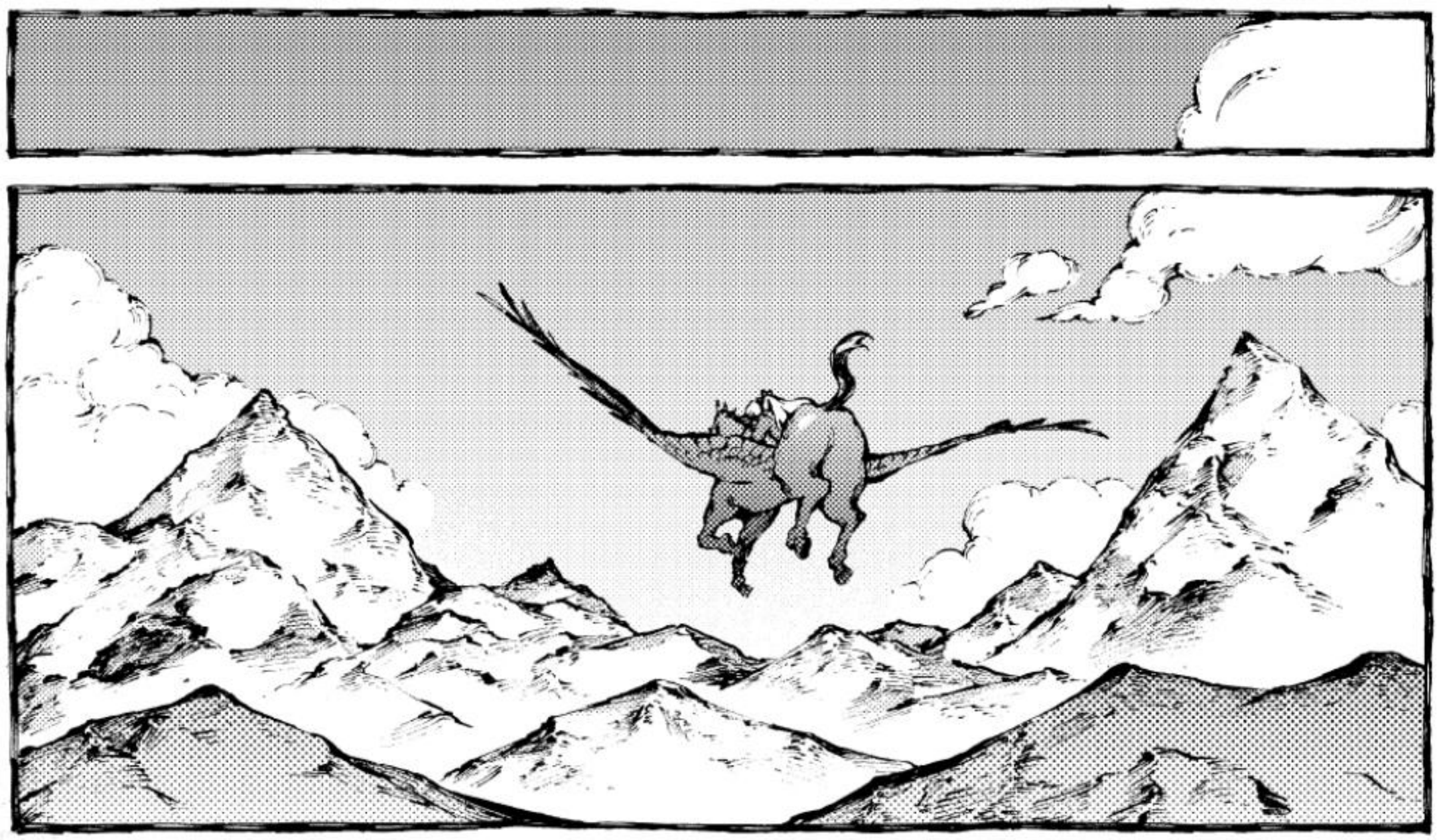
フレッジも食べてみる？

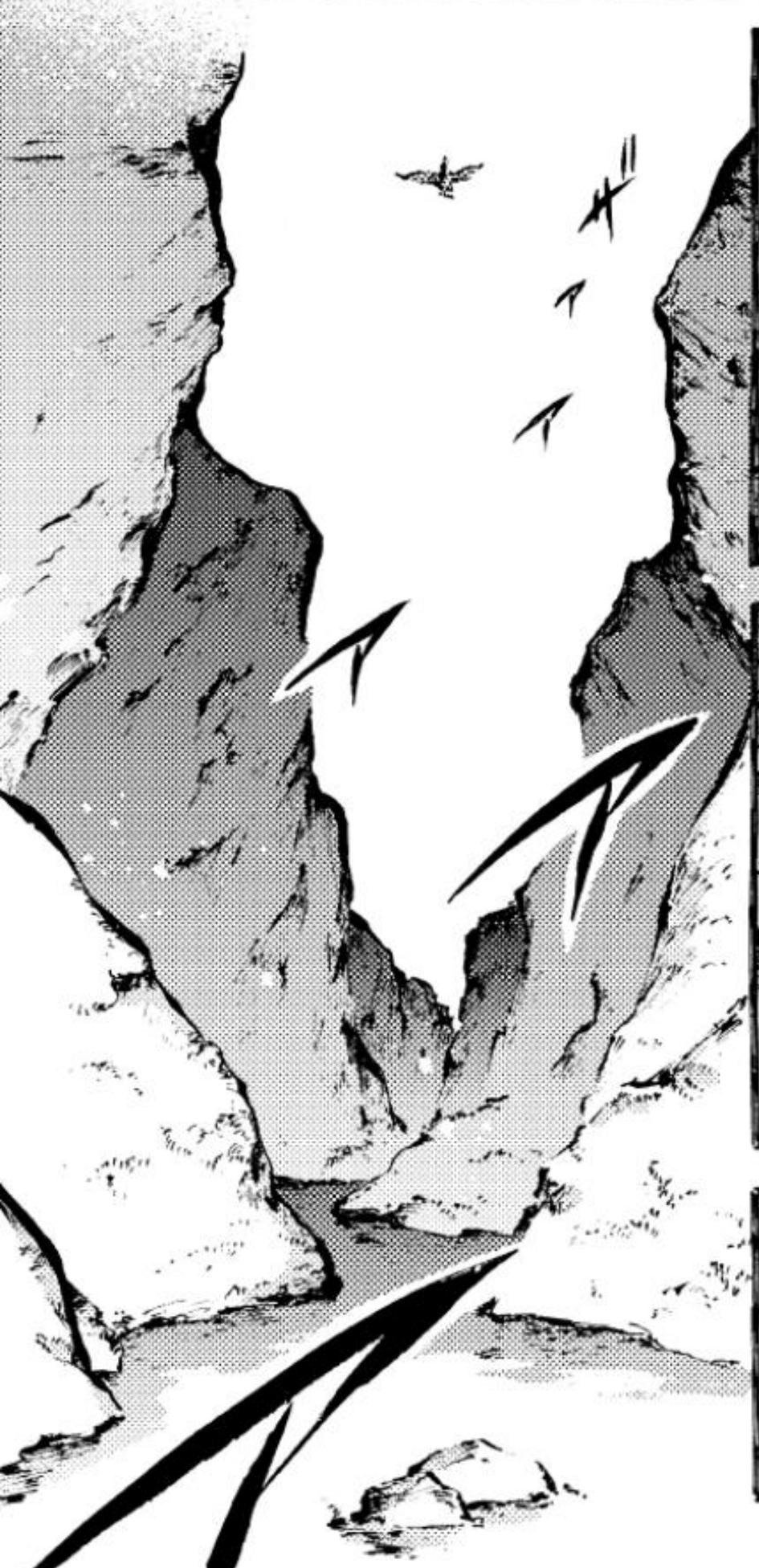
モグ

モグ

うまい！

でも朝のこの時間には草のほうがいいな













こんな時間が
もっと長く
続けばいいのに！

何か
におわない？

ほんとだ

これ
何だろう？

どこから
において
くるのかな？

ワン
ワン

スンスン

あの湖のある
谷間から
においてくる
みたいだ

ぼくも
そう思う

見て！

湖の奥に
緑の丘がある

それに
水が
すごく青いよ

ここに
ちがいない

ヒヒン

カ
カ…



ごめんよ









ゴクリ…



Come in by the gold
Take of my fruit
For those who steal or
Shall find their heart's

gates or not at all,
For others or forbear.
those who climb my wall
desire and find despair.

黄金の門よりはいれ　さなくばはいるべからず
わが果実は他者のために取れ　さなくば取るべからず
わが果実を盗む者　わが堤を乗り越える者は
望むものを手に入れ　また絶望をも見出すであろう

わが果実は
他者のために取れ

……か

それは
いま ぼくが
やろうとしてる
ことだ

つまり
ぼくが自分で
食べちゃいけないって
ことだな

Come in by the gold
Take of my fruit
For those who steal or
Shall find their heart's

けど

gates
For othe
those who climb my wall
desire and find despair.

最後の行は
何言ってんだか
わかんないな

黄金の門より
はいれ…

……か

Come in by the gold
Take
fruit
Fo
steal or
Sh
gates or not at all,
for others

そりゃ そうさ

門から
はいれるん
だったら

誰が堤を
よじのぼりたい
なんて
思うものか！

…だけど

門は
どうやったら
開くんだろう？

!!





そんなことは

しないほうがよかったのだ

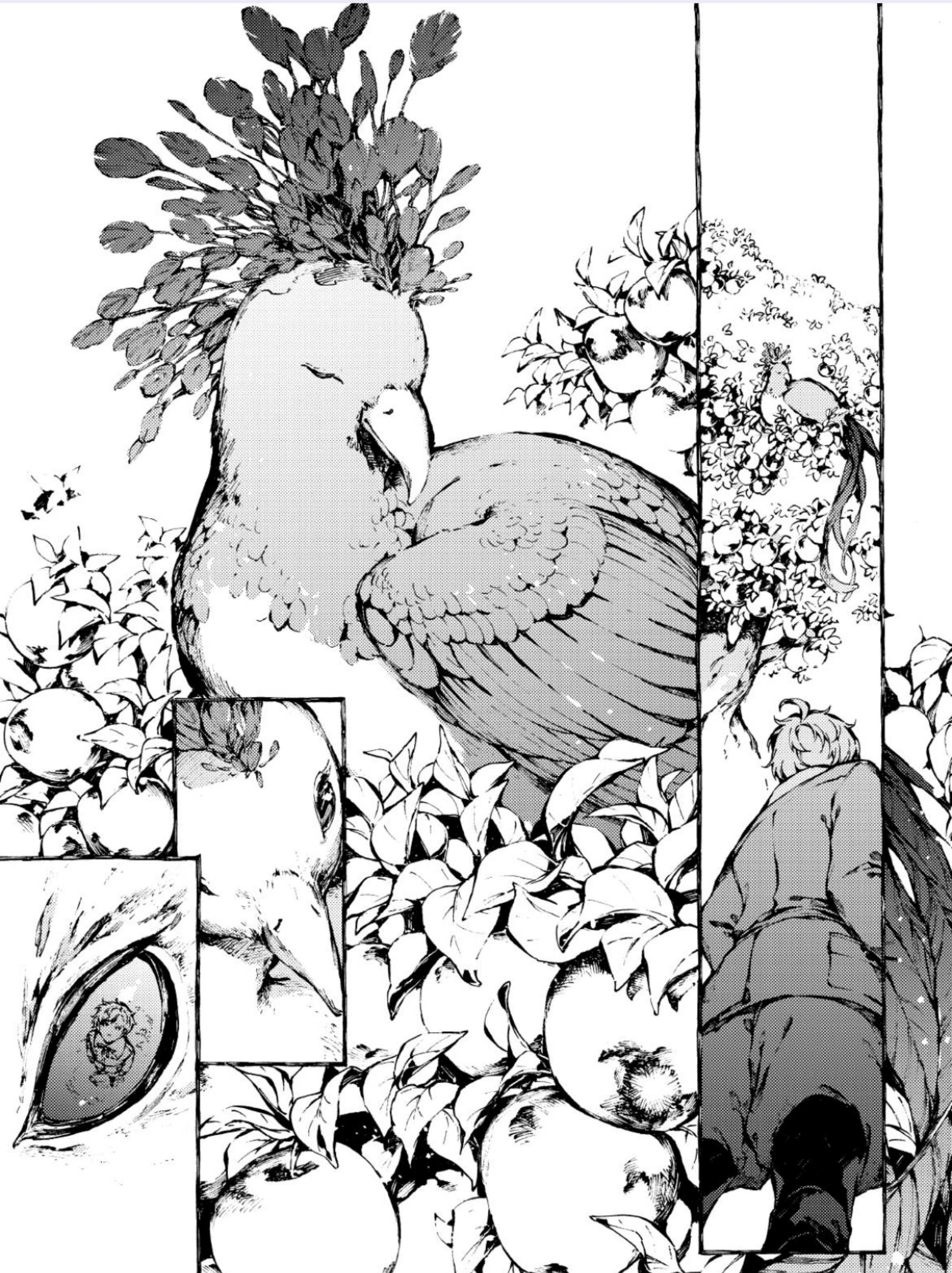
飢え

味わいたい

渇き——

……これをひとつ
食べてみるのは
いけないこと
だろうか？

どっちにしろ
門のところに
書いてあった言葉は
命令というほど
厳しいものでは
なかったかも
しれないじ……
あれは単なる
アドバイス
だったのかも
しれない
……だとしたら
気にする必要も
ないだろう
ゴ
ゴゴゴ…
それに
もしあれが
命令だったとしても
リンゴ一個食べることが
その命令にそむくことに
なるだろうか？
すでに
「他者のために」
実を取るという部分は
ちゃんと
守ったのだから——

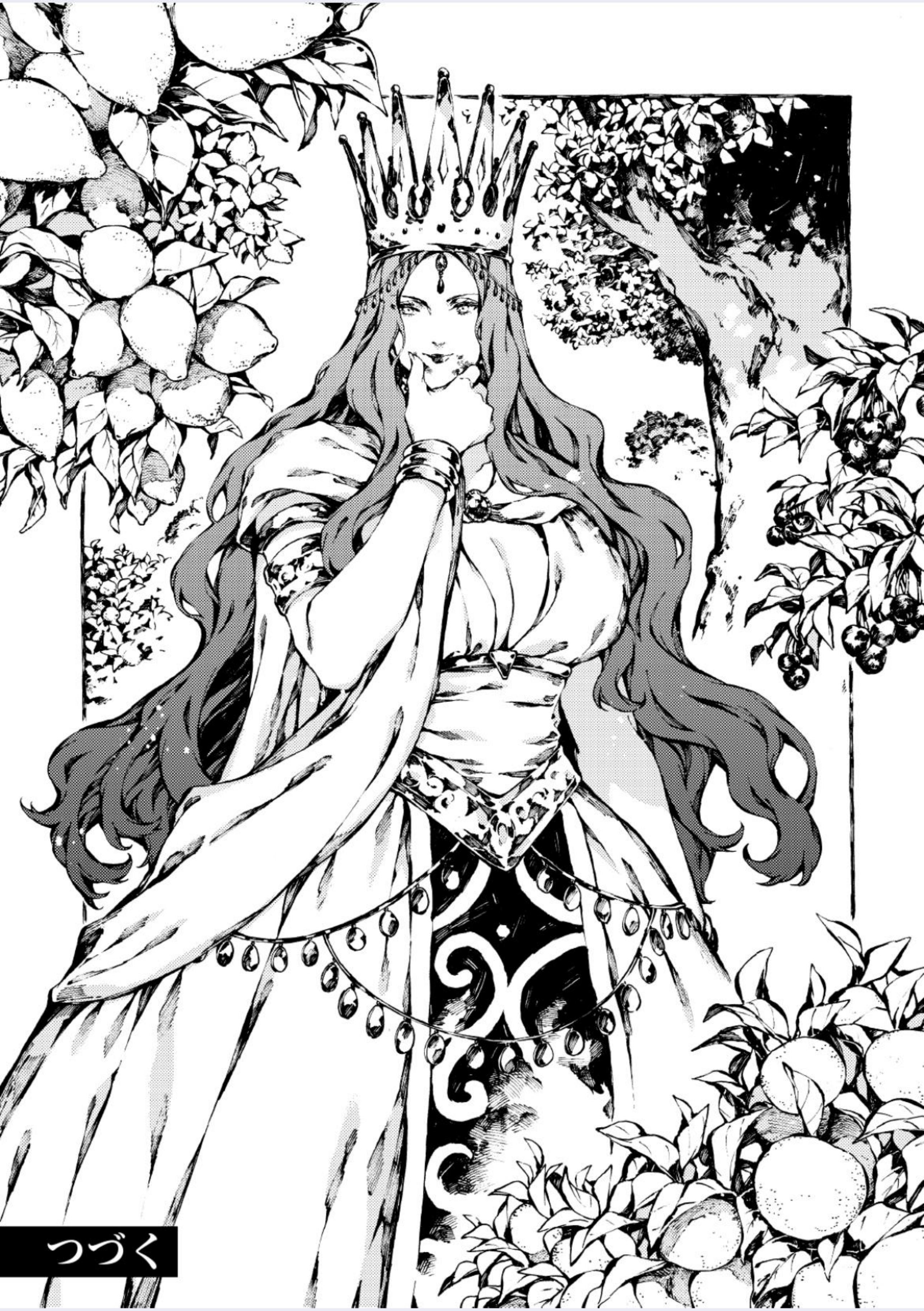


……こういう魔法のかかった場所では

注意して注意しすぎることはない

どこから見張られているかわからないから――




つづく

第 26 話　魔女との対決（後編）

…魔女は
堤を乗り越えて
果樹園に
はいってきたに
ちがいない

望むものを
手に入れ

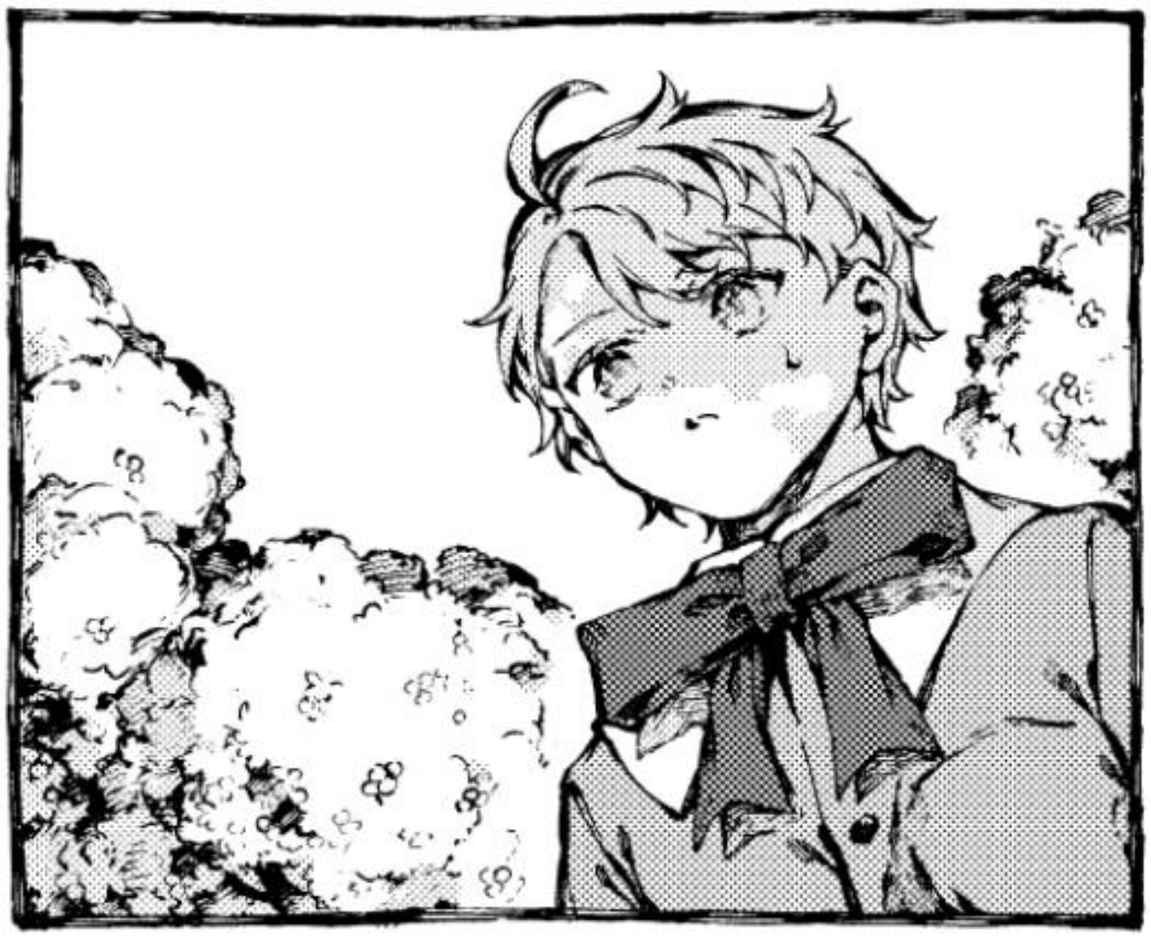
gates or not at all,
For others or forbear.
those who climb my wall
desire and find despair.

Shall find their heart's
fruit
or those who steal or

また絶望をも
見出すであろう



ビュー



ドガ!!

ゴ" ゴ" ゴ"...

ピクッ

ドクン...

急いで！

乗って
ポリー！

飛ぶんだ
フレッジ！


動くな！




近づいたら
ぼくたち
消えるからな
一センチだって
近づくな

愚かな小童(こわっぱ)め

なにゆえ
わらわから
逃げる？

そちに危害を
加えようと
いうわけでは
ないのじゃ

いま立ち止まって
わらわの話に
耳を貸さぬと
一生を幸せに
暮らせる知恵を
聞きのがすことに
なるぞ

そんなもの
聞きたくない
たくさんだ

そちが
何の使いで
まいったのか

わらわは
知っておる

なぜなら
昨夜

森でそのほうどもの
そばにひそんで
話を聞いておったのは

そちは
果樹園で
リンゴの実を
摘んだ

いま
そちのポケットに
はいっておる

その実じゃ

このわらわ
だからじゃ

そして
そちはその実の味を
知ることもなしに

かのライオンのもとへ
持ち帰ろうとしておる

あやつが
食らうため

あやつが
使うために

なんと
愚かなことよ！

あれは若さの実

あれが
どのような
実であるか

そちは
承知して
おるのか？

教えてやろう

生命のリンゴじゃ

わらわには
わかる

すでにして

わらわのこの身が
変わりつつあるのが
感じられる

食してみよ

なぜなら
自分で食して
みたからじゃ

わらわはもはや
老いることもなく

死ぬこともない

そちも
食してみるがよい

そして

わらわとそちは
永遠の命を得て

この天界を統べる
王と女王になるのじゃ

―あるいは

そちの世界に
もどるならば

**その世界の
王と女王になろうぞ**

ことわる


ぼくは
知っている
人たちが
みんな死んで
しまったあとまで
自分ひとりだけ
永遠に
生きたいなんて
思わない


ふつうの
時間だけ
生きて
死んで
天国に
行くほうがいい

ならば

そちの母親は
どうなる？

ずいぶんと
大切に思っている
ようであるが？

母さんに
何の関係が
あるんだ？

わからぬのか

愚か者め

あのリンゴを
一口食すれば

母親の病は
治るのだぞ

しかも

リンゴは
そちのポケットに
はいっておるでは
ないか

ここには
わらわと
そちしかおらぬ

ライオンは
遠いところじゃ

そちの
魔術を用いて
むこうの世界に
もどるがよい

一分後には

そちは
母親の枕辺に
すわって

リンゴを食わせて
やれるだろう

五分もすれば

母親の顔に
血の気が
もどってくるのが
わかるはずじゃ

母親は

痛みが消えたと
言うにちがいない

そして
まもなく

元気が出てきたような
気がすると言うだろう

そして

母親は
眠りにつく

痛みもなく

——考えて
みるがよい

何時間も
心地よい自然の眠りを
得られるのだぞ

薬も使わず

翌日になれば

じきに

母親は
すっかり
元気になる

そちの家にも
ふたたび
幸せが訪れよう

皆が驚くほどの
回復ぶりを
見せるであろう

何もかもが
もとどおりになる

そちも

ほかの小童(こわっぱ)どもと同じようになれるのじゃ

ゴシャ

…あ…あ！

あのライオンが

そちに何をしてくれた？

そちが奴隷にならねばならぬほど何をしてくれたというのじゃ？

そちが自分の世界にもどってしまえば

あのライオンに何ができる？

それにそちの母親が何と思うか？

痛みをいやす
手段があったのに

命を取りもどす
手段があったのに

そちの父親にとっても
心痛をとりのぞく
手段があったというのに

それよりも
むしろ

そちが
それを選ばなんだと
知ったら？

見知らぬ世界で
何の義理もない
野獣の使い走りを
するほうを
選んだと知ったら？

……

アスランは……

——アスランは
野獣なんかじゃない

アスランは…

……アスランは——

野獣で
なければ

もっと
質(たち)の悪い
ものじゃ

いま
すでに

あやつがそちに
何をしたか
考えてみるがよい

あやつが
そちをいかに
冷酷な人間にしたか
考えてみるがよい

あやつに耳を貸す者は
みなそうなるのじゃ

無慈悲で
薄情な
小童(こわっぱ)め！

そちは母親が
死んでも
かまわぬと——

黙れ！

ぼくが
そんなことぐらい
わからないと
思っているのか？

だけど
ぼくは……
——ぼくは
約束したんだ

ほう

だが
約束の中身を
承知せぬまま
約束をかわしたので
あろう？

その気に
さえなれば
ここにはそちを
邪魔だてする者は
おらぬのだぞ

…母さん自身が
よろこばないさ

母さんは
約束を守ることに
とても厳しいから……
――それに
盗んじゃ
いけないってことも
そういうこと
すべてに
厳しい人だから
母さんこそ
もし
いまここに
いたなら
言わずに
おけばよい
そんなことを
しちゃいけないって
最初に言うはずだ
母親に
打ちあける必要は
ないのじゃ
いかにして
リンゴを
手に入れたかなぞ
父親にも
打ちあける
必要はない
そちの
世界の誰にも
いっさい話す必要は
ないのじゃ

その女子(おなご)とても

連れ帰る必要はなかろうが？

いったい
なんだって
おまえは
口をはさむんだ？

なんで
とつぜん

ぼくの
母さんのことを
そんなに
気にかけて
くれるように
なったんだ？

いったい
何をたくらんで
いるんだ？

おまえに
何の関係が
ある？

よく
言ったわ

ディゴリー

急いで

早く！！

行こう

永遠の若さを
手に入れる幸運を
みすみす
捨てたことを！

もう二度と
このような幸運は
ないと思え

このぶんなら
夜になる前に
悠々ナルニアに
もどれるね

そうだね

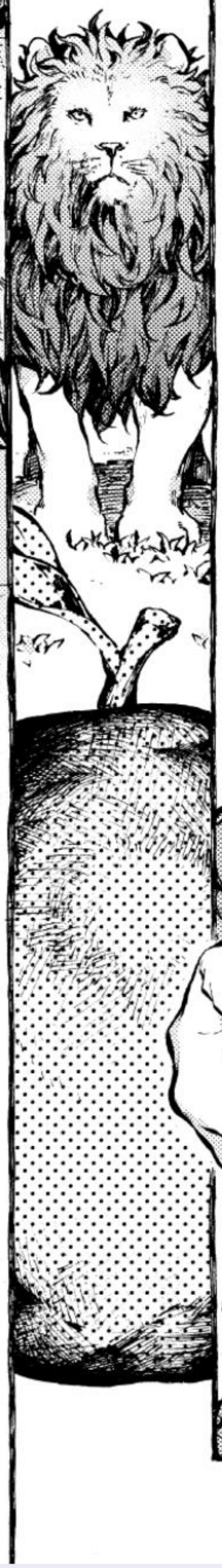
……

自分は
正しいことを
したはずだ











つづく

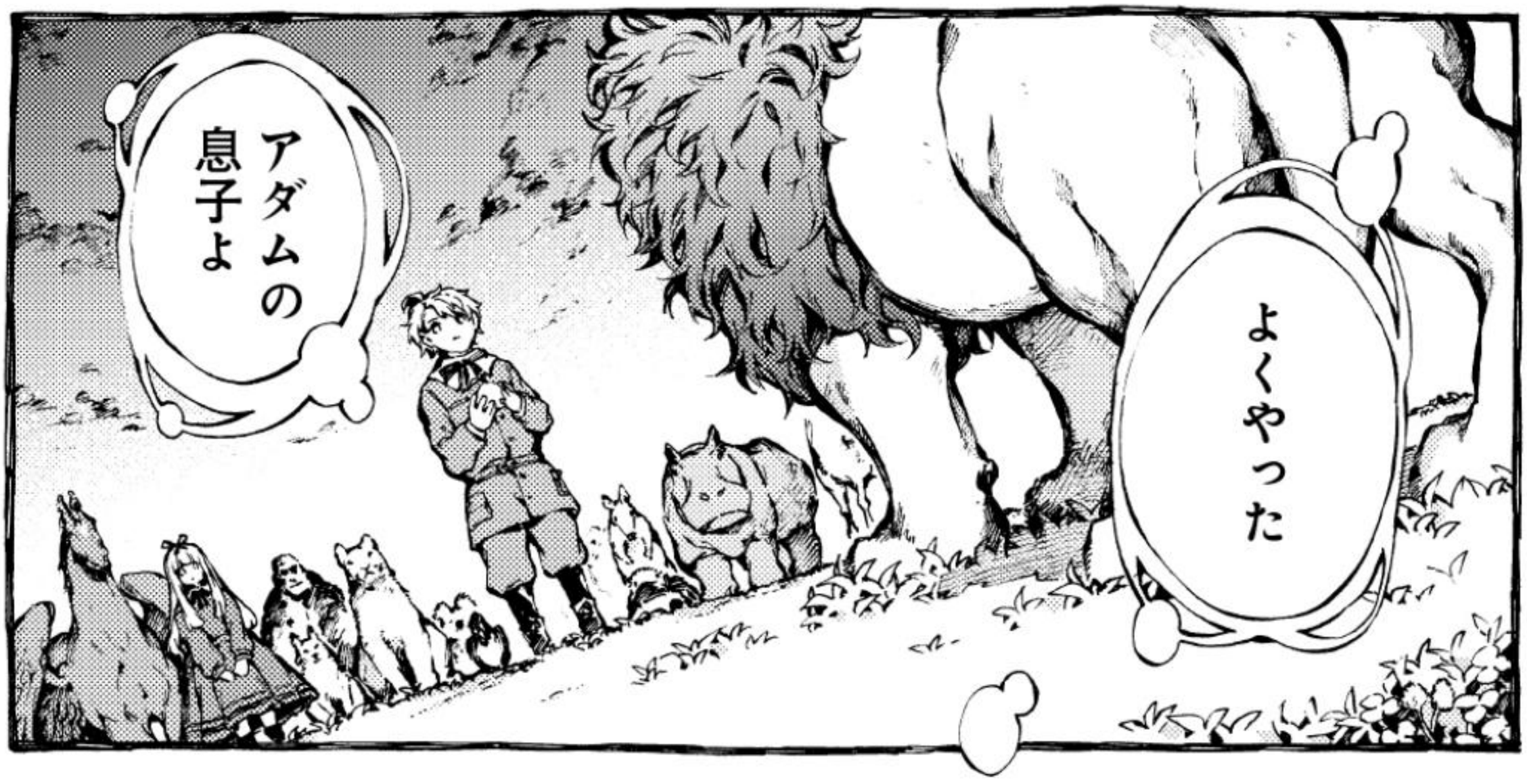
第 27 話　リンゴを植える（前編）

お望みの
リンゴを

持ってまいりました


よくやった




よくやった
アダムの息子よ

この果実のために

あなたは飢えと渇きに耐え

涙を流した

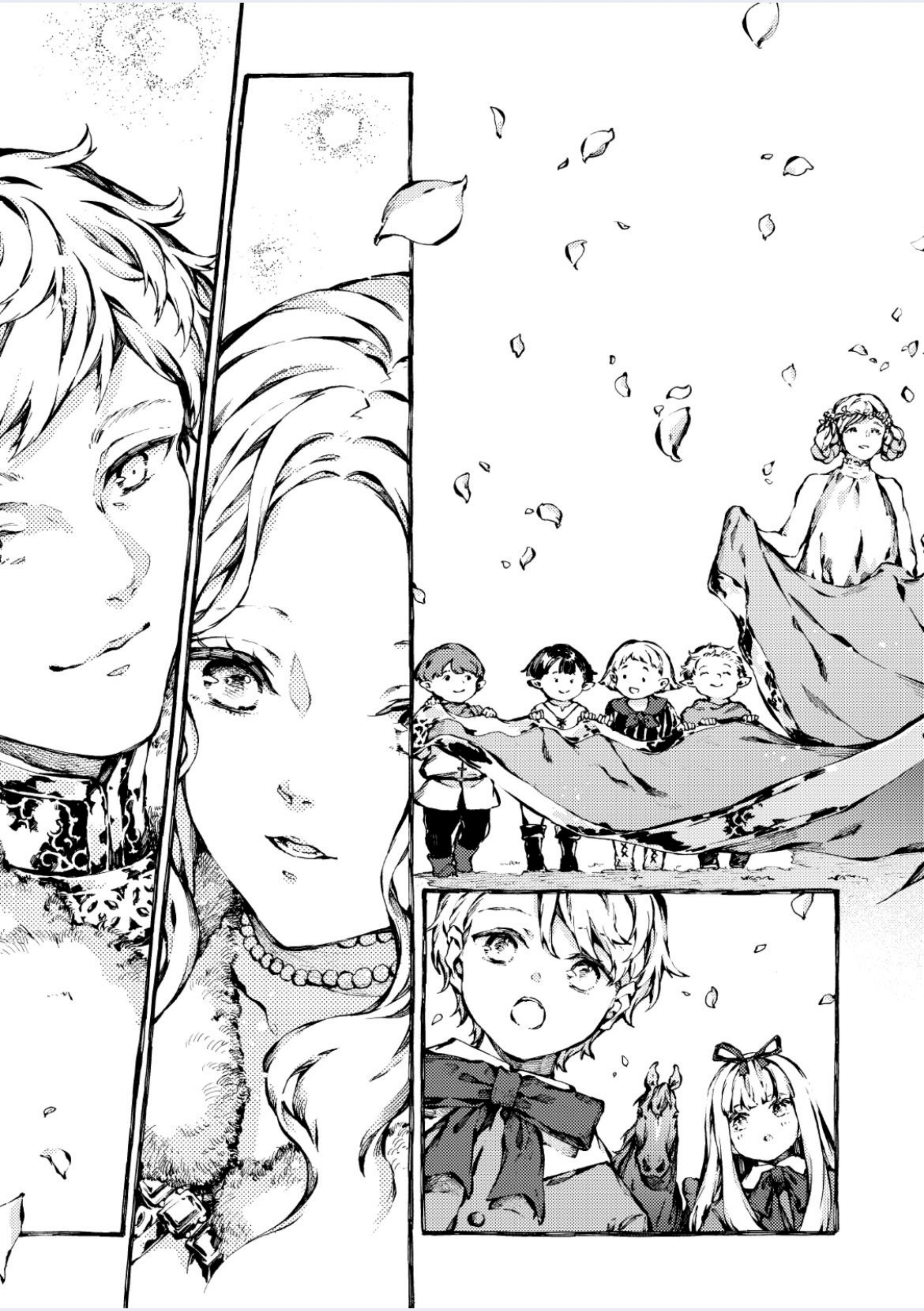
ナルニアの守りとなる木の実を植えるのは

あなたの手をおいてほかにない

このリンゴを川岸の土の柔らかいところに向かって投げなさい


ドドドドド
けっこう
それでは
これからナルニアのフランク王とヘレン女王の戴冠式を始めよう





いやあ
驚いた

これでこそ
本物のご主人だ

うちの
ご主人ときたら

おれに
負けないくらい
変わったね！

そうね

でも
耳もとで
コソコソ言うの
やめてくれる？

くすぐったくて
しかたないわ

さて


誰か
あそこの
木が
もつれたものを
ほぐしなさい

中に
何があるか
見てみよう



ドドド

ハッキ

きゃっ

きゃあ

ハッキ

…と

銀色の木

それに——

…金色の木？

…わっ！

アンドリュー
伯父さんだ！

時は
さかのぼり——



!?

!?

やっぱり
これは
木じゃ
ないんだよ！

木は
わめかない
もの

!!

!!

…

それなら
土の中から
掘りあげ
なくてはね

ガシッ

ギュッ

ドカッ！

ゴゴゴゴ

バタ

アスランが見て
指示をくれるまで

この生き物を
どこかに
閉じ込めておく
必要があるわね

ニョキ

ニョキ

ニョキ

ちょうどいい
ものが…

おや？

次は
どうする？

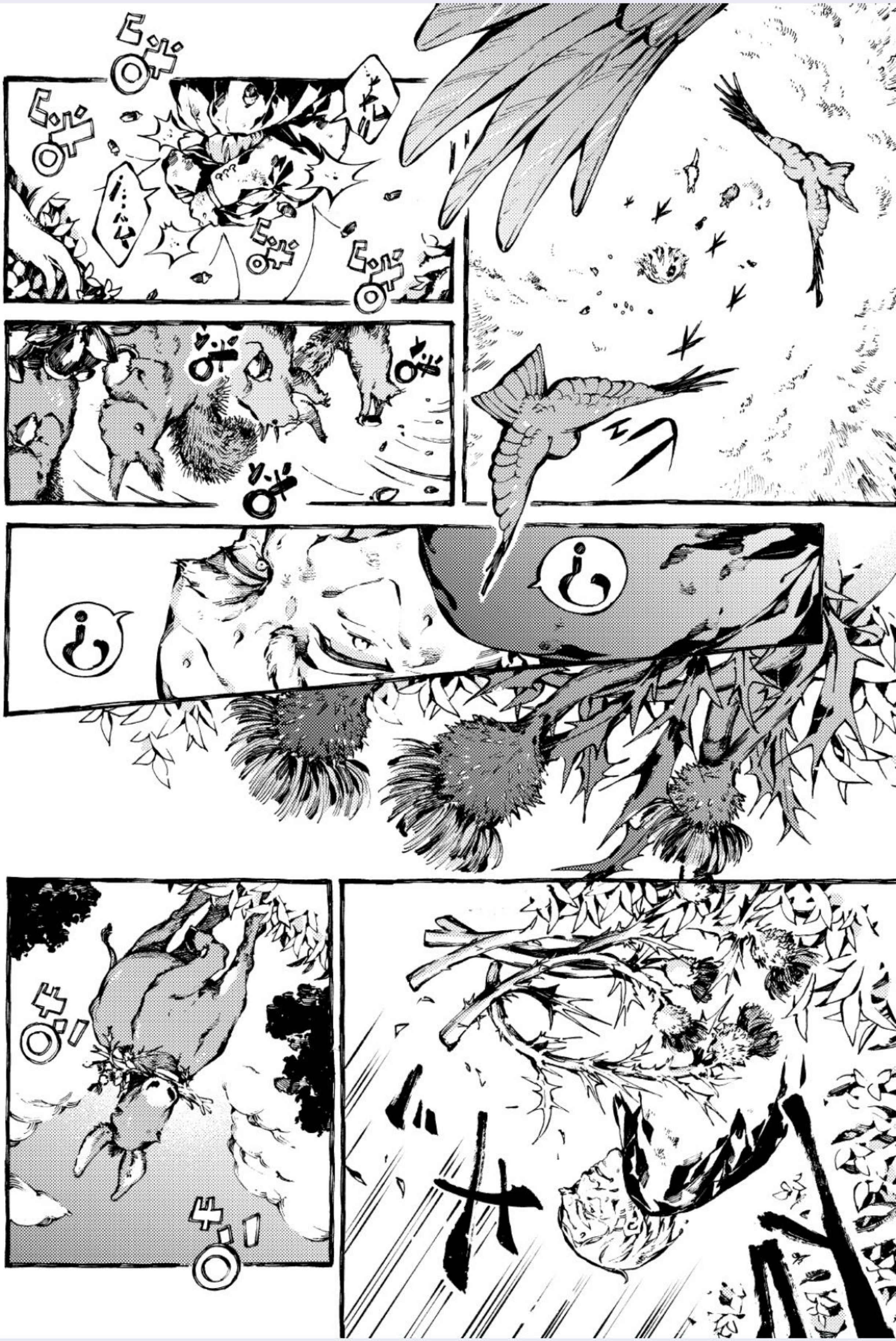
この生き物に
必要な
ことは……

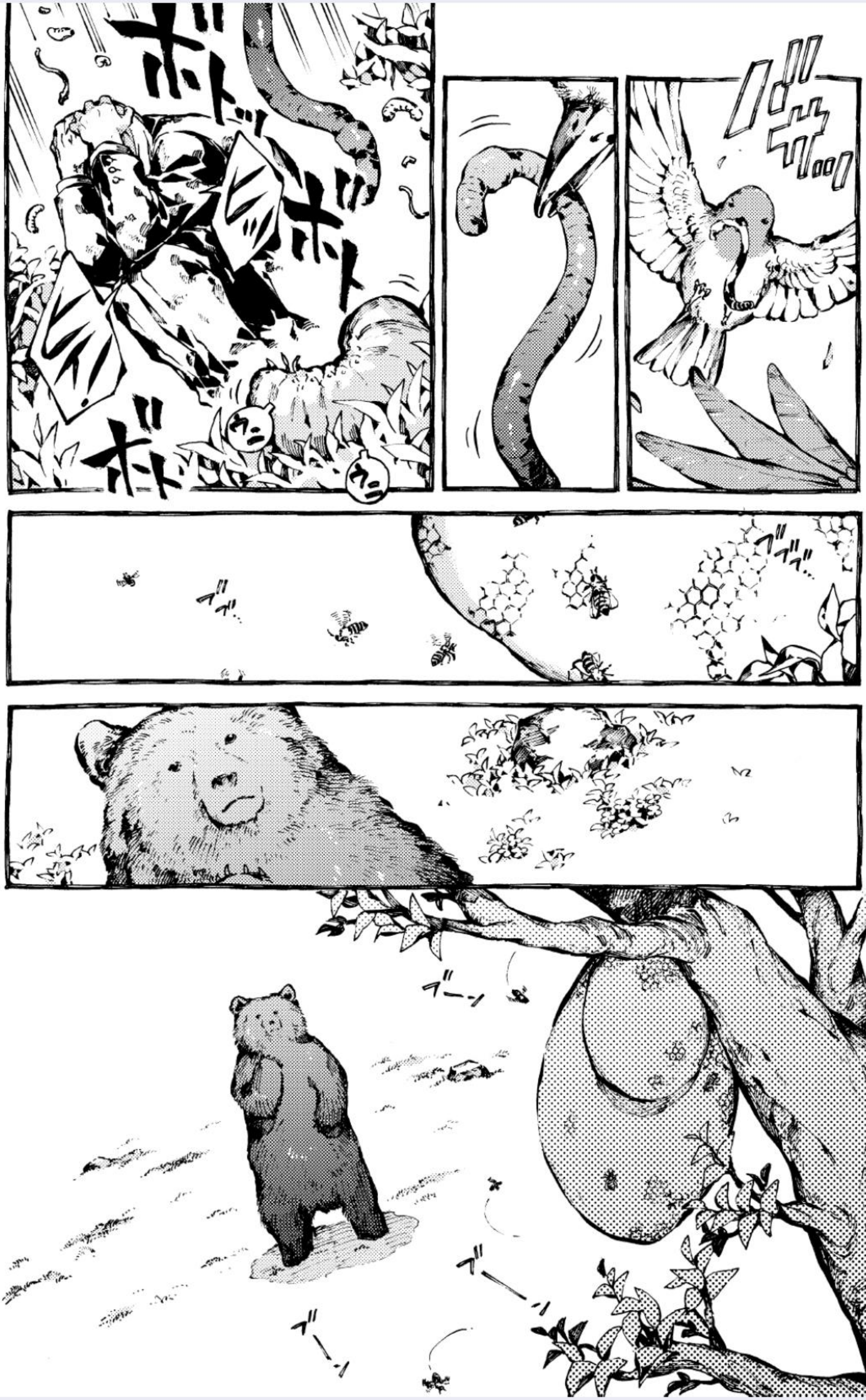
！

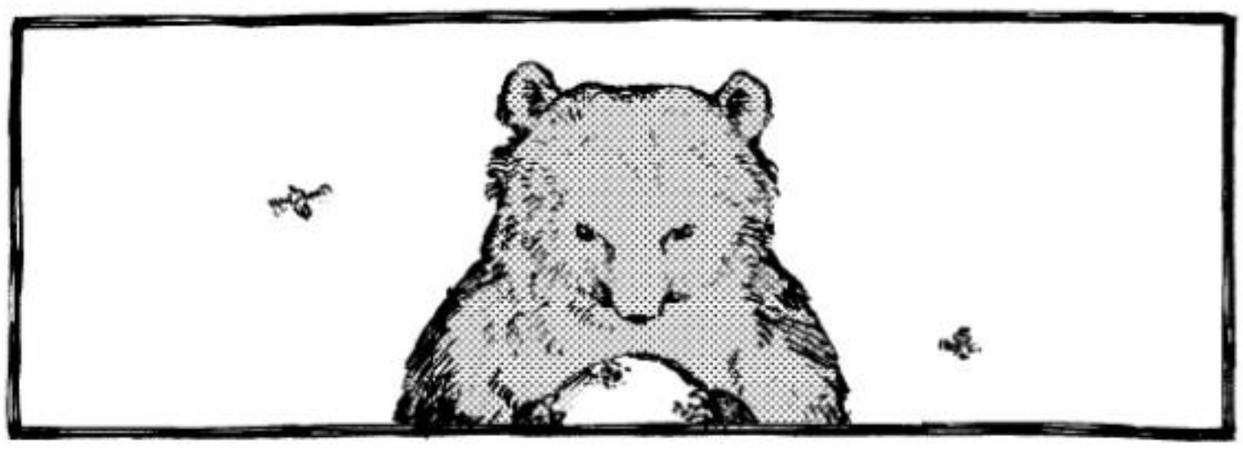
そうだっ！

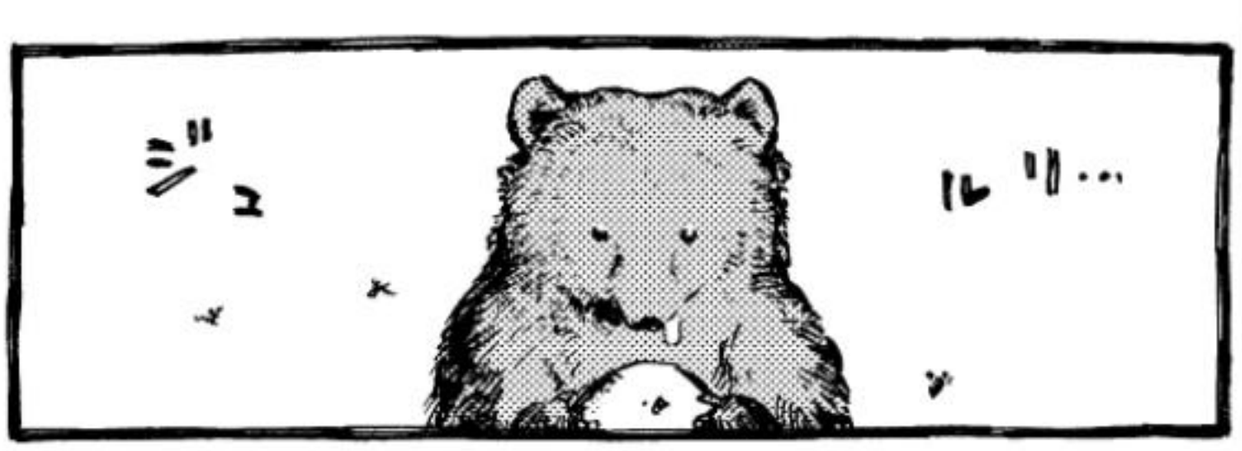
？

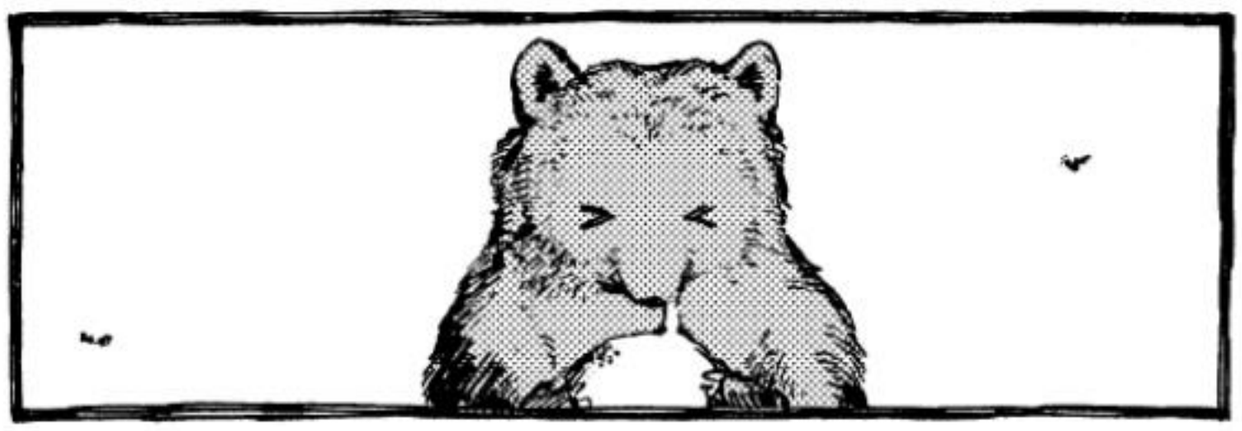
シン…


ن
ن
ن


ボトッ
ボトッ
ボトッ
ブ〜ン
ブ〜ン
ブ〜ン
ブ〜ン
ブ〜ン
ブ〜ン





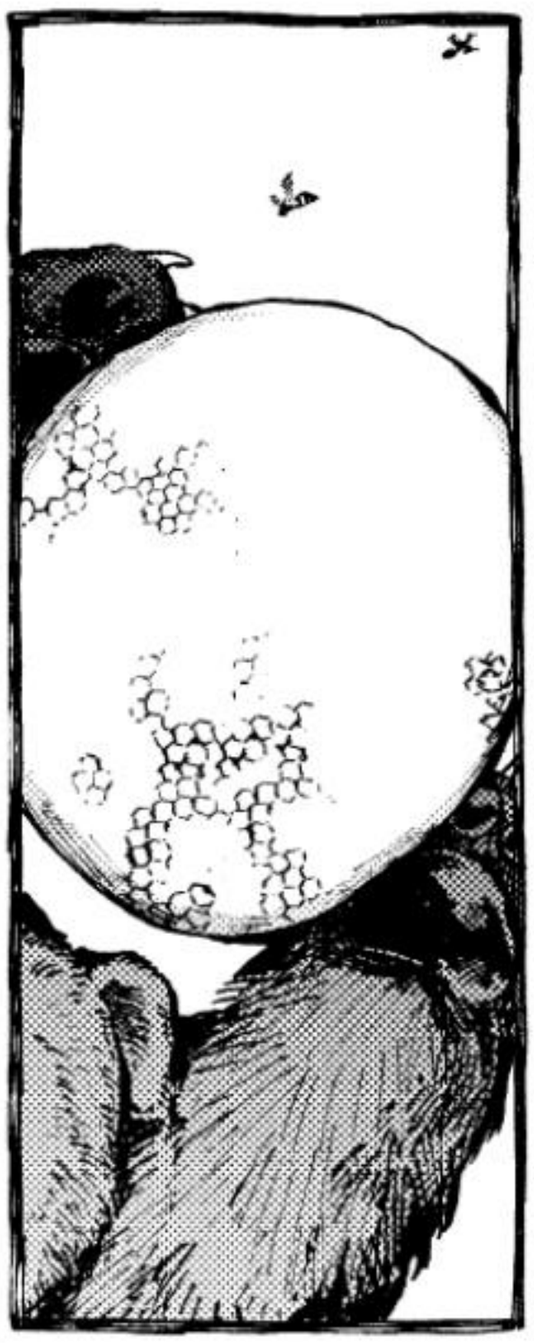














ドスッ

!!!

!!!

!?

ごはんを
目の前にして
どうしたんだ？

おれだったら
こんなに
嬉しいことは
ないのに

それが
よかったのさ

どっちにしろ

そいつの口には
しこたまたくさんの
ハチミツがはいって

!

いやあ

気に入った
気に入った！

アスランが

飼っていいって
言って
くれないかなあ

～～～

～～～～

あら

何か言葉を
話しているの
かしら？

いま

〈ブランデー〉って
言わなかった？

おれも
そんな言葉が
聞こえた
気がする

よし

こいつの名前は
ブランデーだ

…アスラン
忙しそう
ですね

ぼくたちも
手伝いに
行こう！

ギュ

ル

ル

ル






あの生き物を
連れてきなさい

ドゴォ

ガシッ

ドサッ

ドサッ

お願いです
アスラン

何か

その——

その人を
怖がらないように
させる言葉を
かけてあげて
くれませんか？

それから

その人が
二度とここへ
もどって
こないように
する言葉を
言ってやって
くれませんか？

もどって
きたがる
だろうか？

誰か
ほかの人間を
送ってよこすかも
しれません

アスラン

街灯から
もぎ取った鉄の棒が
街灯に育ったのを見て

ものすごく
興奮して
いましたから

もしかしたら——

わが子よ

それは
たいへん愚かな
考えだ

この世界は
これから
数日のあいだは
生命力に
満ちあふれている

わたしが
この世界に
生命を呼び出すために
歌った歌が
まだ空中にただよい

地中に
響いている
からだ

しかし
それは
長くは
続かない

だが
わたしはそのことを
この年老いた罰当(ばちあ)たりに
言い聞かせて
やることができないし
この者の気もちを
楽にしてやることも
できない

この者が
自ら選んで
わたしの声を
聞かなくなったからだ

わたしがこの者に
話しかけても
この者は
ただうなり声や
吼え声を聞いたと
思うだけだろう

ああ
アダムの
子らよ

あなたがたは
自分たちにとって
有益なる
言葉に対して

いかに巧みに
耳をふさいで
しまうことか！

だが

この者が
まだひとつだけ
受け取ることのできる
恵みがある

それを
与えてやろう

つづく

この者が
まだひとつだけ
受け取ることのできる
恵みがある

それを
与えてやろう

第28話　リンゴを植える（後編）

眠れ

眠って
しばらくの
あいだ

自ら招いた
すべての苦痛から
分かたれるがよい


ふいしょ
この者を
脇へ運んで
寝かして
おきなさい
さて
ドワーフ
たちよ！
あなたがたの
鍛冶(かじ)の技を
発揮する
ときがきた
王と女王のために
二つの王冠を
作ってみせてほしい

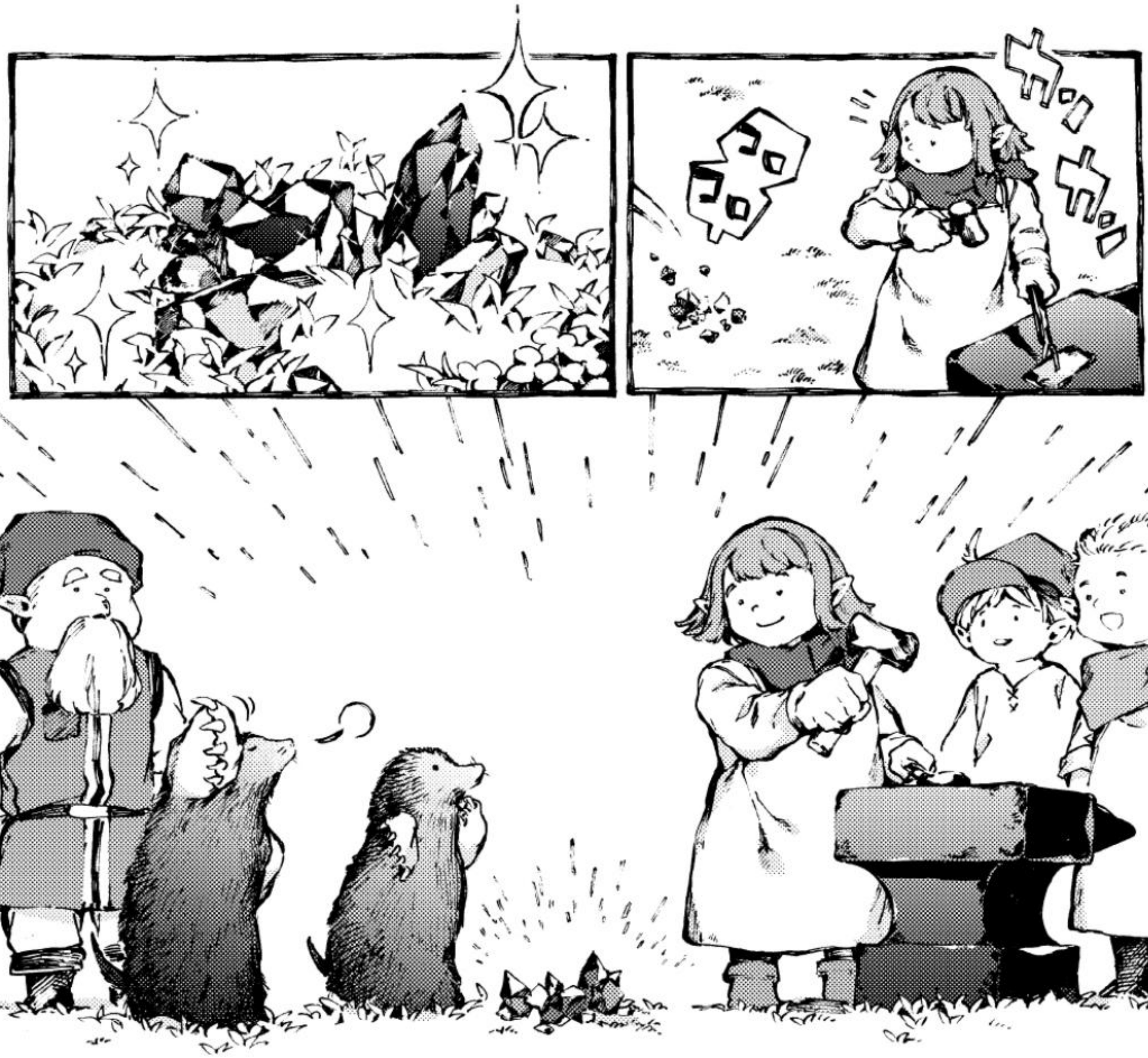
ドドド

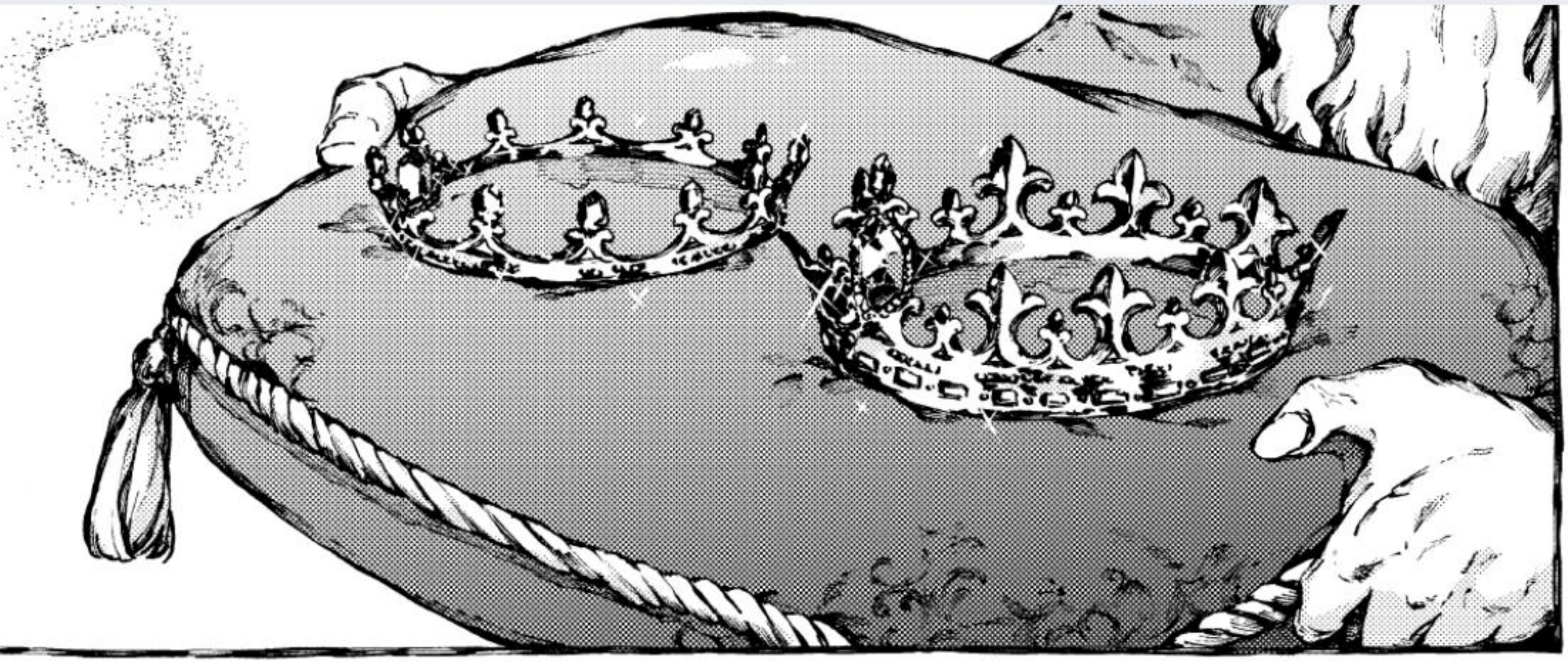
柔らかい
本物の金と銀で
できた木なんだ！

えっほ

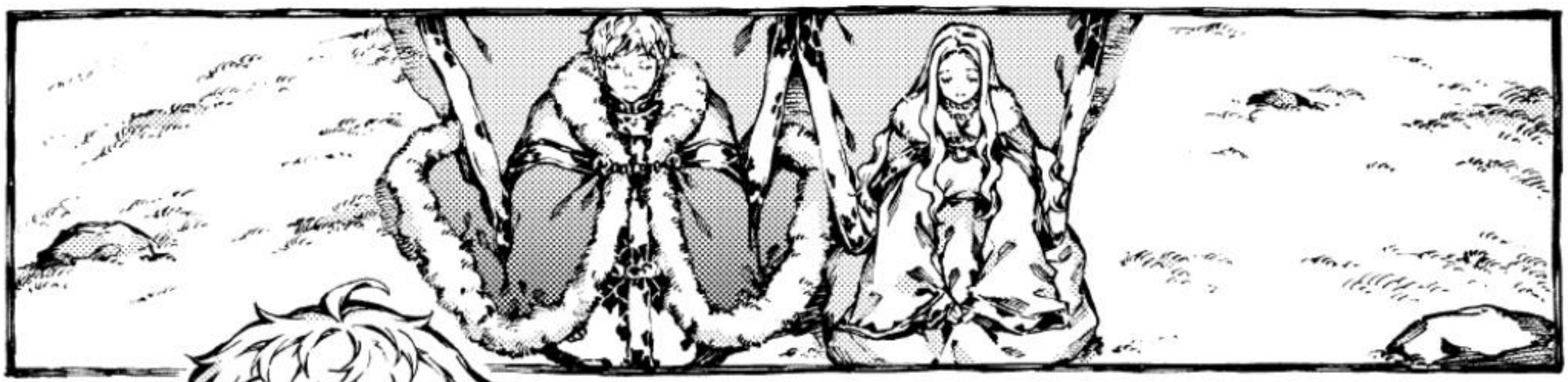
えっほ

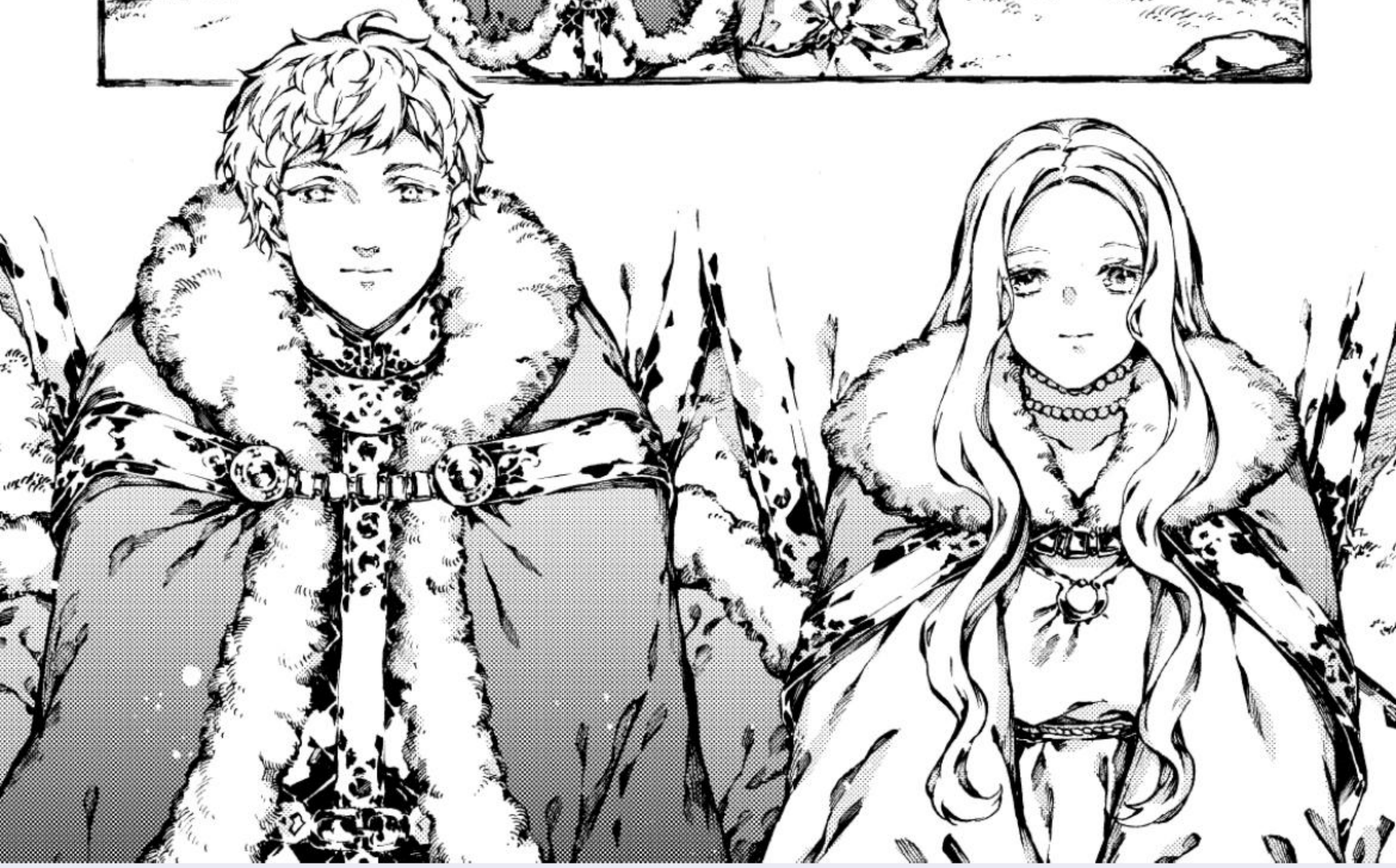
えっほ

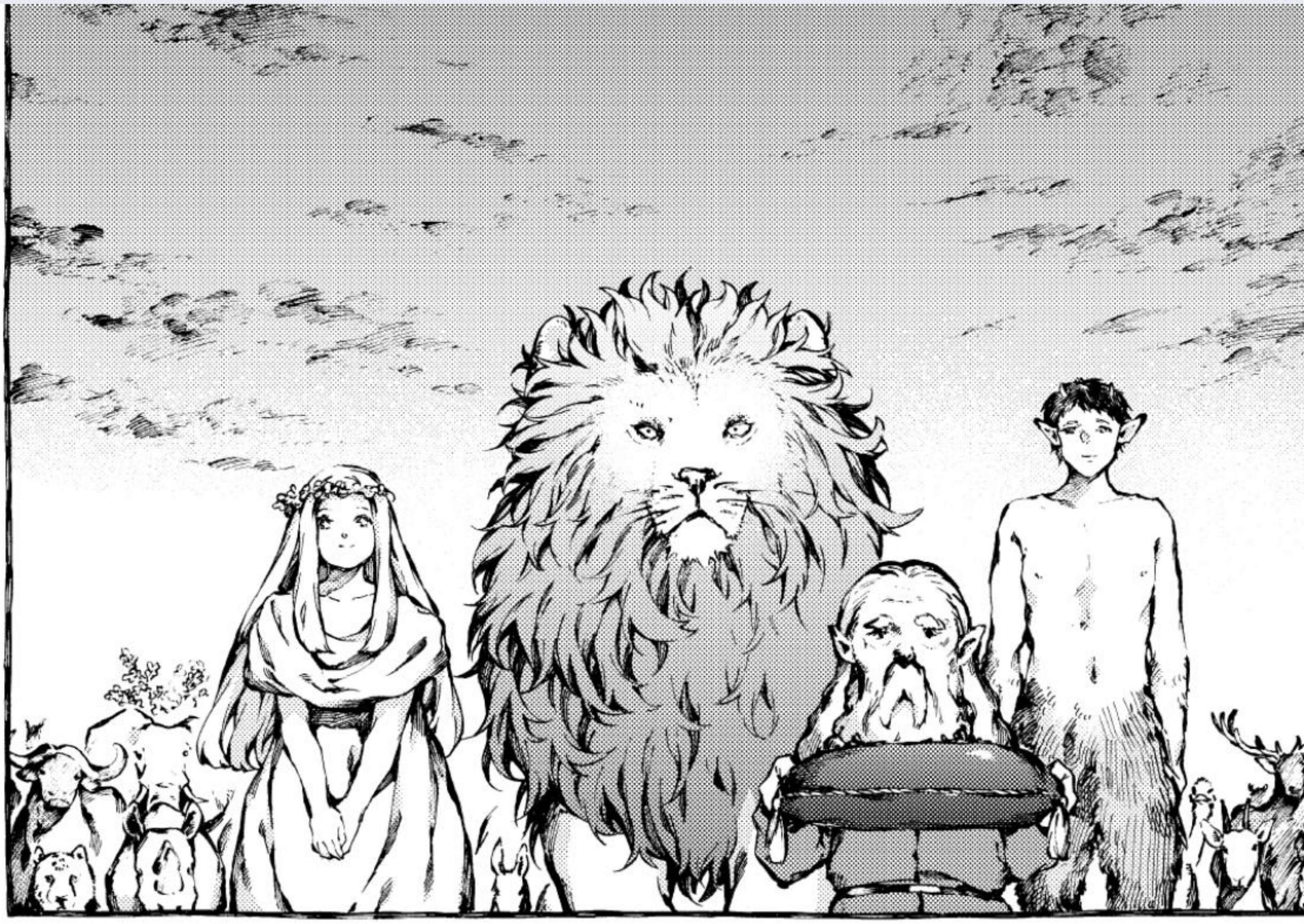

ドロドロ
ヨッ
ッ
カーン
カーン
カーン
カーン
カーン
ヒュー

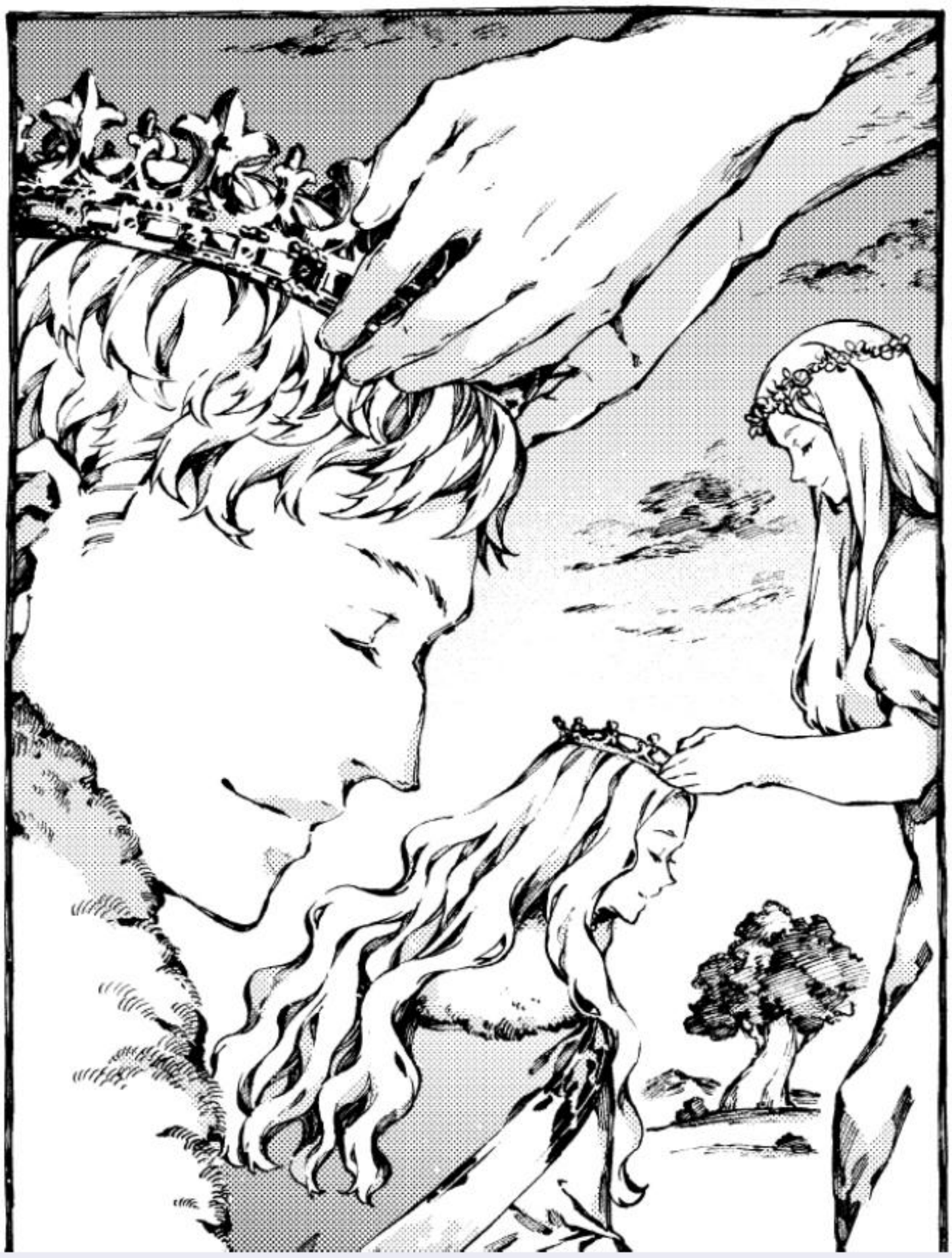






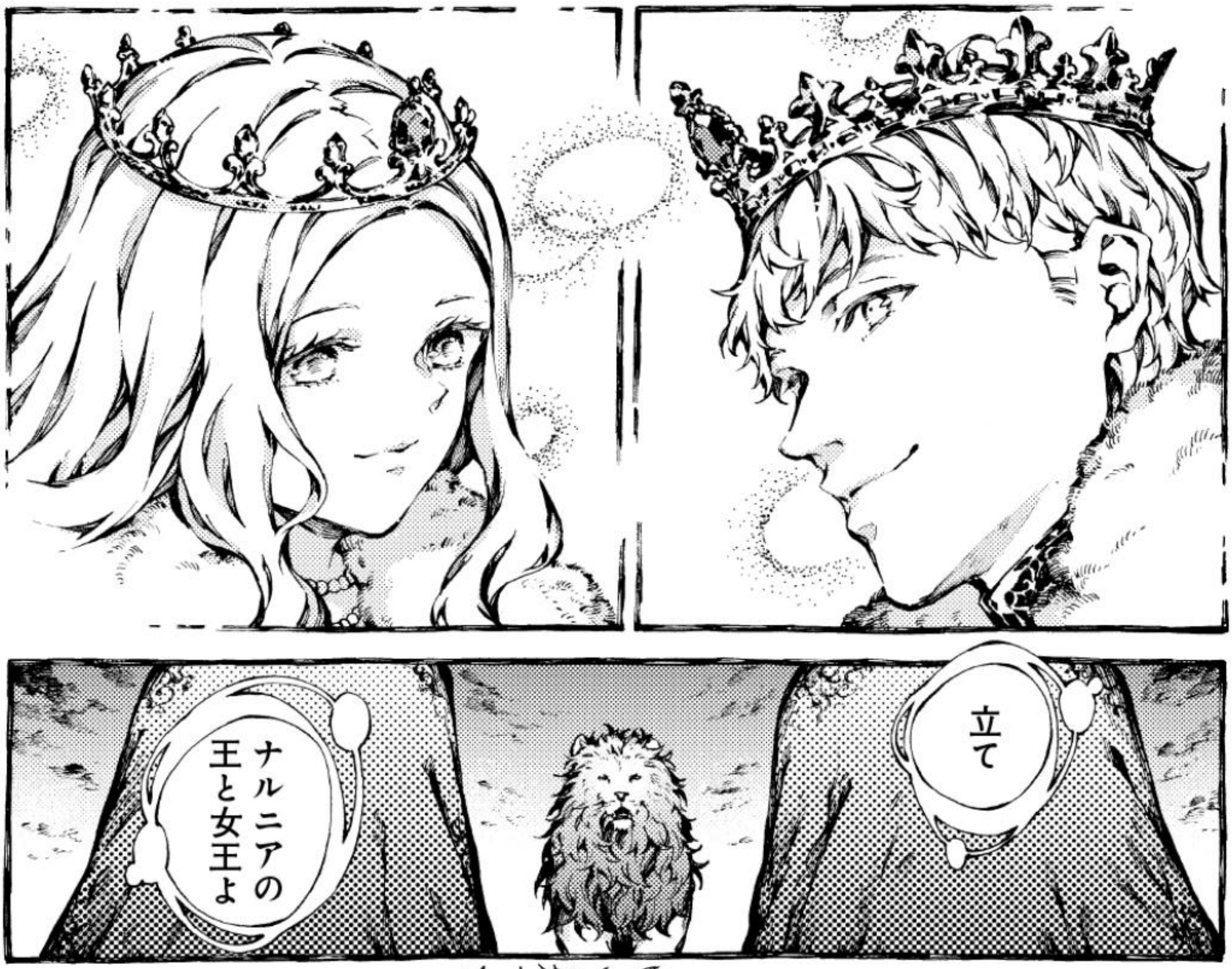











立て
ナルニアの
王と女王よ
ナルニアと
島々とアーケン国の
王たちの
父および母となる
者たちよ

正義を重んじ

慈悲深く

勇敢であれ

あなたがたに

祝福を与える

ドキ

ドキ

ドキ





アダムの息子よ

あなたはりっぱに種をまいた

そして

ナルニアの者たちよ

この木を守ることを第一のつとめと心得よ

この木は
あなたがたを守る
盾だからである

わたしが
あなたがたに
話した魔女は

この世界の
はるか北方へ
逃げのびた

魔女は
そこで
生きつづけ

暗黒の魔術を
用いて
力を増すであろう

しかし

あの木が
しげっている
かぎり

魔女はけっして
ナルニアへは
下りてこない

魔女はあの木から
百五十キロ以内には
近づこうとしないはずだ

あなたがたにとって
歓びと生命と健康を
もたらすあの香りが

魔女にとっては
死と恐怖と絶望
だからである

何かな

わが子らよ？

あの…

アスラン

言うのを
忘れたのですが

魔女はもう
あのリンゴを一個
食べてしまったのです

あの木のもとに
なったのと
同じリンゴです

それで……

あの…

だから
わたしたち

何か
まちがっているに
ちがいないと
思ったんです

アスラン

魔女が
あのリンゴの香りを
いやがるはず
ないんじゃないか

……って

なぜ
そのように
思うのか

イヴの
娘よ？

だって

魔女はリンゴを
食べたからです

わが子よ

リンゴの実は
うまいが

だから
こそ

残りのリンゴは
いまや魔女にとって
恐怖となったのだ

許されぬときに
許されぬ方法で
リンゴの実を摘んで
食べた者には

そのような
報いがある

そういう者たちは
以後ずっとそれを
忌みきらうように
なるのだ

なるほど

わかりました

ということは

魔女は許されない方法で実を摘んだから

魔法は効かないんですね？

ずっと歳を取らないとか

そういう効き目は起こらないんですね？

残念だが

魔法は効く

ものごとはつねに

その摂理（せつり）に従ってはたらくのだ

魔女は望むものを手に入れた

すなわち

衰えることのない強さと終わりのない命を手に入れた

手に入れたものを
してもだ

それに
満足することはだめだ

ぬへ……

だが

邪悪な心を
持つ者にとって

永遠の命は

ただ永遠の苦悩を
もたらすだけの
ものであり

魔女はすでにそのことを
悟りはじめている

アスラン

自分でも一個
食べそうに
なりました

ぼく——

もし
食べていたら

ぼくも——

その通りだ

わが子よ

なぜなら
魔法の果実は
つねに効き目を
あらわす

——そうでなくては
ならないからだ

しかし

自分で
勝手に果実を
摘んだ者には
幸せは
もたらされ
ない

もし

ナルニアの何者かが
命令によらず
リンゴの実を盗んで
ここにナルニアの
守りとして
植えたならば

それでもその木は
ナルニアを
守ることになろう

しかし

それは
ナルニアを
チャーンのごとき
強大かつ
残虐な帝国にして
守るのであって

わたしが考えるような
優しく思いやりに
満ちた国にして
守るのではない

そして
わが子よ

魔女はもうひとつ
別の誘惑も
しなかったか？

はい
アスラン

家にいる母に
リンゴを
持って帰れと
言われました

よいか

そうすれば
たしかにリンゴは
母親の病を
治すことに
なったであろう

しかし
それは
あなたにも
母親にも
歓びをもたらしは
しない

むしろ
病で死んだほうが
よかったと思うときが
来るにちがいない

いつか
かならず
あなたも母親も
そのことを
ふりかえり

母さんの命を
救う希望は
もう
なくなったんだ

…でも
アスランは
起こりうる未来を

…愛する人と
死別するより
もっと恐ろしい運命が
あることを
予見していたんだ――

わが子よ

それは
リンゴを
盗んだ場合に
起こりうる
べきこと

…という
意味なのだ

これから
起こるで
あろうことは
ちがう

これから
わたしがあなたに
与えるものは

歓びを
もたらすで
あろう

それは

あなたの
世界においては
永遠の命を
さずけるもの
ではない

しかし

病を
治す力はある

行きなさい

そして

あの木から
リンゴを一個
もいでくるがよい





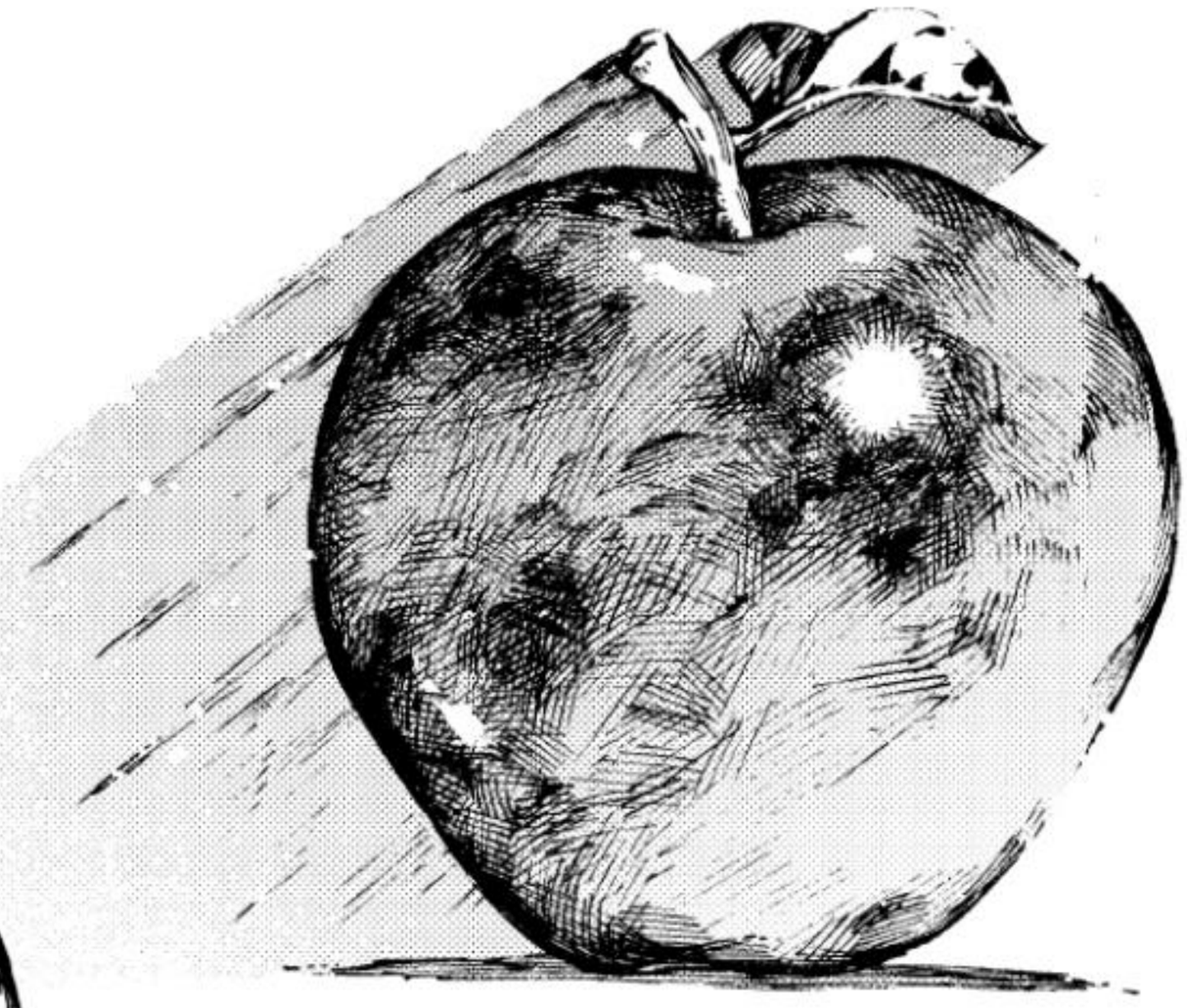
お願いです

家に帰っていいですか？



つづく

第 29 話　この物語は終わり、ほかのすべての物語が始まる（前編）



わたしと
ともにあるときは

指輪は
必要ない







来なさい

帰るべき
ときが来た

しかし

その前に
言っておかねば
ならぬことが
二つある

ひとつは
警告

ひとつは
命令だ

子どもたちよ

ここを見なさい

あのくぼみは
水たまりだった

あなたがたが
この前ここに
来たときには

水たまりは
ない

いま

その水たまりに
飛びこんだら

そして

死にかけた太陽に
照らされた
チャーンの廃墟に
至った

あの世界は
終わったのだ

存在すら
しなかったかの
ように

アダムと
イヴの
子孫は

これを警告と
受け取るがよい

わかりました

アスラン

でも

わたしたちの
世界は
あれほど悪くは
ないでしょう

アスラン？

いまの
ところは

イヴの娘よ

いまのところは

まだ

しかし

しだいに似てきている

あなたがたの種族のよこしまな心を持つ者が〈滅びの言葉〉と同様の邪悪な秘密を見出し

それを用いて生きとし生けるものを皆殺しにする可能性がないとは言いきれぬ

それに
まもなく

ごく
近い将来

あなたがたが
老いるより前に

女帝
ジェイディスと
同じく

歓びや正義や慈悲を
一顧(いっこ)だにせぬ暴君が

世界の
さまざまな大国を
治めるように
なるであろう

あなたがたの世界は

用心するがよい

そして

命令のほうだが

これが警告だ

できるだけ早く

あなたがたの伯父から魔法の指輪を取り上げ

二度と誰も使うことがないよう土に埋めなさい

ゴゴゴ





——とほうもない
優しさと力強さで
満たされていく…

なんて幸福で
賢明で善良な
気もちなんだろう！

自分は
これまでほんとうに
生きていたのだろうか

目ざめて
いたのだろうか

この記憶は
一生 頭の中で
生きつづけ

悲しいことや
怖いことや
腹のたつことが
あっても

何もかも
きっと
だいじょうぶと
思えるのだ——

この金色の至福に
満たされた記憶が

いつもすぐそばに
あるのだという感覚が
よみがえり

みみみ…

ガヤ
ガヤ
ガヤ

意識がもどったぞ！

気分はどうですか？

すぐに救急車が来るからね

驚いたな！

あんな冒険をしてきたのに

ぜんぜん時間がたってないんだ

おい！女はどこに行った！

馬は？

そっちを探せ!!

…誰も僕たちに気づいていない

玄関が開いてる！

はわわ…

この隙に…

伯父さん

行くよ！


…まずい！

屋根裏部屋へ
行って

残っている
魔法の指輪を
隠すつもり
なんじゃ…！



ドン

ガヨ ガヨ

バタ バタ

ガヨ ガヨ

ドタドタドタ

ビクッ

ポリー

……

ギッ

残りの指輪

たのめる？

ぼく

母さんの
ところへ
行きたいんだ

わかった

じゃあとでね

ガチャ…




ゴト…



あら

ディゴリー

なんて
すてきな
リンゴなの

つづく

あら

ディゴリー

第 30 話　この物語は終わり、ほかのすべての物語が始まる（後編）

なんて

すてきな

リンゴなの

母さん
食べてくれる
でしょ？
お願い
お医者様が
なんて
おっしゃるかしら
……でも
ほんとうに…

ﾋﾟﾛﾘﾝ

ﾋﾟﾛﾘﾝ

食べられそうな気がしてきたわ

なんだか

はい


ガヴ
ガヴ
ドスン…










ｲﾔ...





―こっちにもどってきてからというもの

何もかもがあまりにふつうに見えて魔法のかけらも感じられなかった……

リンゴの魔法はほんとうにあるのだろうか…

でも……



ケタリーさん

パタン

わたしは
長いこと
医者をやって
おりますが

こんなに
変わった症例は
はじめてです

なんというか

その……

奇跡のよう
ですな

あの
坊やには
いまの段階では
まだ黙って
おきましょう

いたずらに
望みを抱かせるのも
かわいそうですから

しかし
わたしの
考えでは——

ハァ…

ピンポーン

お母さんの
ことだけど？

どうだった？

うん

——たぶん

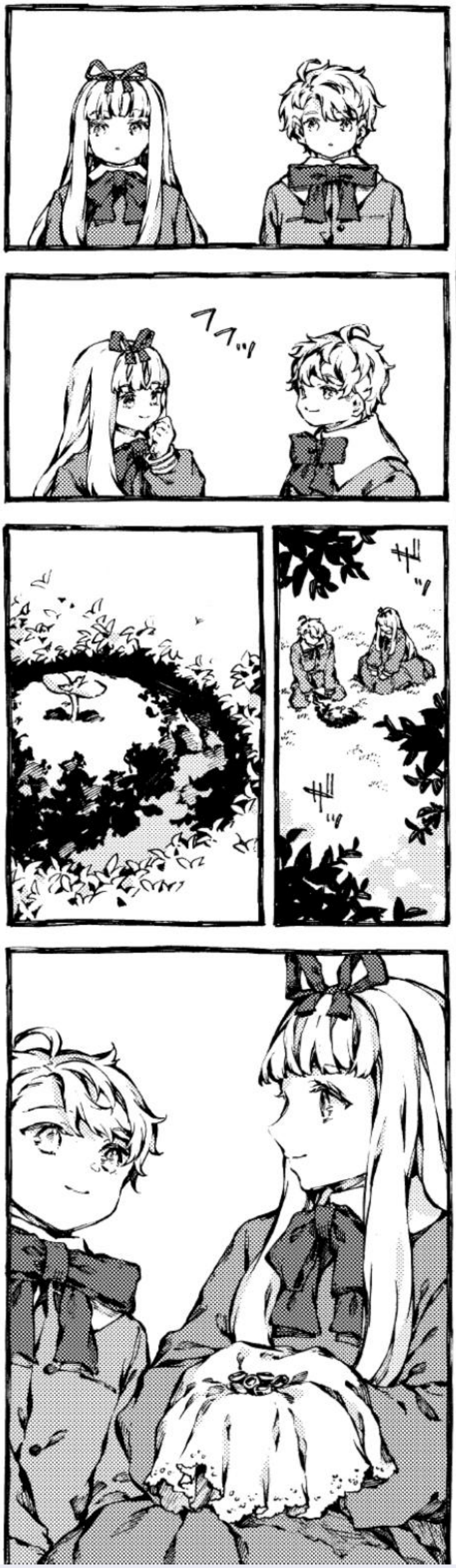
うまくいくような
気がする

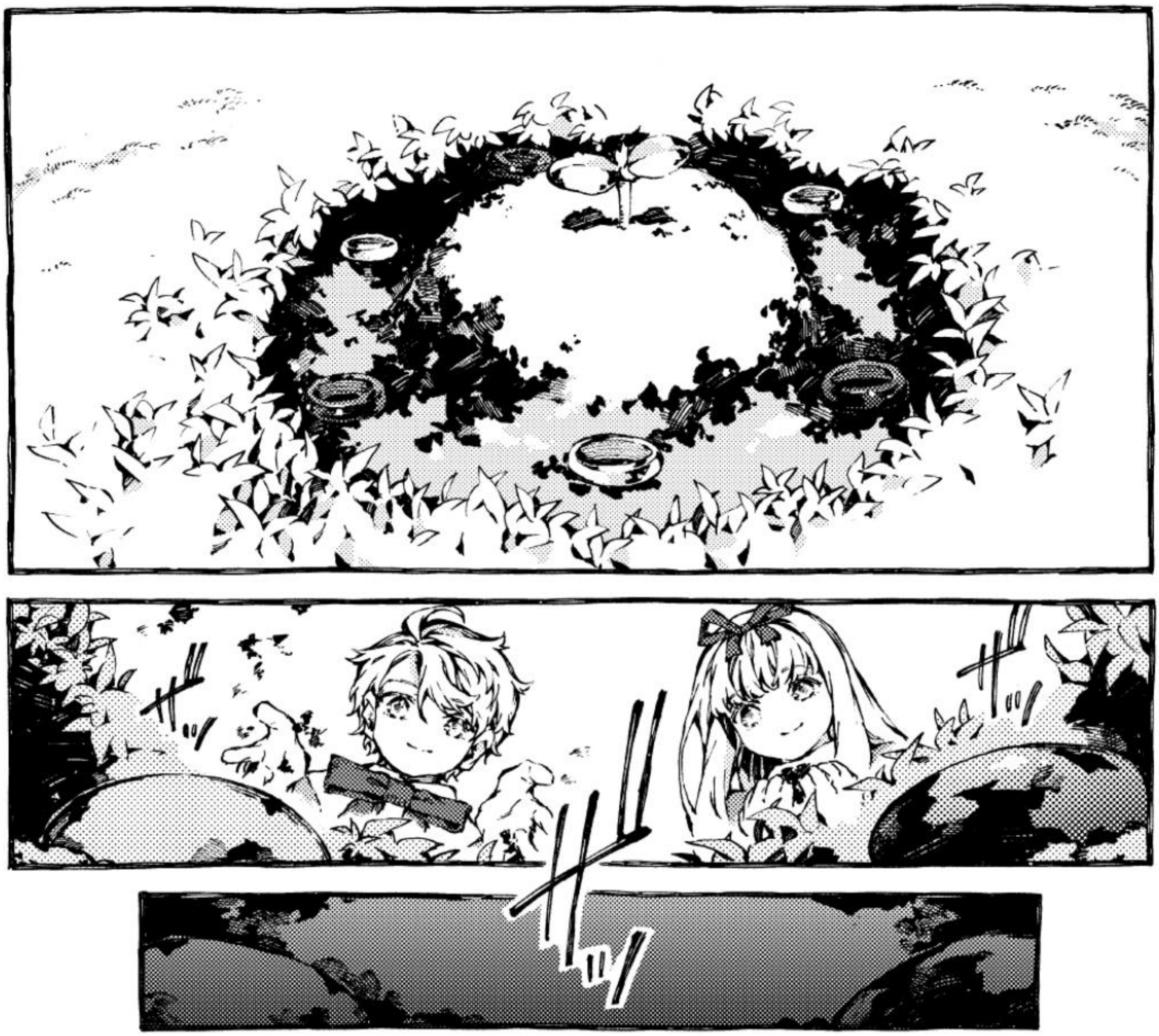
でも
できれば　そのことは
まだあまり
話したくないんだ

ど指輪は
どうなった？

ぜんぶ
持ってきたわ

ほら
だいじょうぶよ
わたし
手袋してるから
埋めちゃいましょ
そうだね
きのう
リンゴの芯を
埋めた場所に
目印をつけて
おいたんだ
あ





——ものごとが
悪いほうへ
向かうときは

ますます
悪いことが
重なったり
するものだが

いったん
良いほうへ
向かい
はじめると

どんどん
良くなっていく
ものだ

一週間ばかり
たつと

ディゴリーのお母さんが
快方に向かっているのが
はっきりと
わかるようになった

そして
一カ月後には

二週間も
すると

庭に出て
すわって
すごせるように
なった

家の中が
すっかり
様変わりした

レティ伯母さんは
お母さんが望むことは
何でもかなえてくれた

窓は
開け放たれ

重苦しい
カーテンは引かれて
部屋の中が明るくなり

家のあちこちに
新しい花が
飾られ

おいしい
料理が増え

古いピアノも
調律されて

お母さんがふたたび
歌を歌うようになり

ディゴリーや
ポリーと
笑いころげて遊んだ

まあまあ
メイベル

あなたときたら
三人の中で
いちばん大きな
赤ちゃんね

楽しい生活が
六週間も
続いたころ

インドにいる
お父さんから
長い手紙が届いた

それは
すばらしい
知らせだった

年老いたカーク家の
大叔父さんが
亡くなり

いまではお父さんが
大金持ちになった
という知らせだった

それで
お父さんは
仕事をやめて
インドから帰ってきて

この先はずっと
イギリスにいる
ことになるという
話だった

そして
これからは

ディゴリーが
小さいころから
さんざん話にだけは
聞いていたけれど

まだ一度も
見たことがなかった
郊外のすごく大きなお屋敷に
住むことになるのだという

ブドウ畑が
あって

森があって

その背後には
山もあるのだ

川があって

庭園があって

温室があって

厩もあって

犬舎もあって

そのお屋敷には
鎧かぶとが
たくさん残っていて

ディゴリーは

これでようやく
家族が幸せに
暮らせると安心した

ポリーとディゴリーは
その後もたいへん
仲の良い友だちで

ポリーは
休みのたびに

しょっちゅう
田舎にある
ディゴリーの
美しい屋敷へ
泊まりに行き

乳しぼりや

パンを
焼くことや

そこで
馬に
乗ることや

泳ぐことや

木登り
おぼえた

ナルニアでは
けものたちが
争いひとつない
歓びに満ちた
日々を送り

何百年にも
わたって

フランク王と
ヘレン女王と
その子どもたちは
ナルニアで
幸せに暮らし

平和を乱す
ようなものは
魔女も
それ以外の敵も
あらわれなかった

二番目の息子は
アーケン国の
王となった

女の子たちは
森の神や川の神と
結婚した

男の子たちは
ニンフと結婚し

魔女が
（自分ではそうとは
知らずに）
植えた街灯は

昼も夜も
ナルニアの森を
照らし

その場所は
〈街灯の荒れ地〉と
呼ばれるように
なった

ディゴリーが
裏庭に埋めた
リンゴの芯から
出た芽は

りっぱな木に
育った

そのリンゴは
わたしたちの
世界の
土で育ち

アスランの
声が届かない
遠い世界

ナルニアの
若々しい空気からは
遠く離れた世界で
育ったので

ディゴリーの母親の
ように死にそうな
病人を回復させるほど
魔力のある実を
つけることはなかった

とはいえ

その木は
イギリスのほかの
どんな木よりも
美しい実をつけたし

魔法の力こそ
ないけれど

シャワッ

とても
おいしい
リンゴだった

その木は
幹の奥深く

おそらく
樹液の中に

親であった
ナルニアの
リンゴの記憶を
とどめていたらしい

ときどき
風も吹いて
いないのに

イギリスに生えている
リンゴの木が
不思議に
揺れることがあった

そんなときは
ナルニアで
強い風が吹いていて

ナルニアのリンゴの木が
強い南風に揺れたり
かしいだりしているのを
感じて

イギリスに育った
リンゴの木も
枝を震わせたの
だろうと思う

いずれにしても

のちになって

このリンゴの木が
魔法の力を
やどしていたことが
証明された

ディゴリーが
中年になって

有名な学者で
大学教授

世界各地を旅する
旅行家

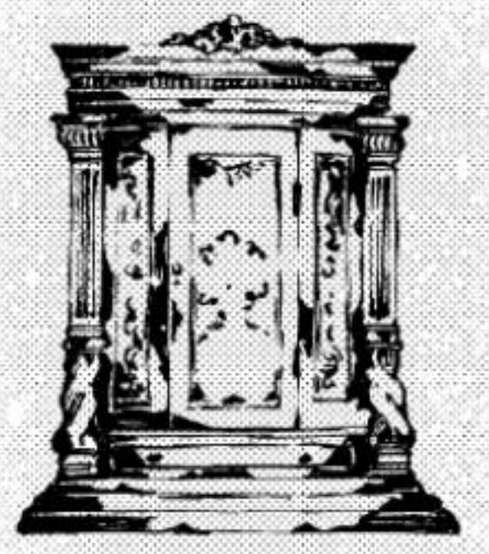
ケタリー家の
古いテラスハウスが
ディゴリーのものに
なったころ

イギリス南部を
強い嵐が吹き荒れて

リンゴの木が
倒れてしまったのだ

ディゴリーは
倒れた木を切り刻んで
薪にしてしまうのが
しのびなくて

材木の一部を使って
衣装だんすを作らせ



それを田舎の
大きな屋敷に
置いた

ディゴリー自身は
その衣装だんすが持つ
魔法の力に
気づかなかったけれども

それが

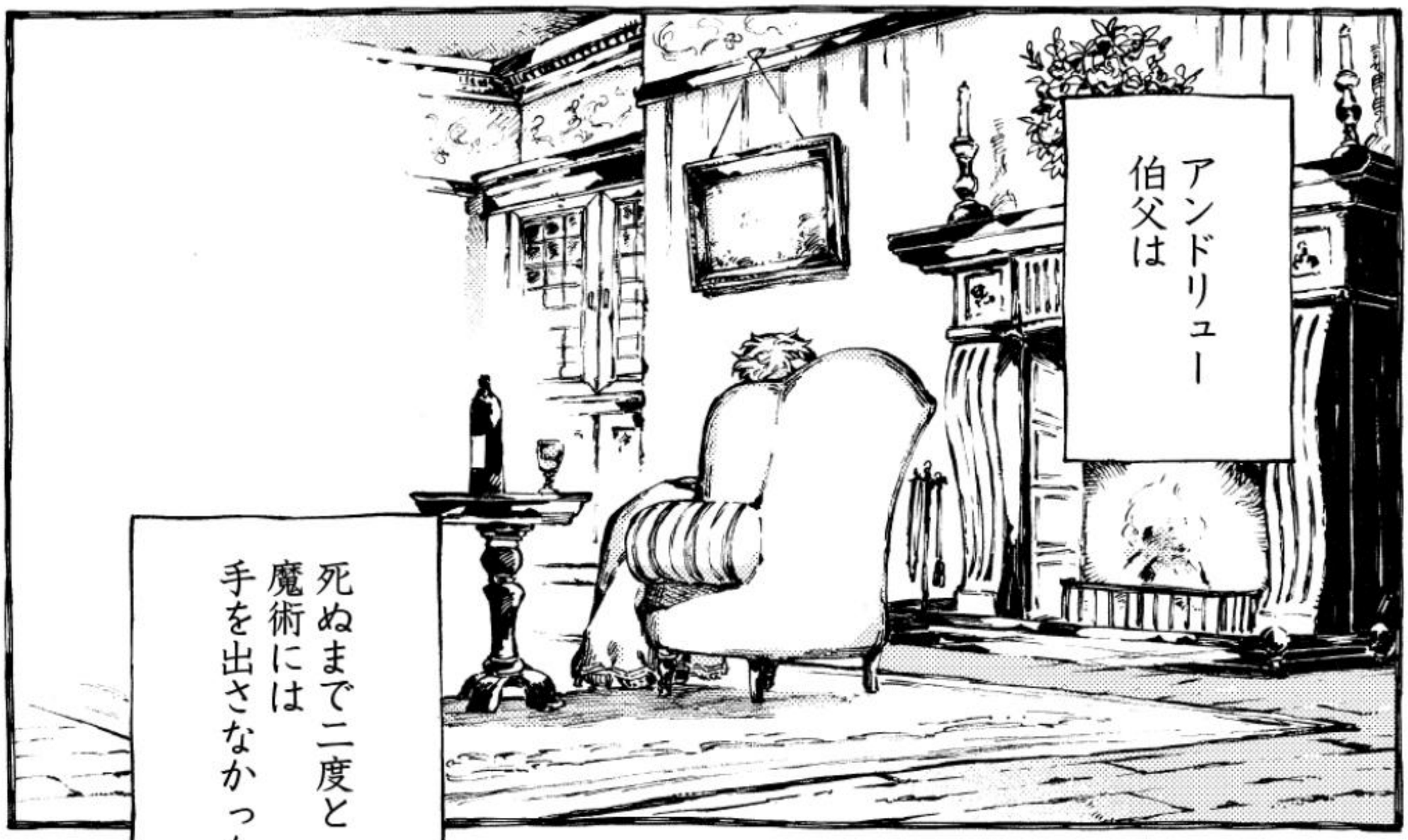
気づいた人が
ほかにいた

ナルニアと
わたしたちの世界との
行き来の始まりとなった

ディゴリーたちが
郊外の大きな屋敷で
暮らすことになったとき

一家は
アンドリュー伯父も
いっしょに
連れていった





死ぬまで二度と
魔術には
手を出さなかった

それなりに
教訓を
学んだようで

歳を取ってからは
以前にくらべたら
感じのよい老人に
なり

自己中心的な
ところも
少なくなった

アンドリュー
伯父はいつも
お客を
ビリヤード室に
招き入れて
人払いをし

キョロ

キョロ

とある異国の
王族である
神秘的な貴婦人と

ロンドンを
馬車で乗り回した
思い出話を
披露するのが
好きだった

悪魔のような
気性の
女でしたがな

しかし

そりゃあ
いい女
でしたぞ

――ああ

そりゃもう
いい女でした

おわり